国際教養大学アジア地域研究連携機構研究報告書　第１集

青森県大曲遺跡資料
青森県砂沢遺跡資料

－新谷雄蔵氏収集資料の報告－

２０１６
国際教養大学アジア地域研究連携機構
文化遺産研究報告　第１号

例　　言

1　本書は、研究代表者である根岸に与えられた、2015年度国際教養大学教員研究費「東北地方における文化遺産の保存と活用に関する基礎的研究」による研究成果報告書である。本書の各項目について、各節の末に執筆者名を記して文責を明らかにした。実測図・拓本・トレース図は主に研究代表者と研究協力者が作成し、整理遺物の属性表は共同で作成した。

2　本研究は、根岸　洋（国際教養大学アジア地域研究連携機構助教）が研究代表者を務めたほか、研究協力者として以下のメンバーの参加があった。

三浦　一樹（弘前大学大学院人文社会科学研究科修士課程）

長谷川大旗（弘前大学大学院人文社会科学研究科修士課程）

また実測図及びトレース図作成に関しては、齋藤瑞穂（新潟大学）、大坂　拓（北海道博物館）、折登亮子（青森県教育庁文化財保護課）、堤絵莉子（青森県庁）、小林晃太郎・鎌田光相・石川世将・大内望咲・落合美鈴（弘前大学人文学部学生）の各氏の、各種資料のスキャニング及び図面整理に関しては矢野行一氏（国際教養大学国際教養学部学生）のそれぞれ御協力を得た。

3　本書は、故・新谷雄蔵氏収集品のうち、大曲遺跡（青森県鰺ヶ沢町）、砂沢遺跡（同弘前市）出土資料についての正式報告である。本書で報告を行ったこれらの資料は、大部分が青森県立郷土館に所蔵されているほか、一部は新谷照氏の自宅等に所蔵されている。整理・報告書作成における実測図、写真等は、現在、国際教養大学アジア地域研究連携機構、青森県立郷土館が保管している。

4　本書に掲載した遺跡位置図（図3・6）は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複写して利用した。また空中写真（図4）については、米軍撮影写真（国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」コース番号M1011、写真番号90）を複写して利用した。

5　図28～51の新谷氏による実測図集は各土器の出土遺跡を記したものであり、かつ氏の砂沢式土器の研究に関わる貴重な一次資料であるため、所蔵者の許可を得た上で本書に掲載した。結果として本研究にて作成した実測図（図7～23）と新谷氏による実測図とは、殆どの個体で重複している（表2参照）。また、付編の「青森県津軽地方における砂沢式系土器群の分類的研究（中間報告）」についても、学史的重要性を鑑み、所蔵者の許可を得て転載した。写真図版に関しては、大半を中村哲也氏（青森県立郷土館）のご提供を受けた。これらの写真は青森県立郷土館の所蔵するデジタル資料であることを明記する。また、一部に新谷氏が所蔵していた写真フィルムからの転載も含まれる。

6　土器・土製品の色調表記等には、『新版標準土色帖　2006年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務室・財団法人日本史色彩研究所　色票　監修）を使用した。

7　本報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。

新谷　照　菊池由紀子　川村佑子　黒滝十孝　森田真理子　新谷　譲　三上　熙
中村哲也　伊藤由美子　鈴木克彦　齋藤　岳　杉野森淳子　岡田康博　中田書矢
榊原滋高　藤原弘明　木村　高　設楽博己　石川日出志　茅野嘉雄　高橋龍三郎
松本建速　関根達人　上條信彦　大坂　拓　小笠原雅行　齋藤瑞穂　品川欣也
福田友之　佐藤祐輔　市川健夫　永嶋　豊　中門亮太　福田正宏（順不同　敬称略）
青森県立郷土館　青森県教育庁文化財保護課　鰺ヶ沢町教育委員会　五所川原市教育委員会

目　　次

例言
目次

第１章　研究の概要
　第１節　研究の目的 ･･1
　第２節　研究の経過と方法 ･･1
第２章　整理の成果
　第１節　整理遺物等の保管状況と照合作業 ･･････････････････････････････････3
　第２節　新谷氏収集品の出土遺跡について ･･････････････････････････････････7
　第３節　出土遺物について ･･13
第３章　研究報告
　第１節　大曲遺跡出土土器からみる砂沢式土器の編年･･････････････････････････65
　第２節　北上川中流域における砂沢式併行土器 ･･････････････････････････････77
　第３節　総括 ･･86
註 ･･87
引用文献 ･･88

付編
新谷雄蔵（1973）「（発表要項）青森県、津軽地方における砂沢式系土器群の分類的研究（中間報告）」
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　新谷雄蔵氏が青森県立郷土館に寄贈した整理資料……6
図２　東北北部における砂沢式期の主要遺跡……6
図３　大曲遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布……10
図４　1948年当時の米軍による空中写真と大曲遺跡・建石(3)遺跡の位置……10
図５　建石(3)遺跡、大曲遺跡の既往調査および資料採集……11
図６　大曲遺跡周辺における弥生時代遺物の出土地点……12
図７　新谷雄蔵氏収集品の実測図(1) ……17
図８　新谷雄蔵氏収集品の実測図(2) ……18
図９　新谷雄蔵氏収集品の実測図(3) ……19
図10　新谷雄蔵氏収集品の実測図(4) ……20
図11　新谷雄蔵氏収集品の実測図(5) ……21
図12　新谷雄蔵氏収集品の実測図(6) ……22
図13　新谷雄蔵氏収集品の実測図(7) ……23
図14　新谷雄蔵氏収集品の実測図(8) ……24
図15　新谷雄蔵氏収集品の実測図(9) ……25
図16　新谷雄蔵氏収集品の実測図(10) ……26
図17　新谷雄蔵氏収集品の実測図(11) ……27
図18　新谷雄蔵氏収集品の実測図(12) ……28
図19　新谷雄蔵氏収集品の実測図(13) ……29
図20　新谷雄蔵氏収集品の実測図(14) ……30
図21　新谷雄蔵氏収集品の実測図(15) ……31
図22　新谷雄蔵氏収集品の実測図(16) ……32
図23　新谷雄蔵氏収集品の実測図(17) ……33
図24　新谷雄蔵氏収集品の実測図(18) ……34
図25　新谷雄蔵氏収集品の実測図(19) ……35
図26　新谷雄蔵氏収集品の実測図(20) ……36
図27　新谷雄蔵氏収集品の実測図(21) ……37
図28　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(1) ……41
図29　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(2) ……42
図30　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(3) ……43
図31　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(4) ……44
図32　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(5) ……45
図33　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(6) ……46
図34　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(7) ……47
図35　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(8) ……48

図36　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(9) ……………………………………………………49
図37　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(10) …………………………………………………50
図38　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(11) …………………………………………………51
図39　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(12) …………………………………………………52
図40　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(13) …………………………………………………53
図41　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(14) …………………………………………………54
図42　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(15) …………………………………………………55
図43　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(16) …………………………………………………56
図44　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(17) …………………………………………………57
図45　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(18) …………………………………………………58
図46　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(19) …………………………………………………59
図47　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(20) …………………………………………………60
図48　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(21) …………………………………………………61
図49　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(22) …………………………………………………62
図50　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(23) …………………………………………………63
図51　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(24) …………………………………………………64
図52　大曲遺跡の既往調査出土土器(1) ………………………………………………66
図53　大曲遺跡の既往調査出土土器(2) ………………………………………………67
図54　大曲遺跡の既往調査出土土器(3) ………………………………………………68
図55　大曲遺跡・建石(3)遺跡出土土器 ………………………………………………69
図56　大洞A’式から砂沢式にかけての型式段階変遷図………………………………71
図57　大曲遺跡出土土器による変形工字文の分類 ……………………………………72
図58　大曲遺跡出土台付鉢の変遷と出土土器の分類 …………………………………72
図59　大曲遺跡出土土器群による段階設定(1) ………………………………………75
図60　大曲遺跡出土土器群による段階設定(2) ………………………………………76
図61　金附遺跡ST01捨て場層位1……………………………………………………………78
図62　金附遺跡ST01捨て場層位2……………………………………………………………79
図63　ST01捨て場 4-5層出土土器群…………………………………………………………81
図64　ST01捨て場 4c層出土土器群…………………………………………………………81
図65　ST01捨て場 4層出土土器群……………………………………………………………82
図66　ST01捨て場 2-3b2層出土土器群………………………………………………………82
図67　ST01捨て場 1-2層出土土器群…………………………………………………………82
図68　ST01捨て場 4b層出土土器群…………………………………………………………83
図69　ST01捨て場 3層出土土器群……………………………………………………………83
図70　ST01捨て場 2-3b2層出土土器群………………………………………………………83
図71　ST01捨て場 2-3b層出土土器群…………………………………………………………84
図72　ST01捨て場 2層出土土器群……………………………………………………………84

図73　ST01捨て場　1-2層出土土器群・・84
図74　砂沢遺跡a-8区Ⅲ出土土器群・・85

表目次

表１　新谷雄蔵氏採集土器の構成・・5
表２　新谷雄蔵氏収集品（復元可能個体）属性表(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
表３　新谷雄蔵氏収集品（破片資料）属性表(2)・・40

写真図版

写真図版１　新谷雄蔵氏による砂沢式研究資料等
写真図版２　新谷雄蔵氏による遺物整理状況(1)～(3)
写真図版３　新谷雄蔵氏収集資料（1～3）
写真図版４　新谷雄蔵氏収集資料（4～6）
写真図版５　新谷雄蔵氏収集資料（7～9）
写真図版６　新谷雄蔵氏収集資料（10～12）
写真図版７　新谷雄蔵氏収集資料（13～15）
写真図版８　新谷雄蔵氏収集資料（16～18）
写真図版９　新谷雄蔵氏収集資料（19～21）
写真図版10　新谷雄蔵氏収集資料（22～24）
写真図版11　新谷雄蔵氏収集資料（25～27）
写真図版12　新谷雄蔵氏収集資料（28～30）
写真図版13　新谷雄蔵氏収集資料（31～33）
写真図版14　新谷雄蔵氏収集資料（34～36）
写真図版15　新谷雄蔵氏収集資料（37～39）
写真図版16　新谷雄蔵氏収集資料（40～42）
写真図版17　新谷雄蔵氏収集資料（43～45）
写真図版18　新谷雄蔵氏収集資料（46～48）
写真図版19　新谷雄蔵氏収集資料（49～50）
写真図版20　大曲遺跡出土の土偶（新谷氏所蔵ネガフィルムより）

第１章　研究の概要

第１節　研究の目的

本研究の目的は、東北地方における文化遺産の保存と活用に関する調査研究の一環として、故・新谷雄蔵氏が収集された土器・土製品について再整理調査をした結果を報告し、東北地方北部における弥生前期（Ⅰ期）の代表的な土器型式として知られる、砂沢式（芹沢1960）の研究において氏が果たした役割を改めて問い直すことである。

氏が昭和50年に発表された研究論文「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」（新谷1975）は、砂沢式土器の研究としては早くに行われた研究の一つである。当時、縄文晩期末の土器型式の一様態として解釈されることの多かった砂沢式は、標識遺跡である砂沢遺跡（青森県弘前市）からの出土土器を基準に既に設定されていたものの、まとまった面積での発掘調査がまだ行われていなかったために、その中身についての研究はなされていなかった。前掲論文において新谷氏は、文様の分類、器種組成などの考察を行ったものの、出土遺跡について論文で明示しなかったことと、氏の考察が詳細な分類の記載に終始したことも手伝って、研究史上の位置づけがこれまで明確でなかったと考えられる。その結果、後に氏の収集品が青森県立郷土館に寄贈されることになった際にも、出土地点についてはそのほとんどが「岩木山北東麓」として報告された（齋藤2009）。今日に至るまで氏の収集品は、砂沢式の研究で全くと言ってよいほど活用されていない。

このような現状を鑑みて、本研究では、故・新谷雄蔵氏の残した各種資料（実測図・スケッチ・写真）をもとに、氏の収集した砂沢式、及びその前後の型式に属する土器および土製品についての再報告を行う。この作業によって、氏の収集作業や整理作業がいつ行われ、どのような意図を持って前掲論文（新谷1975）が執筆されたのかについて、可能な限り明らかにすることを試みる。所蔵が確認された土器に関しては再実測し、資料化を行う。また、氏の収集品の多くが該当する大曲遺跡（青森県鰺ヶ沢町）出土土器を主たる分析対象として、既往調査の出土遺物との比較から砂沢式の細別を行うと共に、新谷氏の砂沢式研究の意義について考察を行う。

第２節　研究の経過と方法

最初に、本研究に研究代表者が関わることに至った経緯について、若干触れておきたい。

本書で整理報告を行う新谷雄蔵氏の収集品は、様々な遺跡の出土品から構成される青森県立郷土館への寄贈資料の一部であり、その概要は既に報告されている（齋藤2009）。1999年に新谷氏本人から同館への寄贈の話が出たことが記録されており、2008年9月に同館が受け入れ手続きを終了している（前掲）。

一方筆者は、2004年に青森県立郷土館を資料見学にて訪問した際に、多くの砂沢式土器が含まれる本資料の整理報告を思い立ち、既に郷土館に所蔵されていた一部の資料の実測を開始し、2006年までにある程度の整理を終えていた。ただ、当時の郷土館ではまだ寄贈資料受入れ作業が完全に済んでいなかったことから、2010年に改めて郷土館での整理作業を再開したところ、本書で紹

介する実測図集、写真アルバム等の資料中に、砂沢式土器をはじめとする遺物の出土遺跡の情報が記載されていることに気付き、郷土館資料所蔵資料の実測と共に収集品の照合作業を始めた。

照合作業の過程において、氏が実測図やメモ等で記録していた土器の全ての個体が、郷土館に寄贈されてはいないことに気付き、寄贈品以外の土器の所在を求めて関係者や周辺自治体に聞き取り調査を行ったが、芳しい成果は得られなかった。そこで2015年度に入り、氏のご夫人にあたる新谷照氏、長女である菊池由紀子氏のご協力を得て、親族間で分けて保管されていた土器をまとめて観察し、資料調査を行う機会を得た。その結果、新谷氏の記録していた砂沢式土器関連資料のうち、ほぼ全ての個体についての照合作業が完了したため、整理作業の完了と本書の刊行を、2015年度国際教養大学個人研究費の研究課題に据えることにした。

本研究は、以下の工程に従って実施した。

2015年4月～8月	青森県立郷土館にて整理作業、平行してトレース作業を実施した。
2015年9月～同11月	新谷照氏のご自宅にて、研究協力者と共に実測、拓本作業を実施した。また、同場所に所蔵されていた砂沢式に関する新谷氏の研究資料の貸出を受けて、国際教養大学にて資料整理を行った。
2015年12月～2016年1月	青森県立郷土館所蔵の写真アルバム、図面アルバム、ネガアルバム等について借り出し申請を行い、貸出使用許可を受けた国際教養大学にて、写真等のスキャニング及びデジタルファイルの整理を行った。
2016年1月～2月	実測図のトレース作業を実施し、図版作成、本文執筆を開始した。
2016年3月	青森県立郷土館に資料掲載申請を行い、本研究報告の刊行に至った。

実測図のトレース作業は、一部についてはロットリングを用いて行ったほか、大部分はデジタルトレースを行った（Adobe社のillustrator CS6を用いた）。

復元可能個体のうち胴部文様の残存部位が大きい個体については、実測図とともに展開拓本を作成して掲載した。破片資料については、精製土器を中心にサイズ、文様の種類等を基準に選択して拓本作成を行った。

写真については、新谷照氏宅所蔵の土器を筆者が撮影したほか、青森県立郷土館所蔵資料は同館職員の中村哲也氏による撮影写真の掲載許可を得た。

（根岸）

第２章　整理の成果

第１節　整理遺物等の保管状況と照合作業

【青森県立郷土館】

新谷雄蔵氏寄贈資料のうち、砂沢式を中心とする復元可能な土器群、土器破片多数、土偶・土製品等が各々テンバコに保管されている。また一部の資料は常設展示に活用されている。各遺物には同館で寄贈を受け入れた際に登録番号の注記がなされているほか、欠失部を埋める石膏部分には鉛筆もしくはペン書きによる注記が観察できる。この番号は後述する実測図集、写真アルバム等にある番号と概ね一致することから、新谷氏が整理作業のために施した可能性が高いと判断した。復元個体の土器内部には、郷土館職員が新谷氏から聞き取りを行った際のメモ用紙の他に、新谷氏自身が書いたと思われるメモ用紙が入っている場合がある。これらには「堀（ママ）った貴（ママ）跡　鰺ヶ沢町山田野」、「昭和33年」という文字が見受けられる。

土器破片資料のうち、大きなサイズの破片については郷土館職員による注記がなされているが、小破片については関連資料として一括で保管されている。それらの寄贈資料中には、新谷氏が作成したと思われる拓本が含まれており、郷土館職員によって土器破片の現物と照合され、チャック付き小袋に収納されている。またこれらの土器の一部には、「セコ」、「セド」、「半セコ」、「ソコ」等の記号とそれに続く数字が鉛筆で注記されている。土器の特徴からそれぞれ「精製土器口縁部」、「精製土器胴部」、「半精製土器口縁部」、「粗製土器口縁部」の分類基準を表していると考えられ、数字は通し番号である。これらの土器破片については新谷氏の論文（1975）にもその一部が掲載されている（表3参照）。

この他、ネガアルバム1点、写真アルバム9点、図面アルバム4点、図面ノート1点が、それぞれ関連資料として保管されている（図1）。これらのうち、図面アルバム3点には氏の作成した「実測図集」が掲載されており、観察記録のほかに出土遺跡と、各々に通し番号で番号が付されている（図28～51）。この実測図集には、出土遺跡のみならず出土地点の土層（「地表下〇〇cm」）や、地点（「砂沢遺跡B地点」）等の記載も含まれており、信頼のおける記録と判断した。この番号と写真アルバム中の各写真に記入された番号が一致していることから、実測図と写真の照合が可能である。

【新谷氏宅による所蔵品】

砂沢式関連資料として略完形の土器8点が所蔵されていた。これらは、青森県立郷土館所蔵の土器と前述した写真アルバム等を比べた際に、抜け落ちている事が確認できていた土器群である。

この他、大型の封筒に入っていた『北奥古代文化』への投稿原稿の原本及び図版版下、前述した土器実測図の浄書版とその写し、方眼紙に書かれた砂沢式の分類基準に関するメモ等が、大型半透明ビニール袋に入れられた状態で一括保管されていた。それぞれ番号が付された浄書された土器実測図は新谷論文（1975）中の実測図や、前述した図面アルバム中の「実測図集」とも合致したことから、出土遺跡の同定がある程度可能であると判断した。

以上の保管状況を踏まえて、現在2箇所に分散して保管されている新谷氏収集品のうち、復元可能な個体の土器の大部分について出土遺跡を特定することができた（表1～3）。新谷氏が収集し記録していた土器は、大曲遺跡（青森県鰺ヶ沢町）出土が47点、砂沢遺跡（青森県弘前市）出土が10点、尾上山遺跡（青森県弘前市）出土が7点、原子遺跡・狼野長根遺跡（共に青森県五所川原市）、板柳町出土が各1点であり、今回実測を行った大洞A’式・砂沢式に帰属する復元可能な土器54点の内訳は、大曲遺跡出土が40点、砂沢遺跡出土が8点、不詳が6点となった。大曲遺跡出土土器のうち、写真アルバムでは「カメNo.XY」（写真図版2）と分類されていた類遠賀川系の壷形土器（図21-1）は、新谷氏が実測図等の記録を取っていないものの、1980年代前半に青森県立郷土館職員が氏より大曲遺跡出土である旨を聞き取っていたものである（木村1989: 57）。

出土遺跡が不詳となった6点のうち5点は、土器破片資料であるため出土遺跡についての記録がなかった。写真アルバム等の中に全く登場しないために不詳とした個体は1点のみ（図7-6）である。土器破片資料についての出土地点等の情報は記録されていないため、全て不詳として扱わざるを得ない。破片のうち大洞A’式・砂沢式・五所式に属する個体については、新谷氏の論文（1975: 27-29）にも報告され、「報告書未完（この報告が最初である）」（同: 41）とされていることからその多くが大曲遺跡出土である可能性が高いと考えられる一方、新谷氏の資料収集範囲を考慮すると、砂沢遺跡、尾上山遺跡等からの採集資料が混在している可能性は排除できない。

また、土偶は少なくとも1点（図22-1、青森県立郷土館所蔵）が大曲遺跡出土であると報告されており、この他4個体出土したという（新谷1980）。大曲遺跡出土と新谷氏が明記している土偶はこの他1個体あることから（新谷1984、本書写真図版20）、本書にて報告する土偶（図22-2,3、図23-1,2,3）のうち少なくとも3個体は大曲遺跡出土であると考えられる。なお写真図版20に掲載した土偶については、1980年代まで旧山田野小学校に所蔵されていたことは突き止められたものの、現在のところ所在不明である（中田書矢氏のご教示による）。

今回行った新谷氏収集遺物と関連資料との照合作業により、氏の収集品の大部分は大曲遺跡からの採集資料で占められるものの、砂沢遺跡、尾上山遺跡、原子遺跡等からの採集資料も混在していることが判明した。しかしながら、新谷氏が1975年の論文で言及している「砂沢式系土器群」については、復元可能個体に限定すると大曲遺跡・砂沢遺跡の2遺跡からの出土に絞られたと言える。従って、齋藤（2009）が取り扱いを慎重にすべきとした新谷氏寄贈品の出土遺跡について、筆者の照合作業によってその多くを明らかにし得たことになる。

（根岸）

表1　新谷雄蔵氏採集土器の構成

遺跡名等	大洞A’式～砂沢式の土器 （※44を除いて、全て本書にて実測図作成（図7～21）） （※大部分が青森県立郷土館に寄贈されている）	その他の時期に属する土器
大曲遺跡 （青森県鰺ヶ沢町） 合計47点 ※本書の図21-1（類遠賀川系壷）も含まれる（木村1989）。	2，3，4，6，9，10，11，13，14，15，16，17，18，21，22，24，25，26，27，28，32，33，34，35，36，37，38，39，41，42，51，52，53，55，58，59，60，62，64	45 縄文後期の粗製壷 46 縄文晩期後葉の壷（無文） 48 縄文晩期前葉の壷 49,50 縄文晩期中葉の壷 63 縄文晩期後葉の条痕文土器 54 粗製深鉢
砂沢遺跡 （青森県弘前市） 合計　10点	1，20，23，29，30，31，40，44※	43　縄文晩期後葉の壷 47　縄文晩期の粗製土器
尾上山遺跡 （青森県弘前市） 合計　7点	-	5 大洞B式の台付鉢 7　縄文晩期前葉の壷 8　縄文後期末～晩期初頭の注口土器 12　縄文晩期前葉の台付鉢 19　縄文大洞B式の深鉢 56　大洞BC式の注口土器 61　縄文晩期の粗製深鉢
原子遺跡 （青森県五所川原市）	-	番号なし　十腰内Ⅰ式の鉢
狼野長根遺跡 （青森県五所川原市）	-	番号なし　擦文土器
板柳町　水道用貯水槽北側斜面 （※土井(1)遺跡、或いはその周辺遺跡と思われる）	-	57 縄文晩期後葉の壷

（※数字は新谷氏の実測図集（図28～51）における番号を指す（実測図との対応は表2・3参照））

図1　新谷雄蔵氏が青森県立郷土館に寄贈した整理資料

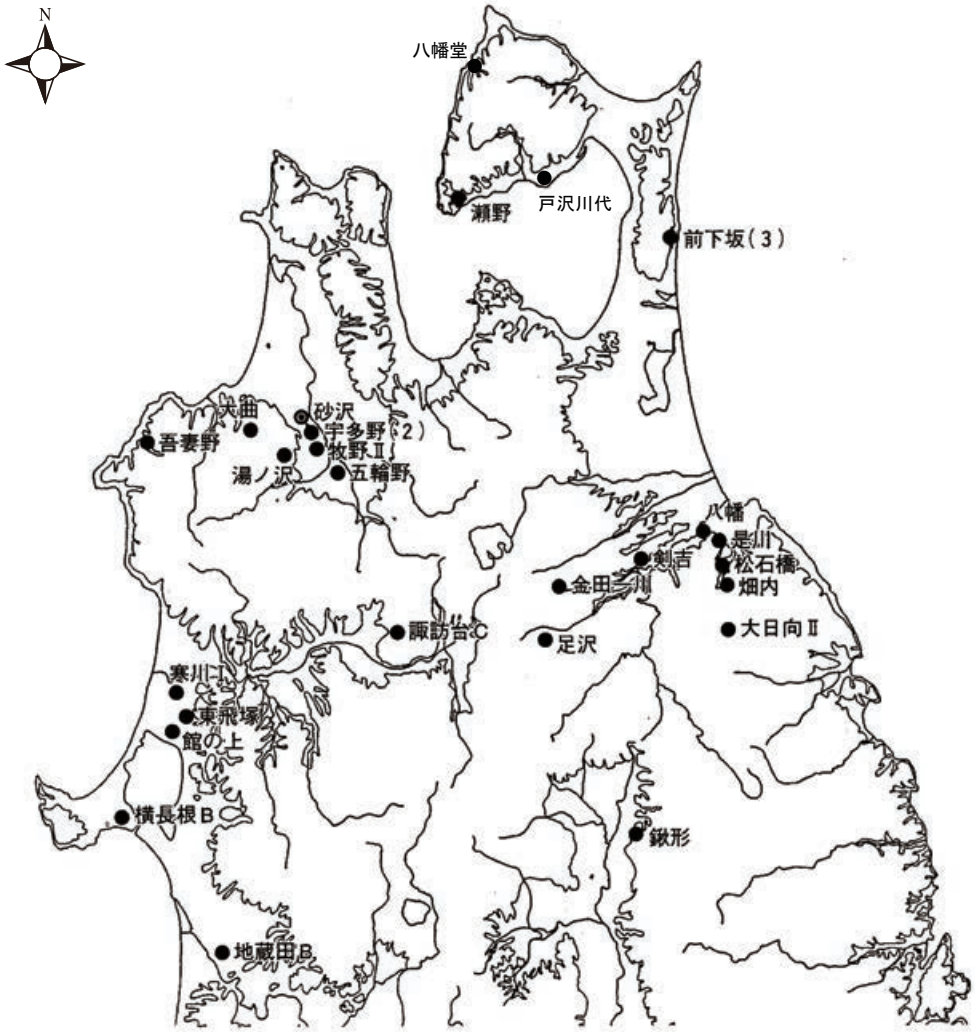


図2　東北北部における砂沢式期の主要遺跡（須藤2006に加筆）

第２節　新谷氏収集品の出土遺跡について

（１）新谷雄蔵氏の資料採集について

前節において、新谷氏が研究に取り組んでいた「砂沢式系土器群」（新谷1975）が、氏の採集品に含まれる復元可能個体であって、大曲遺跡（青森県鰺ヶ沢町）、砂沢遺跡（青森県弘前市）の2遺跡に限定されることを明らかにした。本節では、新谷氏の残した記録、氏の関係者からの聞き取り、および前後に記された先行研究に導かれつつ、本書で報告する新谷氏採集資料がいつ頃、どの地点から採集されたものかを考察する。

故・新谷雄蔵氏（大正12年（1923年）～平成14年（2002年））は、前述したとおり『北奥古代文化』誌上に発表した論文（新谷1975）において、大曲遺跡採集遺物について「資料収集、新谷雄蔵1948」と記したものの、出土遺跡に関する記録をほとんど残していない。しかし、新谷氏宅に残された前掲論文のための草稿と思われる綴り『（中間報告）青森県、津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究』[1)]（本文B4版32頁、参考文献3頁）には大曲遺跡に関して、前掲論文からは削られたと考えられる次のような記載がある。

「大曲Ｖ号遺跡は、終戦後大曲開拓に入植した引き揚げ者が畑の造成や道路の開設に従事した際に筆者が発見した遺跡であり、所在地は、鳴沢川の流れに逆行して約2km上流の標高約70ｍの岩木山北東山麓の末端丘陵地帯にあり、この付近には大曲Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ号の各遺跡が点在するため、その一連番号をとって後に大曲Ｖ号遺跡と名付けたものである」

ここでいう終戦後の「大曲の開拓」とは、第二次大戦後すぐの1946年から進められた、陸軍山田野演習場跡地への緊急開拓（髙瀬2014）を指すと考えられる。この綴りに書かれている1947年、あるいは前掲論文にある1948年に、新谷氏が畑や開設された道路の付近から出土した遺物を採集したということは確からしい。1948年当時の米軍撮影による空中写真（図4）には、既に現在と変わらない位置に道路が確認できる。新谷氏の言う「開設された道路」がどの地点を指すのか、追加の聞き取り調査が必要だと考えられる。

他方、終戦後間もない当時、自家用車の一般への普及が始まっていない状況下にあって、まとまった量の遺物を一人で自宅まで運んでくることが出来たとは考えにくい。そこで、新谷氏が昭和22～33年（1947～1958年）にかけて旧五所川原中学校（現五所川原第一中学校）に社会科教諭として奉職していた当時の教え子の一人である、三上熙氏（青森県五所川原市在住）に当時のお話を伺ったところ、昭和30～32年（1955～1957年）にかけて、新谷教諭や他の生徒と共に「山田野の開拓地」の同じ地点に毎年土器・石器を拾いに行き、採集した遺物は新谷氏の自宅に運んで洗浄や接合等の作業をしたということである。この時に新谷氏、三上氏を含む一行が採集に訪れた遺跡が大曲遺跡とは特定できないものの、氏の採集品に山田野地区にある他遺跡出土の資料が含まれていないこと、青森県立郷土館に寄贈された資料中にあるメモ用紙に「昭和33年」（1958）との記載があることも考慮すると、新谷氏が旧五所川原中学校在職中（1947～1958年）に、複数回に分けて大曲遺跡を訪れて資料採集を行った蓋然性が高い。

それでは、新谷氏が自らの遺物採集地点に「大曲Ⅴ号遺跡」という名称を与えたのはいつ頃であろうか。現在の大曲遺跡の埋蔵文化財包蔵地としての指定範囲（図3）は、かつて大曲Ⅰ号・Ⅱ号・Ⅳ号と呼ばれた地点と、新谷氏によって名付けられた同Ⅴ号を含む広い領域である。これらの地点は一つの遺跡として統合され（木村1989）、縄文中期・後期・晩期に渡る県内重要遺跡の一つとして登録されている。後に建石(3)遺跡として名前が変更される旧・大曲Ⅲ号遺跡も含め、新谷氏が大曲遺跡での資料採集を行う前後の記録を参考に、本遺跡で行われた調査の概略を振り返ってみたい。

まず昭和26年（1951年）に成田末五郎氏・戸沢武氏が、旧・大曲Ⅲ号遺跡の地点にて晩期土器片の散布を発見し、亀ヶ岡式が出土する遺跡の存在を予想していた（田村1968）。これを踏まえて、昭和35年（1960）に岩木山麓古代遺跡の学術調査の一環で大曲遺跡（Ⅰ～Ⅳ号）の調査が行われた（田村前掲）。大曲Ⅰ号は縄文時代中期末～後期前葉の時期、同Ⅱ号の包含層は耕作によって破壊を受けており、同Ⅲ号は後期・晩期を中心とする時期、同Ⅳ号は古代の時期の遺跡とそれぞれ報告された。同Ⅰ号、Ⅱ号、Ⅳ号遺跡については同じ丘陵上にあり、同一遺跡の各地点と考えられたものの、同Ⅲ号遺跡は遺跡の立地及び出土遺物の年代から同一遺跡として認めがたいとして区別された（木村前掲）。

新谷氏が旧・大曲Ⅴ号遺跡の地点にて遺物を採集したのは1947～1958年の時期だとすれば、氏の資料採集は、成田末五郎氏等による旧・大曲Ⅲ号遺跡の踏査より前のタイミングで開始され、岩木山の学術調査が入る（1960年）より前に完了したことになる。同調査報告書が刊行された1968年以降に、新谷氏によって「大曲Ⅴ号遺跡」という名称が決められたと推測できる。また、同調査報告書中に新谷氏及び氏の採集地点に関する記述がみられないことから、岩木山の学術調査団は、旧・大曲Ⅴ号遺跡の地点から大洞A’式や砂沢式が多数出土したことを知らされないままに大曲遺跡の調査に入ったようである。前後の文脈から考えると、新谷氏と岩木山の学術調査に入った研究者達との交流は当時ほとんどなかったのかもしれない。

一方、砂沢遺跡での資料採集については、どのようなタイミングで行われたのかは記録が残されていないため不明である。新谷氏が残した未現像のリバーサルフィルム、ネガフィルム（写真図版1）中に、砂沢溜池で撮影されたと思われる写真と、砂沢式と思われる土器破片の出土状況が撮影されているものの、これが砂沢遺跡にて撮影したものであるかどうかは確証が持てない。砂沢遺跡に関しては、昭和20年代に芹沢長介氏・吉崎昌一氏が相次いで調査し、前後する時期に山内清男氏も調査を行って遺物を収集している（須藤2006）。芹沢長介氏によって土器型式としての砂沢式が定義された（芹沢1958・1960）後、昭和36年（1961）年に至って青森県遺跡台帳への登録が行われた（藤田他1991）。これらの経緯から推測するに、新谷氏による同遺跡での資料採集は大曲遺跡での調査と機を一にする可能性がある一方、砂沢式という型式名が広く知られるようになった1960年以降に行われた可能性も十分にあると考えられる。

（２）大曲遺跡・建石(3)遺跡等における既往調査について

大曲遺跡および近接する建石(3)遺跡（旧・大曲Ⅲ号遺跡）において、これまでに出土した砂沢式前後の時期に属する遺物とそれを包含する文化層についてまとめておきたい。

建石(3)遺跡においては、1960年の調査時にAトレンチ（図5-A）の表土直下の浅めの層位から、いずれも五所式に属する完形の壷と破片資料（図55）が出土している（田村1968）。本遺跡からは土地所有者による開墾作業の際に縄文晩期のものと思われる「多数の完形品」が出土したが、それらは好事家によって持ち去られたという（前掲）。

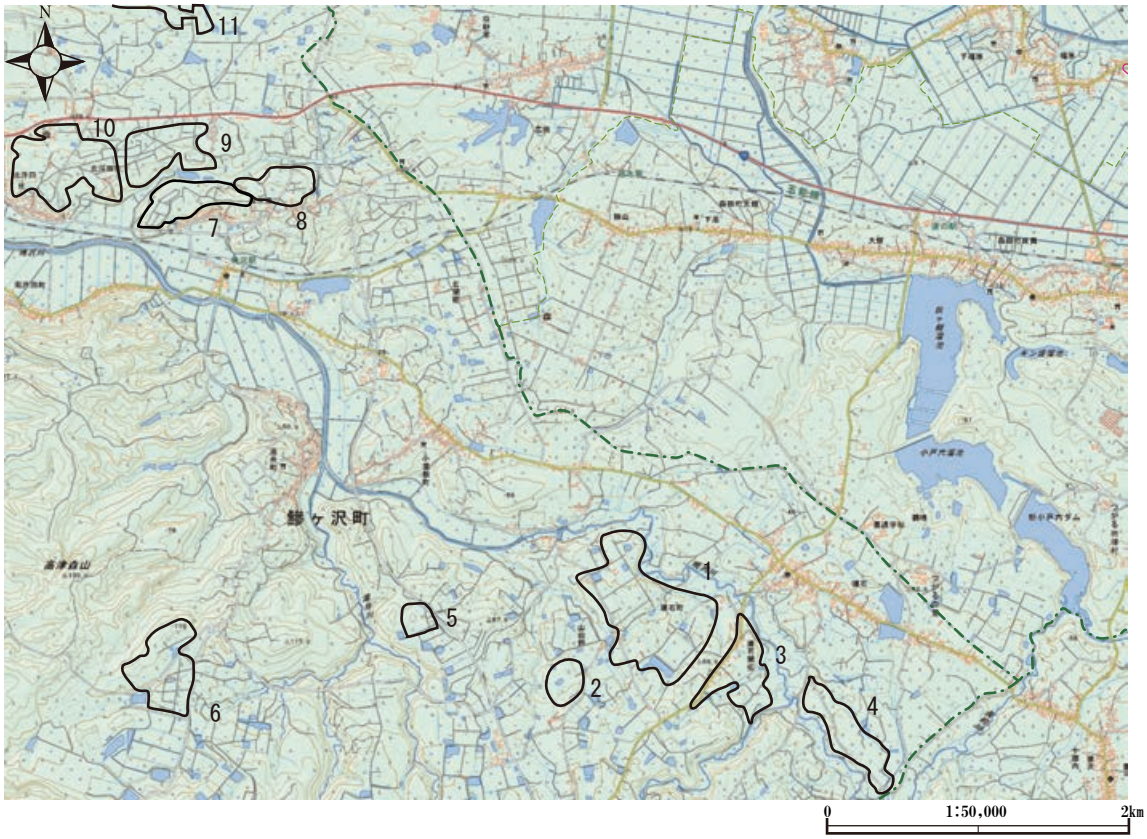
大曲遺跡では、前節で論じたように、新谷氏によって開拓作業が行われた地点から多数の遺物が採集された。既に紹介した新谷氏の論文草稿『（中間報告）青森県、津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究』中に、公刊論文（新谷1975）には掲載されていない「道路の切り通しを利用した」層位についての記載があるので転載する（図5-B）。これによれば、表土層（第1層）～第4層まで（地表下55～70cmまので深さ）が遺物包含層（黒褐色土～暗褐色土）であり、「層位による土器型式の差は認められなかった」としつつも、「平行工字文は下層に、変形工字文は上層にという傾向」が見られたと記録している。また別稿において、完形に近い砂沢式期の土偶（図22-1）がほぼ表土下の第2層から採集できたとしている（新谷1980）。また同論文中、初めて旧・大曲Ｖ号遺跡の位置図が示された。新谷氏は『鯵ヶ沢町史』（新谷1984）においても遺跡の位置図と、出土土器・土偶の写真を示している。出土遺物（表1）も勘案すると以下のことが言える。

・大曲遺跡には複数の文化層が確認された。主体を占めるのは砂沢式で、復元可能個体を多数含む土器群、略完形品を含む土偶・土製品が出土したが、大洞A’式土器も出土した。
・縄文時代後期、晩期前葉の時期の遺物も出土した。

本遺跡では、新谷氏による遺物採集成果を踏まえて、1985年に青森県立郷土館考古部門による発掘調査が実施された。これは東北地方の弥生文化の成立及びその様相を把握することを目的として行われた調査である。調査区は新谷氏の助言に従い、道路沿いの畑内に設定された（図5-C）。文化層は極めて薄く、表土を剥ぐとすぐに地山土があらわれるような堆積状況であった。遺構は検出されず、砂沢式を主体とする遺物（図52～55）は主に風倒木痕から出土したという。新谷氏の記録した層位（図5-B）と比べると、戦後から1985年までの間に、黒褐色～暗褐色を呈する砂沢式期の文化層が削平されていたために残存していなかったと考えられる。

以上をまとめると、岩木山北東麓の鳴沢川左岸に立地する同一丘陵上において、主として大洞A’式～砂沢式にかけて営まれた大曲遺跡と、南西方向に500mほど離れた地点に五所式期の建石(3)遺跡が分布することが分かる（図6）。視点を広げると、同じ鳴沢川の下流域右岸には砂沢式から五所式にかけての遺構・遺物が検出された[3]新沢(1)遺跡が所在する（図3）。これらの遺跡群は、縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡分布の変化や存続期間を考える上で貴重な資料となり得る。

（根岸）



1　大曲遺跡（321027）　2　建石（3）遺跡（321049）　3　鳴沢遺跡（321051）　4　餅ノ沢遺跡（321034）　5　湯舟（1）遺跡（321047）6　下清水沢（1）遺跡（321054）　7　新沢（1）遺跡（321040）8　新沢（2）遺跡（321041）　9　平野（1）遺跡（321039）　10　今須（4）遺跡（321038）　11　今須（1）遺跡（321035）

図3　大曲遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布

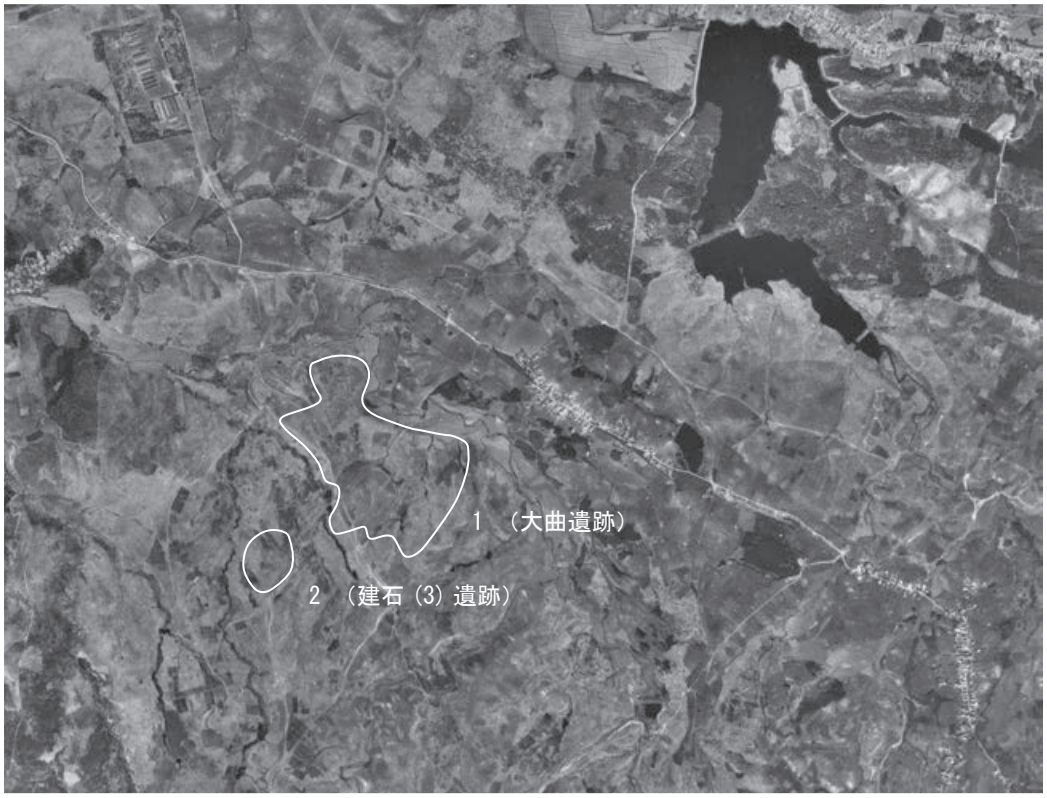
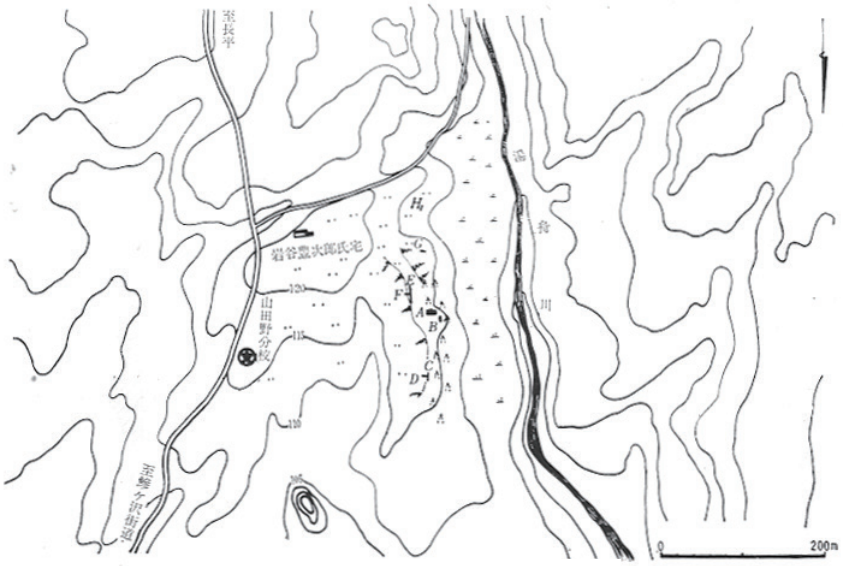


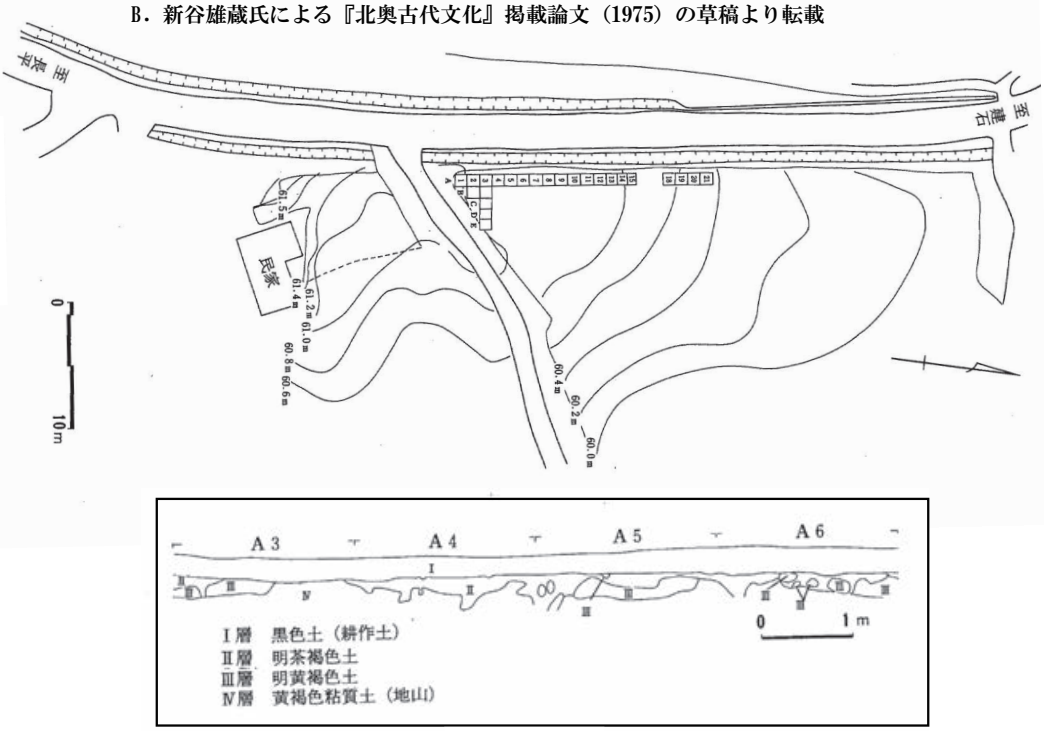
図4　1948年当時の米軍による空中写真と大曲遺跡・建石(3)遺跡の位置



A．建石(3)遺跡（旧大曲Ⅲ号遺跡）の調査トレンチ（田村1968より転載）

第1層	表土（腐植土）	10～15 cm	遺物包含層
第2層	黒褐色土	20～25 cm	〃 〃
第3層	黒色土	5～10 cm	〃 〃
第4層	暗黒色土	20～30 cm	〃 〃
第5層	黄褐色土	50～70 cm	無遺物層
第6層	赤褐色粘土層	20～ ?	〃 〃

B．新谷雄蔵氏による『北奥古代文化』掲載論文（1975）の草稿より転載



C．大曲遺跡（旧大曲Ⅴ号遺跡）の調査トレンチと層序（木村1989より転載）

図5　建石(3)遺跡、大曲遺跡の既往調査および資料採集

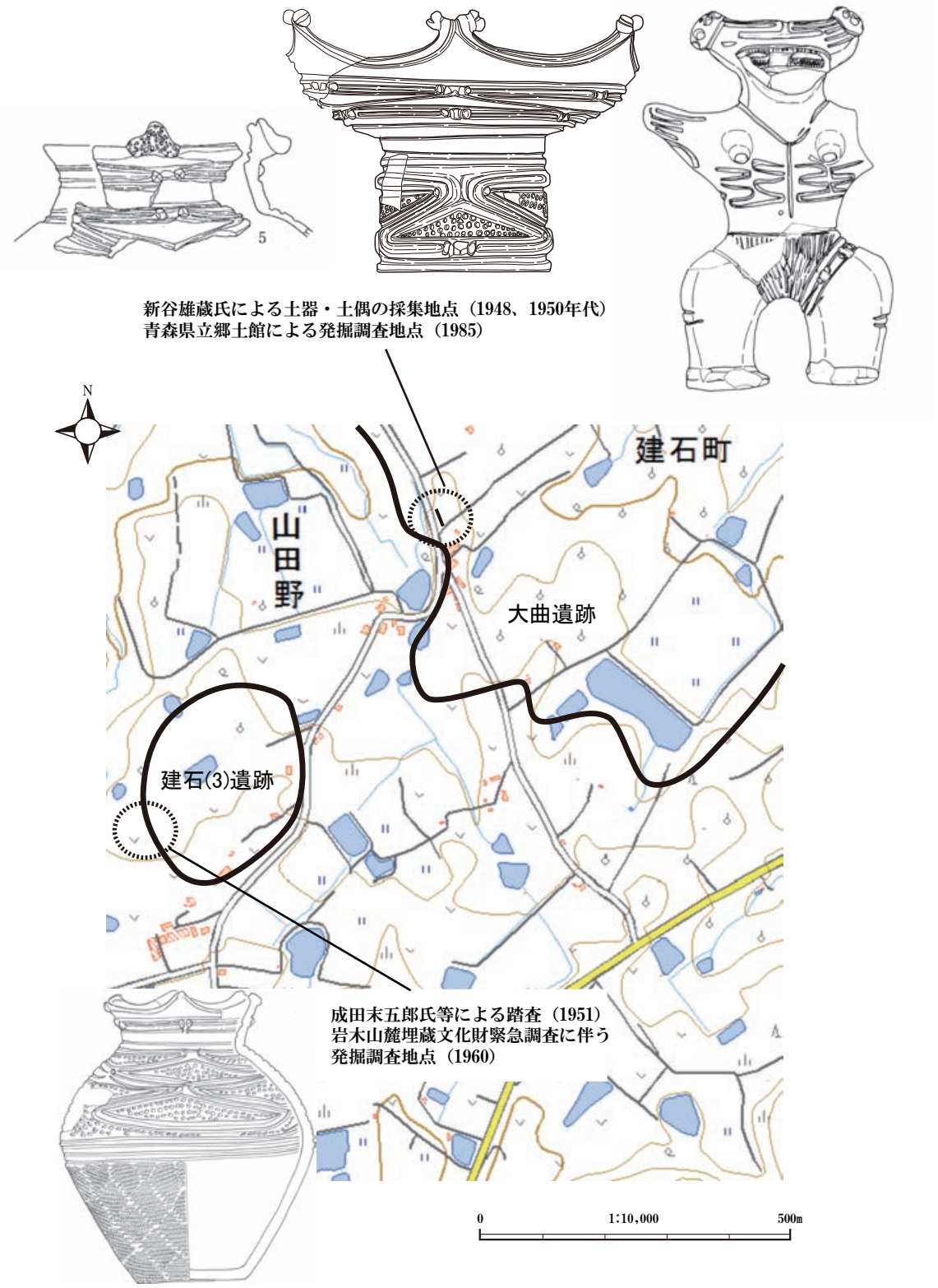


図6　大曲遺跡周辺における弥生時代遺物の出土地点

第３節　出土遺物について

（１）出土遺物の分類

新谷氏によって採集されたことが判明した、大曲遺跡・砂沢遺跡の出土遺物、及び出土遺跡が不明である土器破片資料について分類基準を示す。本来ならば遺跡ごとに記述すべきであるが、出土土器はいずれも大洞A’式・砂沢式を主体とするため、共通基準によって分類を行うことにした。なお、本資料は採集資料であるため出土コンテクストに関する情報に欠け、層位との関連性はもちろん、定量的な分析を行うことも不可能であることに留意されたい。

本書で報告する土器群の分類については既に新谷氏本人（新谷1975）が論じているものの、氏の主たる分類対象は精製土器に限られる上、「精製・半精製・粗製」を基準にした「群」、文様を基準にした「型」、器形・器種を基準にした「類」がそれぞれ別個に設定されていることが、氏の分類基準と編年観への理解を困難にしている。また砂沢式期の土器群については、今日、弘前市砂沢遺跡をはじめ多くの遺跡（図2参照）からまとまった量が出土しており、基本的な分類項目は研究者間で共有されている。従って本項では、新谷氏の示した細別基準の何に相当するかについて言及することは避けることにする。氏の編年観に関しては第3章第1節にて触れ、筆者による分類と時期細別を行った上で、その学史的意義について考察する。

以下の記述にあたって出土遺物の器形、形態の分類を提示するが、あくまで事実記載のためのものであって、細かな時期差を反映した分類基準ではないことに注意されたい。

【土器】

(a)　浅鉢形　　器高よりも口径が大きいもので、緩やかに開く器形。口縁部には平坦と装飾付きの2種類がある。

(b)　鉢形　　器高より口径が大きいもので、胴部中程で屈曲する器形。

(c)　台付鉢形　　浅鉢形に高い台のついた器形で、時期によって鉢部と台部の高さの比に変化が生じる。

(d)　壷形　　胴部がおおむね球形をなし、頸部ですぼまる器形。

(e)　台付深鉢形　　深鉢形に低い台のついた器形。

(f)　深鉢形　　口径よりも器高が大きく、体部が深い器形。

(g)　蓋形　　丸みを帯びた半球形の器形で、他器種と組合わさると考えられるもの。

【土製品】

(a)　土偶

(b)　土版

(c)　その他

（２）出土遺物についての記載

【土器】

(a) 浅鉢形

平坦口縁を持つ浅鉢形土器は、口縁部形態が内湾するものと直線的に開くものの2種類に分けられる。前者には、胴部の文様帯が著しく狭いもの（図7-3・5）、胴部中頃からやや下まで文様帯が広がるもの（図10-2・3）、胴部全面に文様帯が広がるもの（図13-2・3）がある。図7-3は胴下半に縄文が施されているが、摩滅等により一部しか図示できなかった。後者は、底部直上に沈線を引くもの（図10-4）、平行沈線に挟まれた無文帯を持ちつつ胴部全面に文様帯を展開するもの（図9-1・2、図24-12、図25-5・8）に分けられる。また厳密な意味では平坦口縁とは言えない粗雑な作りの浅鉢（図10-1）は、変形工字文の描き方が崩れた事例と言えよう。

口縁装飾を持つ浅鉢形土器は、口頸部の屈曲部と文様帯が一致するもの（図7-1・4・7）、口頸部の屈曲する部位よりも下部から変形工字文を施す文様帯が施されるもの（図8-1・2、図24-7・8・15）、比較的直線的な立ち上がりを持つもの（図14-1～3、図24-11、図25-6・7・9）に分けられる。これらには基本的に対向する山形の口縁部突起が付き、変形工字文の単位と合致している。突起には著しく発達したもの（図14-1、図25-6・11・12）もある。

図7-7は大型の浅鉢形土器で、底部が欠失していることから正確な器高は不明であるものの、口縁部から底部に向けてかなりすぼまる器形である。図8-1・2は類似した土器であるが、縄文を施す胴部の高さの違いによって器形に違いが生まれている。図14-3は著しく小型の精製土器であり、変形工字文のほかに補助単位文と刺突文の充填が見られる特徴的な土器である。図24-15は他の浅鉢形土器と異なり、薄い器壁、細い沈線幅が見られるほか、胴下半は縄文を施すものである。胎土も一般的な砂沢式と異なることから、別地域からの搬入品と考えられる。

(b) 鉢形

いくつかの種類があり、それらを一括して記載する。

精製土器には2点含まれる。図7-6は3段に渡って陽刻手法による変形工字文が展開する鉢で、対向する山形突起がつく。復元可能個体のうち、この土器のみ注記やアルバム等に記録がなかった。図24-13は屈曲部より上に無文帯をもつタイプの、砂沢式に僅かながら伴うことが確認されている器形である。

縄文施文を伴う鉢形土器として、口径に比して低い器高を持ち、平行沈線文と無文帯が特徴的な器種を挙げる（図27-1～3）。口縁部には平坦（同1）と山形（同2）の2種類があり、この2点はほとんど同一器種であるが口縁部形態でのみ異なる。同3は口縁部突起が発達すると共に無文帯が広がったタイプのもので、同1・2から変容した形態とみなせる。

(c) 台付鉢形

口縁装飾を持つ台付鉢形土器は、口縁部突起の高さを除く鉢部の器高が台部より高いもの（図7-2、図11-1、図19-2）、鉢部の器高が台部より低いもの（図11-2・3、図12-3・4、図13-1、図15-1・2・3）に分けられる。前者には破片資料中のうち図24-1・2が、後者には文様からみて図24-3、図25-1・2・3・4・15・16が相当すると思われるが、口縁部破片なので判断がつかない。

図11-1・2と同3を沈線幅によって比較すると、後者の方が著しく太く、定型化していることが見て取れる。図12-3は口縁部破片と台部破片が接合しないもので、発達した口縁部突起、台部に充填される丸形の刺突文が特徴的である。一方図12-4は同じような台部の文様構成を持ちつつも、縦長の刺突文が充填されている。図13-1には図12-3・4と似通った文様構成が見られるが、著しく台部が低く、全体として寸詰まりの特異な器形と言える。図15-1・2は似通った文様構成によって作られているが、台部の文様に差異が見られる。図19-2は粗製の台付鉢とも言えるもので、口縁部を除いて全面縄文を施す。台部も厚手で他の精製土器とは明らかに異なる作りを持つ。

平坦口縁を持つ台付鉢形土器のうち、変形工字文を持つものは、いずれも鉢部の器高が台部より低い（図12-1・2）。土器破片では図24-1～3がこれらに相当するものであろう。この他、変形工字文を持たず、数本重ねた平行沈線文によって無文帯を作り出すもの（図26-4～6）、細い沈線幅によって波状文を描くもの（図26-1）がある。これらのうち無文帯を持つ台付鉢は、砂沢式の胎土とは全く異なり、色調が暗めの橙褐色を呈し金雲母の混入が見られることもある。北上川流域からの搬入品と考えられる。また細沈線による変形工字文を描く個体（図26-2・3）は、砂沢式の範疇ではなく五所式として位置づけるべきであろう。

(d) 壷形

変形工字文、平行沈線文等を施すいわゆる精製土器のグループには、口頸部が外反するもの（図16-1～4・図17-2）、口頸部が直立するもの（図17-1・3、図26-7）の2種類がある。前者は比較的狭い文様帯内に変形工字文が施されている。口縁部突起は鉢形土器・台付鉢形土器のうち、やはり文様帯の狭い類のものと同じ種類の二叉突起である。図17-2は流水状工字文が二段に渡って展開するやや特殊な壷形土器である。後者は、頸部の無文帯幅よりも変形工字文の幅が広いもので、器高の半ばで胴部最大径をとることが特徴である。図17-3は大型の壷で底部～胴下半の一部が欠失した個体である。無文帯の直下に刺突文帯を持ち、二段構成の変形工字文を展開している。図26-7は口頸部破片であるが、器の内外面において二重に発達した口縁部突起が特徴的である。

一方、以上のような文様を持たないグループには、平行沈線文を1本ないし2本のみ施す以外は無文のもの（図21-2・3）、頸部と胴部上半に3本の平行沈線と列点文を施す大型の壷（図21-1）、口頸部以外は全面縄文のもの（図21-4）がある。これらは底径や器形（肩部の張り）等の諸属性によって、いくつかのグループに分けることが可能である。図21-1は厚手のつくりで胎土内に粗い砂粒が混和されており、器表面に黒斑が確認できる大型壷形土器である。「類遠賀川系土器」（高瀬2000）の一つとして位置づけられる。この個体は「壷棺土器」（新谷1975:17）と認識されていた可能性があるが、これ以上の記述がされていないために詳細不明である。

(e) 台付深鉢形

2点のみが該当する。図19-1は比較的高めの台を付けるもので、口縁部には二叉突起が付けられる。頸部には太めの平行沈線文とボタン状貼付文が見られる。図18-1は台部が欠失しているものの、低い台がつくと思われる。胴部全体への縄文施文後に施される、部分的に刻みが付けられる波状文の文様モチーフが展開している。

(f) 深鉢形

口縁部装飾を持ち、頸部に平行沈線文に挟まれた無文帯を持つもの（図19-3・4）のほか、頸部に平行沈線文を複数条施すもの（図19-5・6）がある。これらには少なくとも頸部以下に縄文が施されている。器形は直立するもの（同5）、内屈するもの（同3・6）等の種類がある。

このほか、胴部全面に条痕文を施すもの（図20-1・2、図27-9）、縄文・平行沈線文と共に刷毛目調整の痕跡が見られるもの（図27-4～8）がある。後者の口縁部はいずれもゆるやかに外反しているほか、内面にも刷毛目調整痕が残されている事例もある（図27-8）。刷毛目の有無と口縁部形態から、このタイプも「類遠賀側系土器」のうちの甕形土器に相当するものであろう。特異なものとして、重層化した沈線文による山形モチーフを連続的に描く個体（図18-2）がある。

(g) 蓋形

1点のみが該当する。図23-6は獣頭突起を貼付けた蓋形土器の破片資料である。

【土製品】

(a) 土偶

左手と口部、左足端部の一部を摩耗によって欠失するのみで、ほぼ完全な形が残存している土偶（図22-1）については、既に新谷氏が報告している（新谷1980）ものの、筆者らによる観察も交えて記載しておく。文様要素のうち、沈線文は両乳房の下と背面において2段構成の変形工字文を描いている。また頭・腕・背面上部・足の各所に見られる沈線文はいずれも複線化している。特に左足の表面には貼瘤と間の刻みが表現されている。目と「パンツ状」と表現されることの多い両足の付け根部分では、細長の条線が充填されている。この他、頭部左右の突起には円形刺突文が、腕部背面には円形文がそれぞれ充填されている。後述する大曲4群に帰属する土偶と言えよう（第3章第1節）。本製品は中実土偶であるが、頭部中央部には中軸となる棒を差し込んだと思われる穿孔が見られる。なお本遺跡からは、胴上半部がほぼ完全に残存する別個体の土偶が出土している（新谷1984、写真図版20）。

この他、刺突文の充填が全面に及んでいる中実土偶の右足部（図22-2）、足の付け根付近に沈線文と刺突文の充填が施された中空土偶左足部（図22-3）、土偶の肩パッド部分と思われる破片（図23-2）、板状土偶の左肩部と思われる破片（図23-3）は、いずれも砂沢式の中でもより新しい部分に相当する土偶ではないかと考えられる。これらと異なり、板状土偶の胴部破片（図23-1）は変形工字文の構成、沈線の細さからみて、一段階古い大洞A’式に位置づけられる可能性がある。

(b) 土版

図23-4は、両面に著しく複線化した工字文のほか、上下の抉りが入った部分に刺突文が施される土版である。

(c) その他

図23-5は、2本1単位の沈線文と刺突文充填が両方見られる環状土製品の破片である。

（根岸・三浦・長谷川）

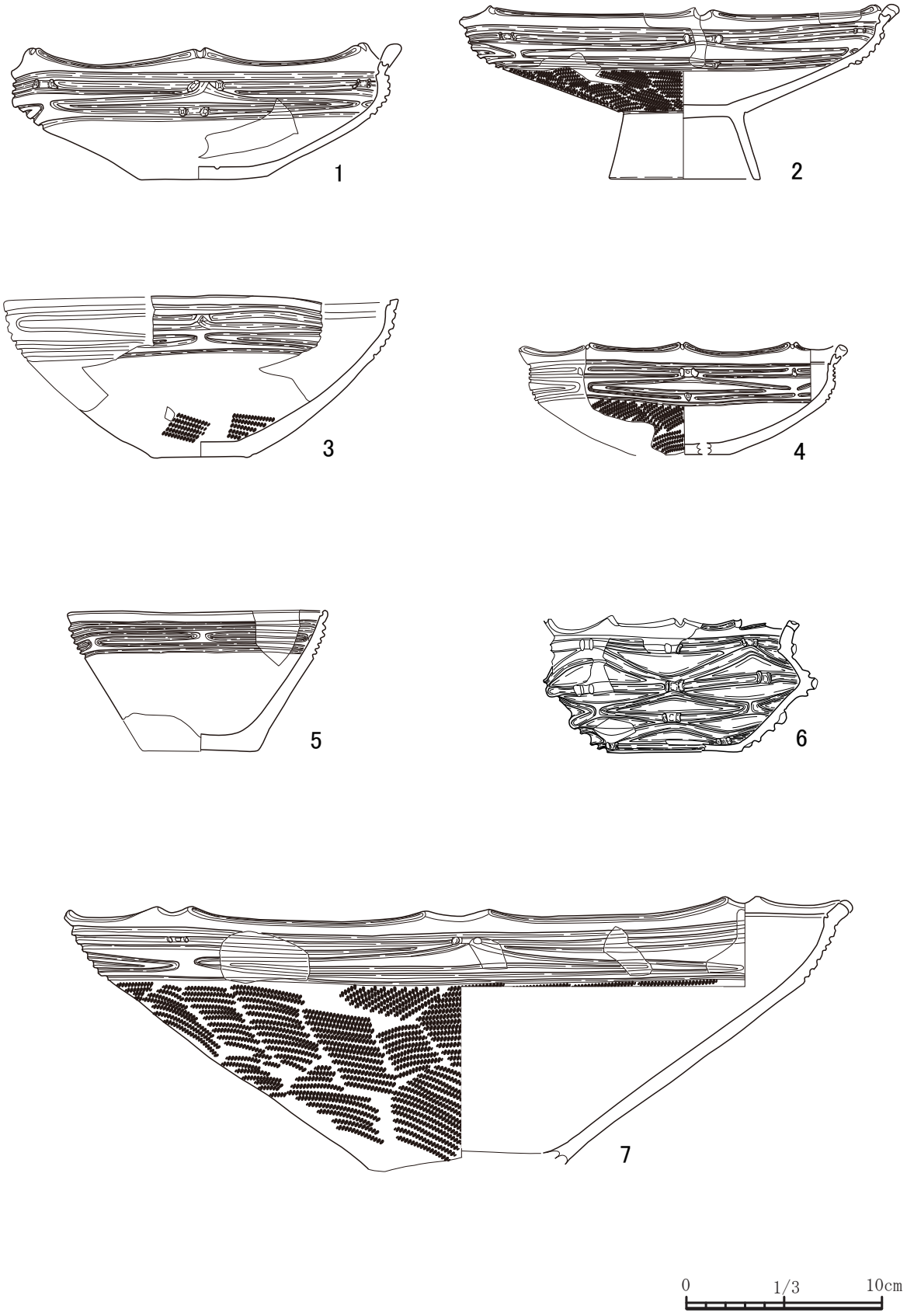


図7　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（1）

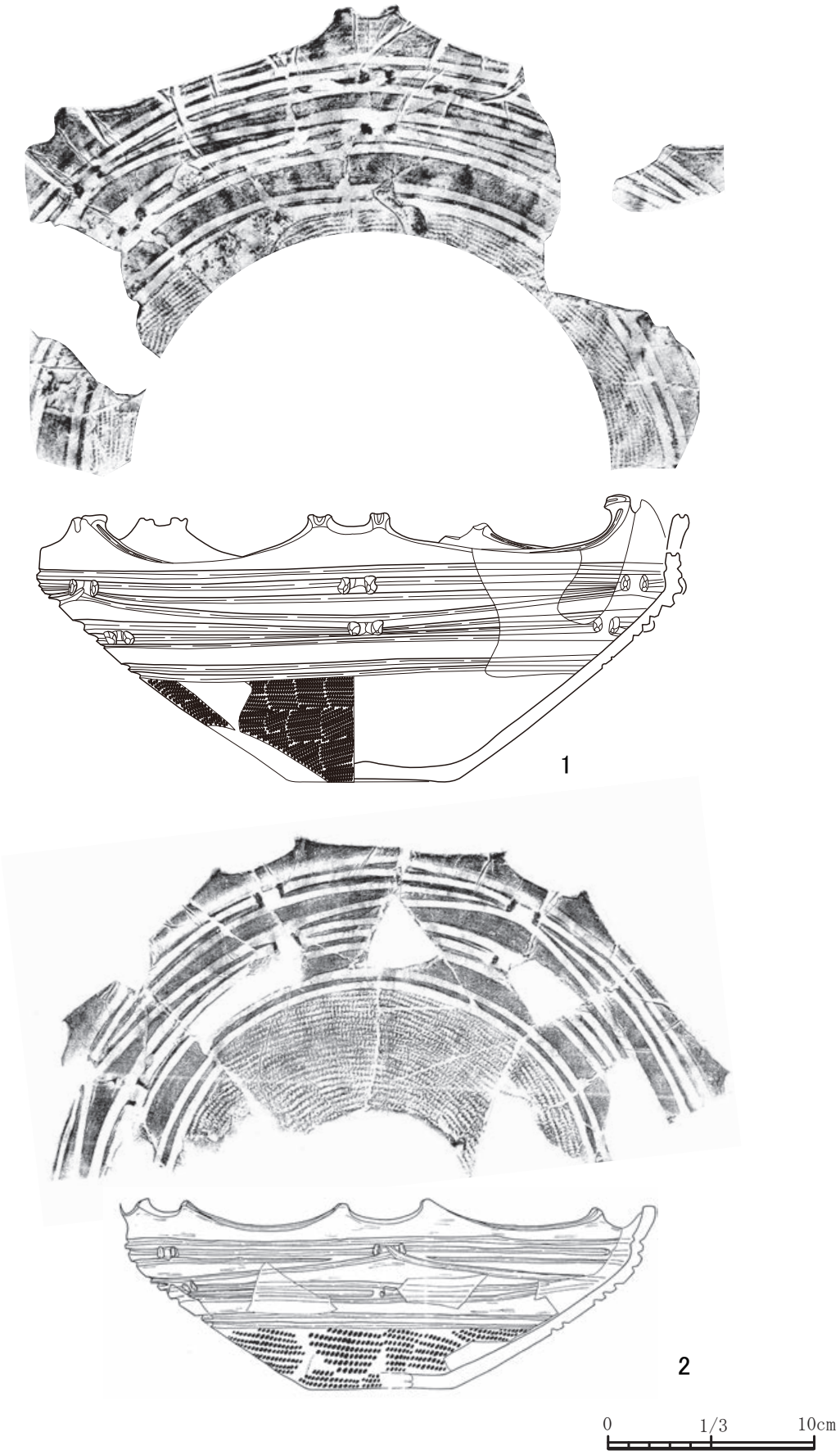


図8　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（2）

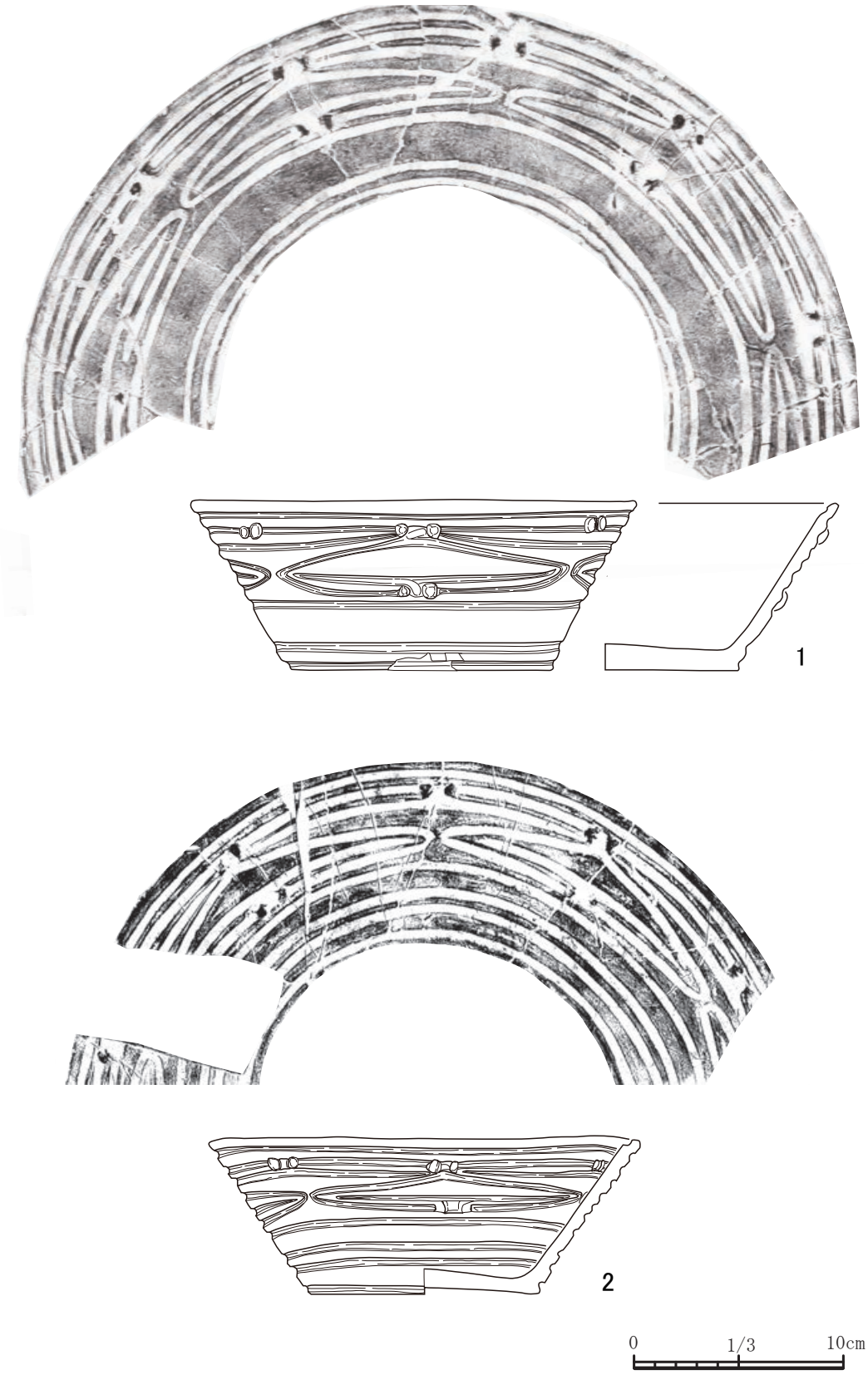


図9　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(3)

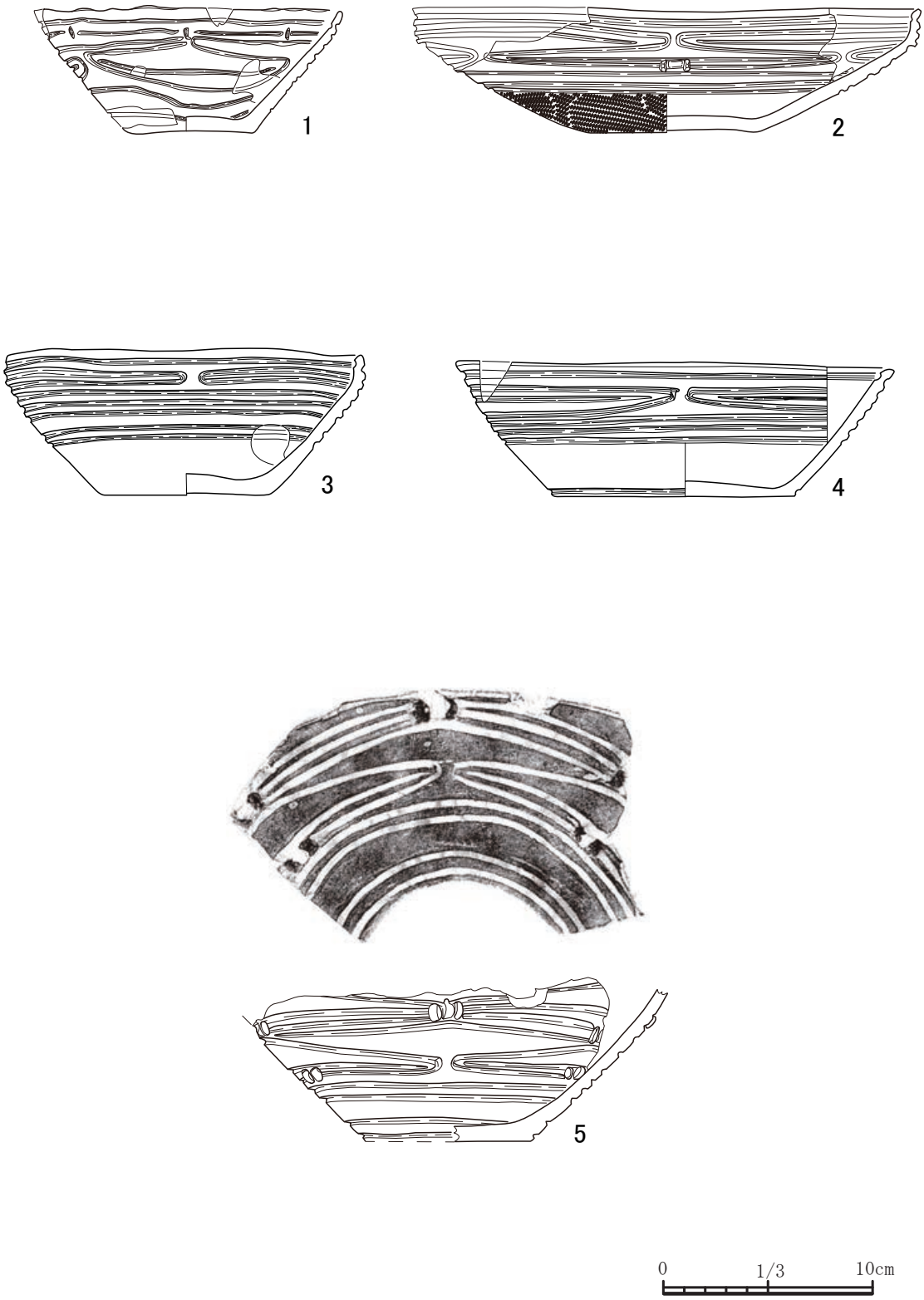


図10　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(4)

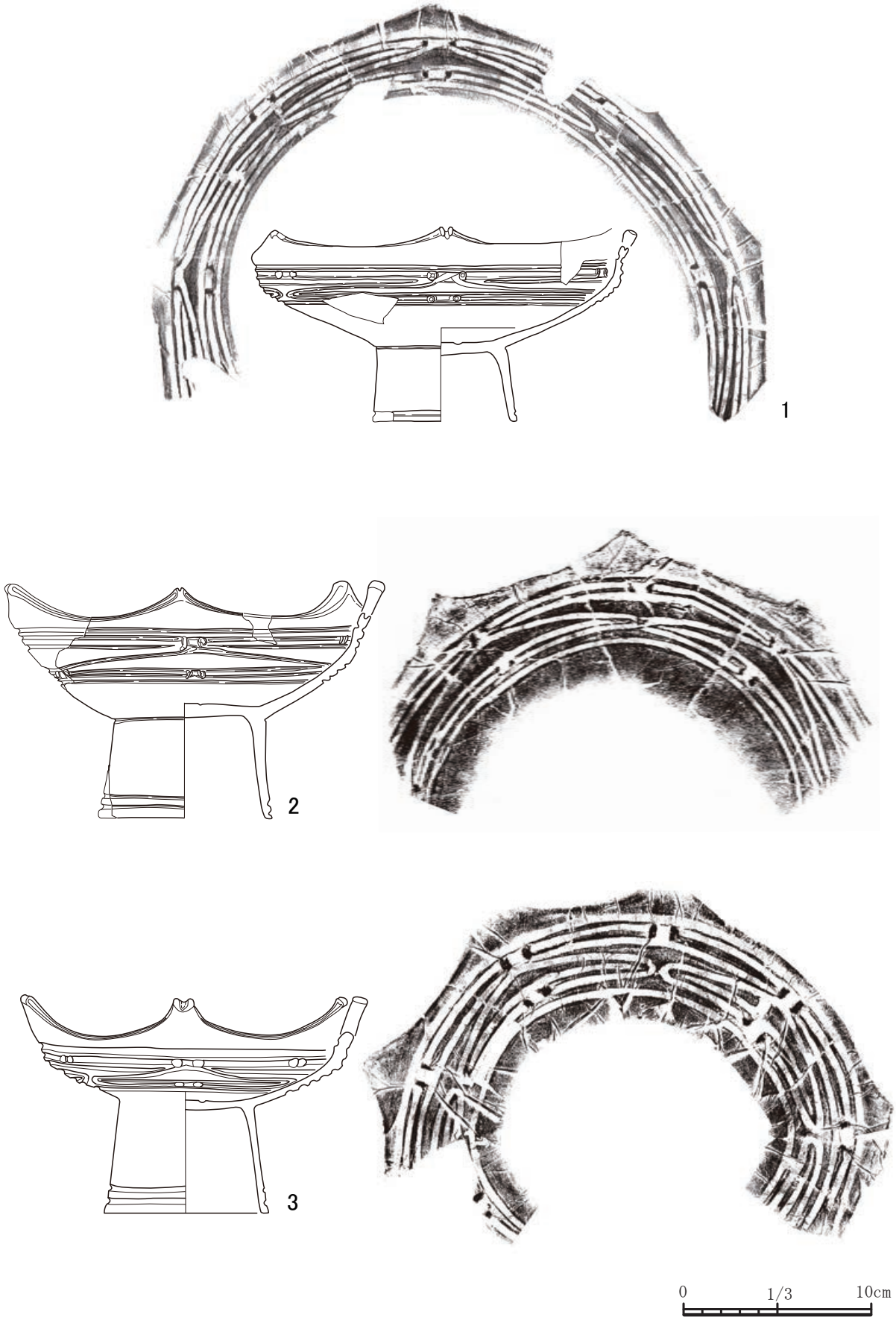


図11　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(5)

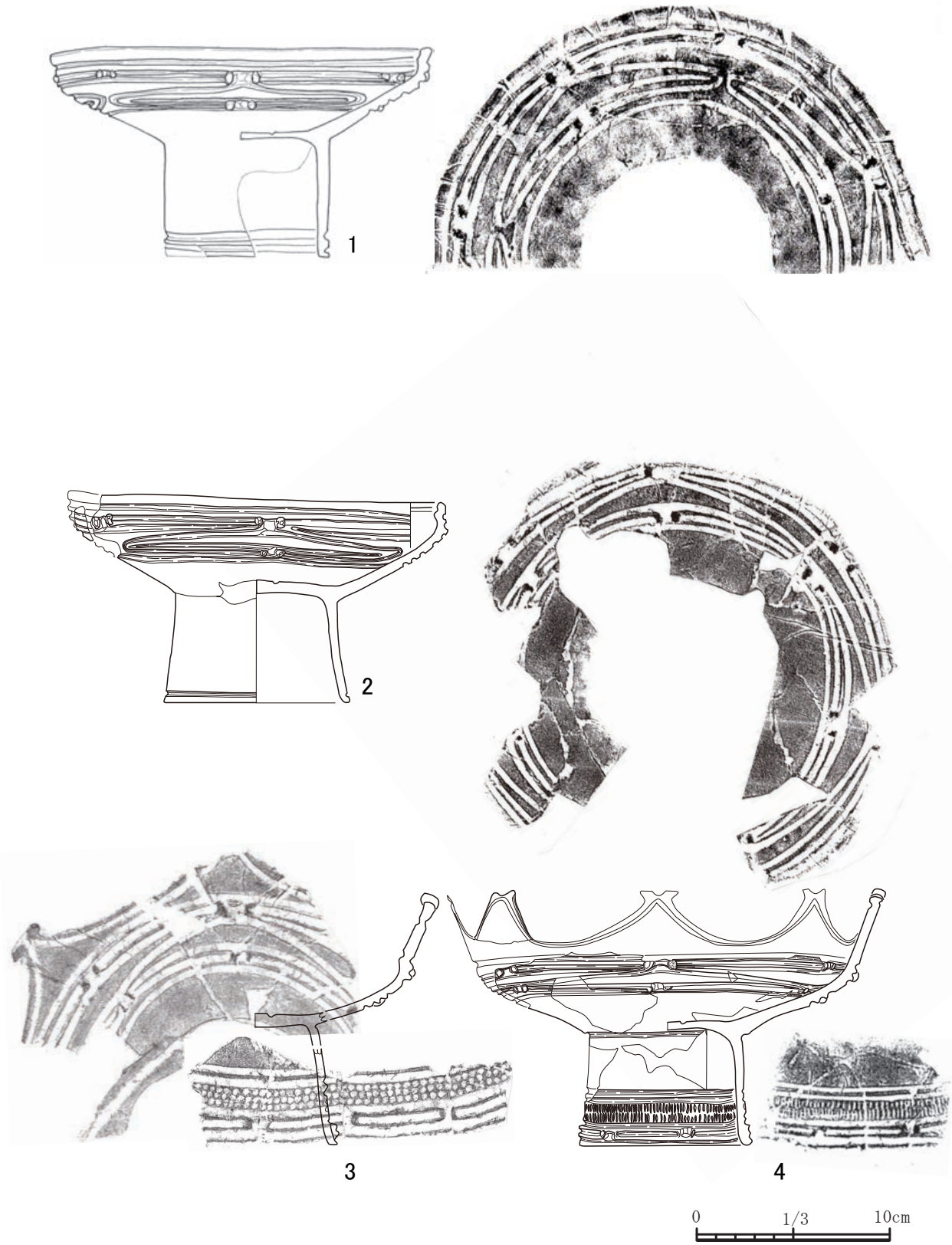


図12　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(6)

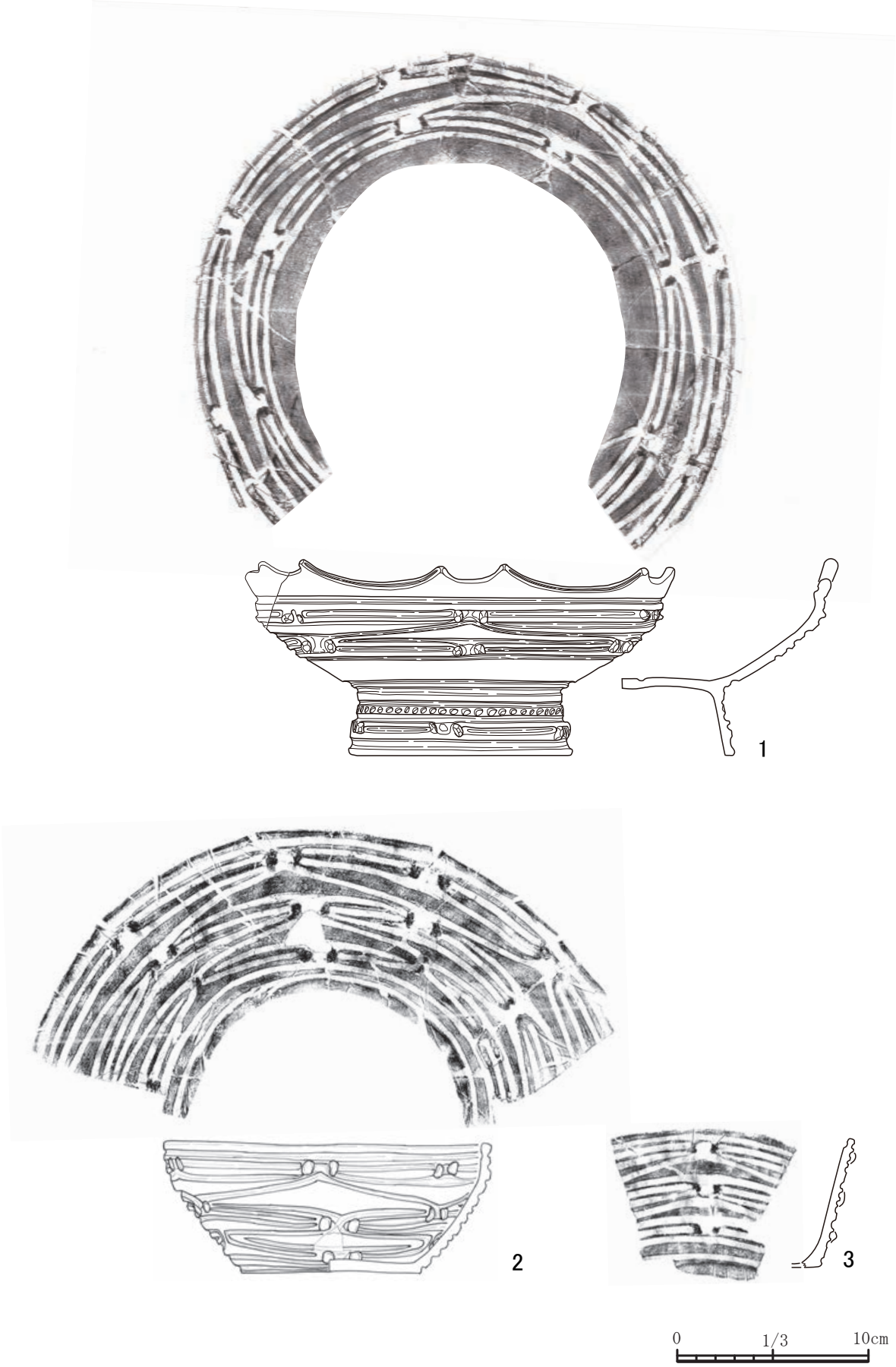


図13　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(7)

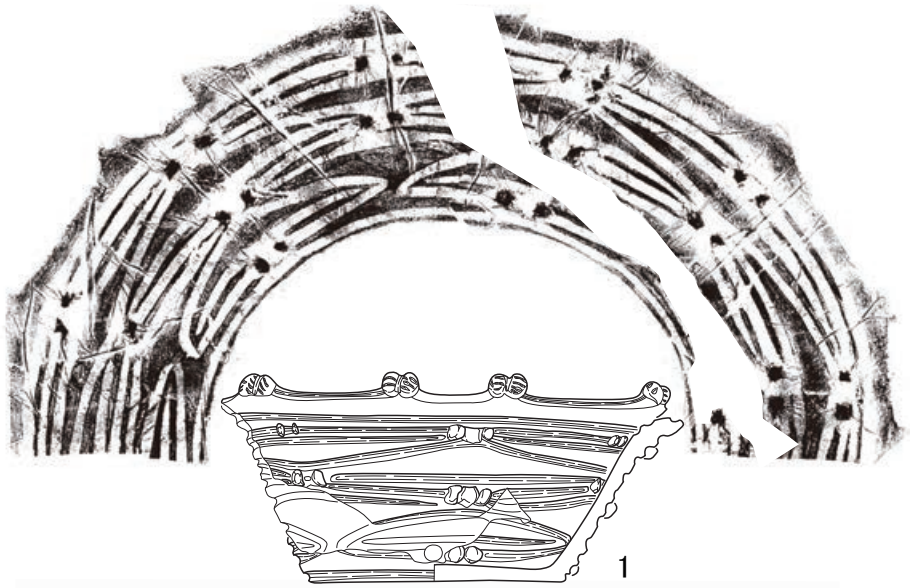


図14　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(8)

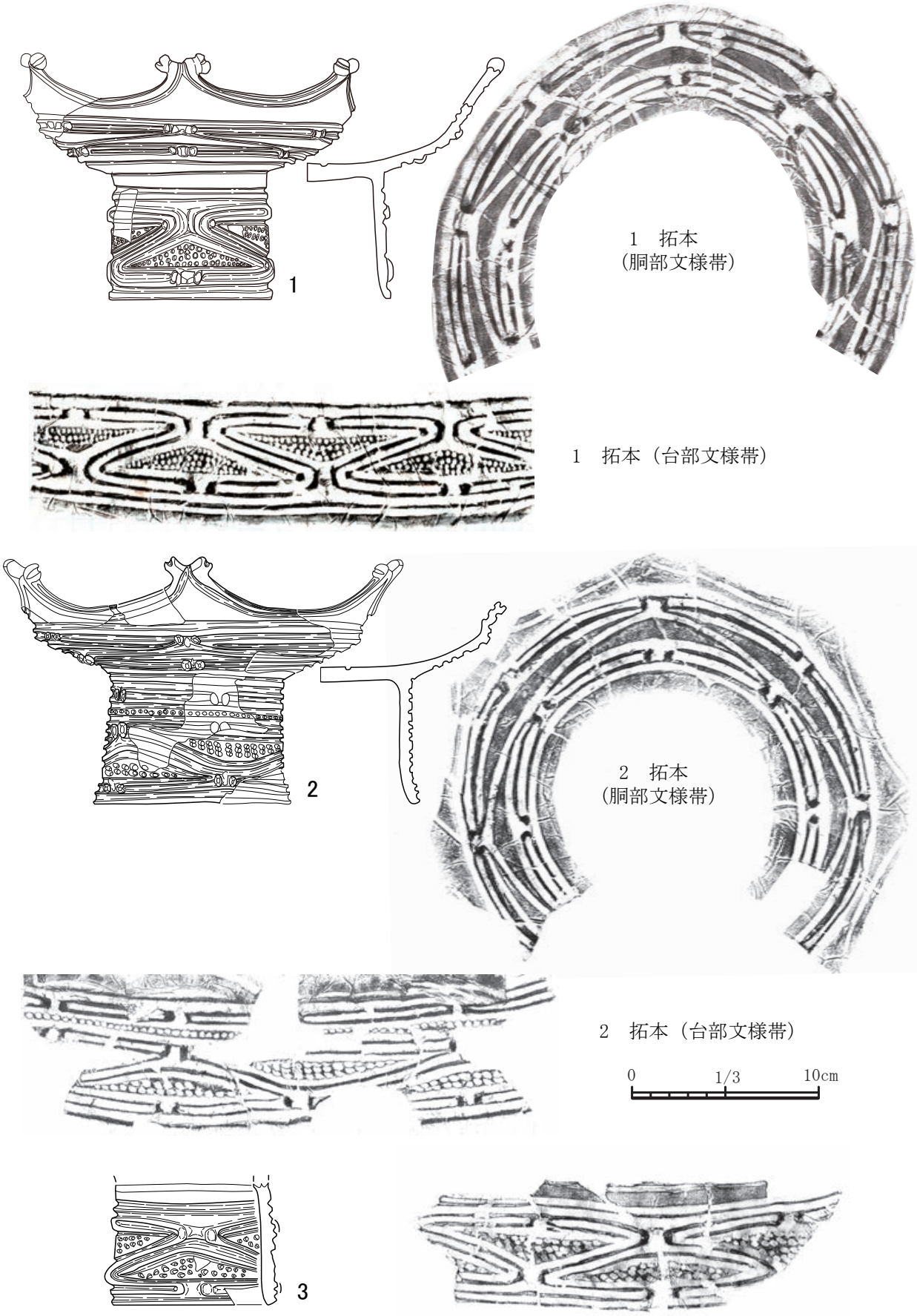


図15　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(9)

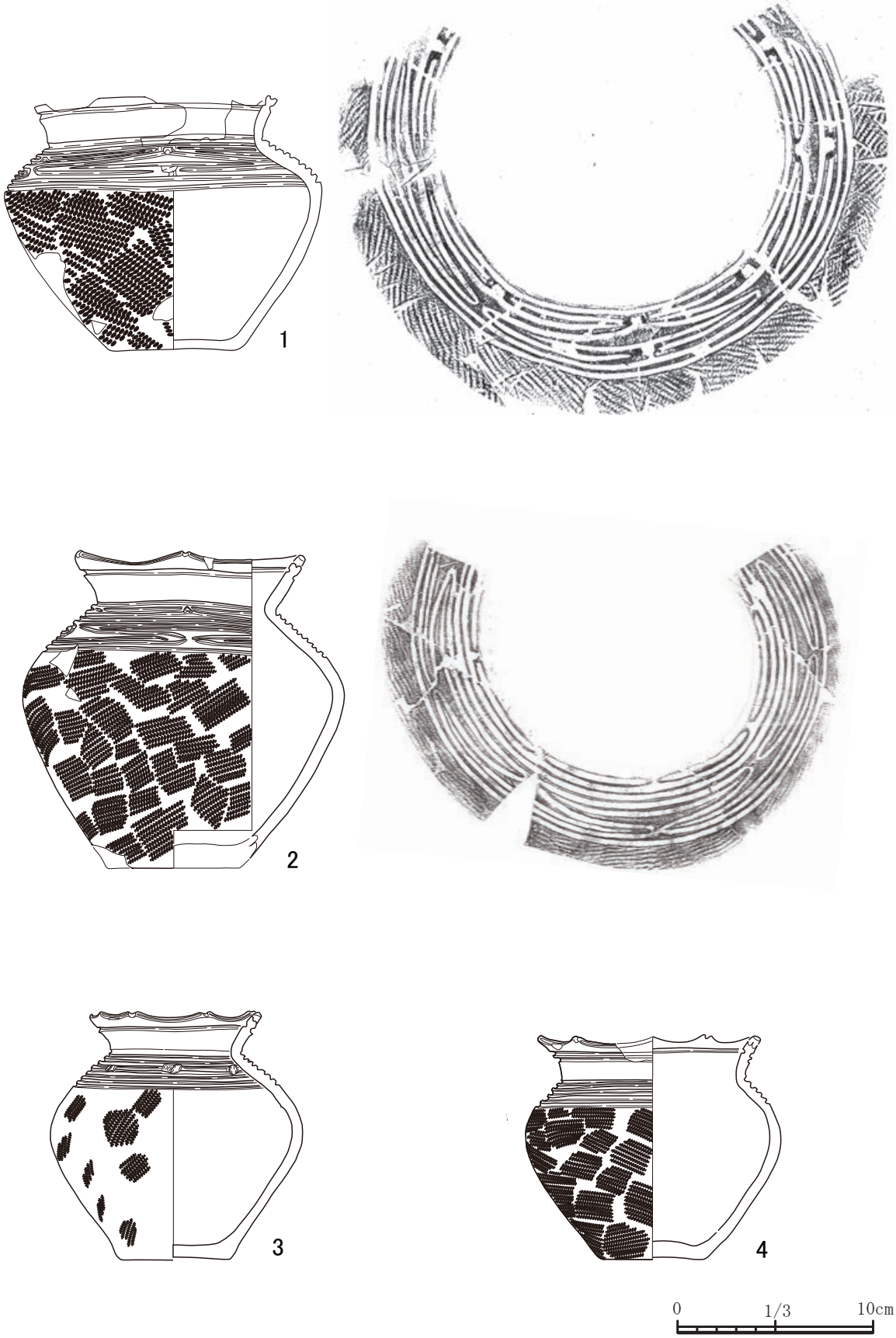


図16　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（10）

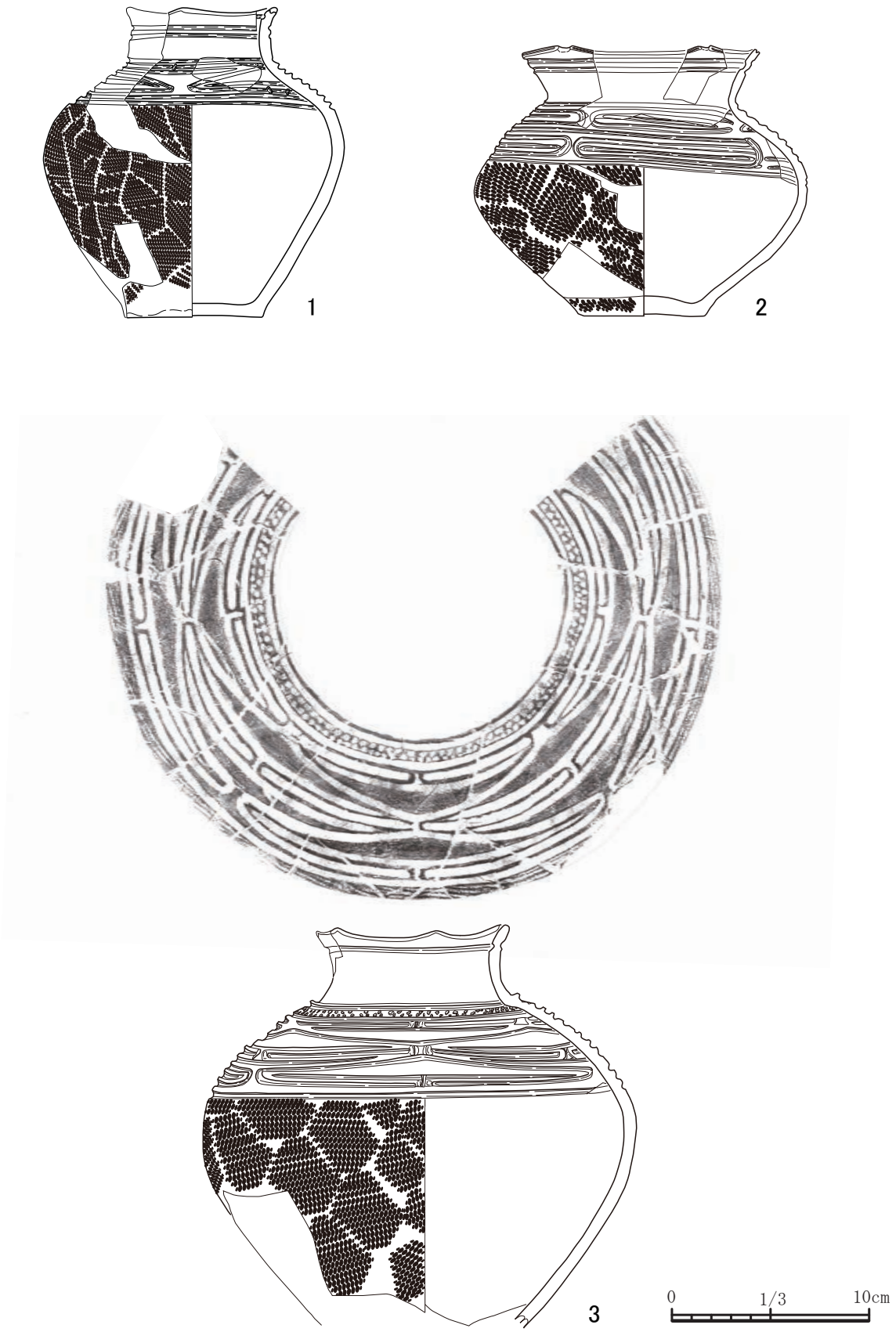


図17　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(11)

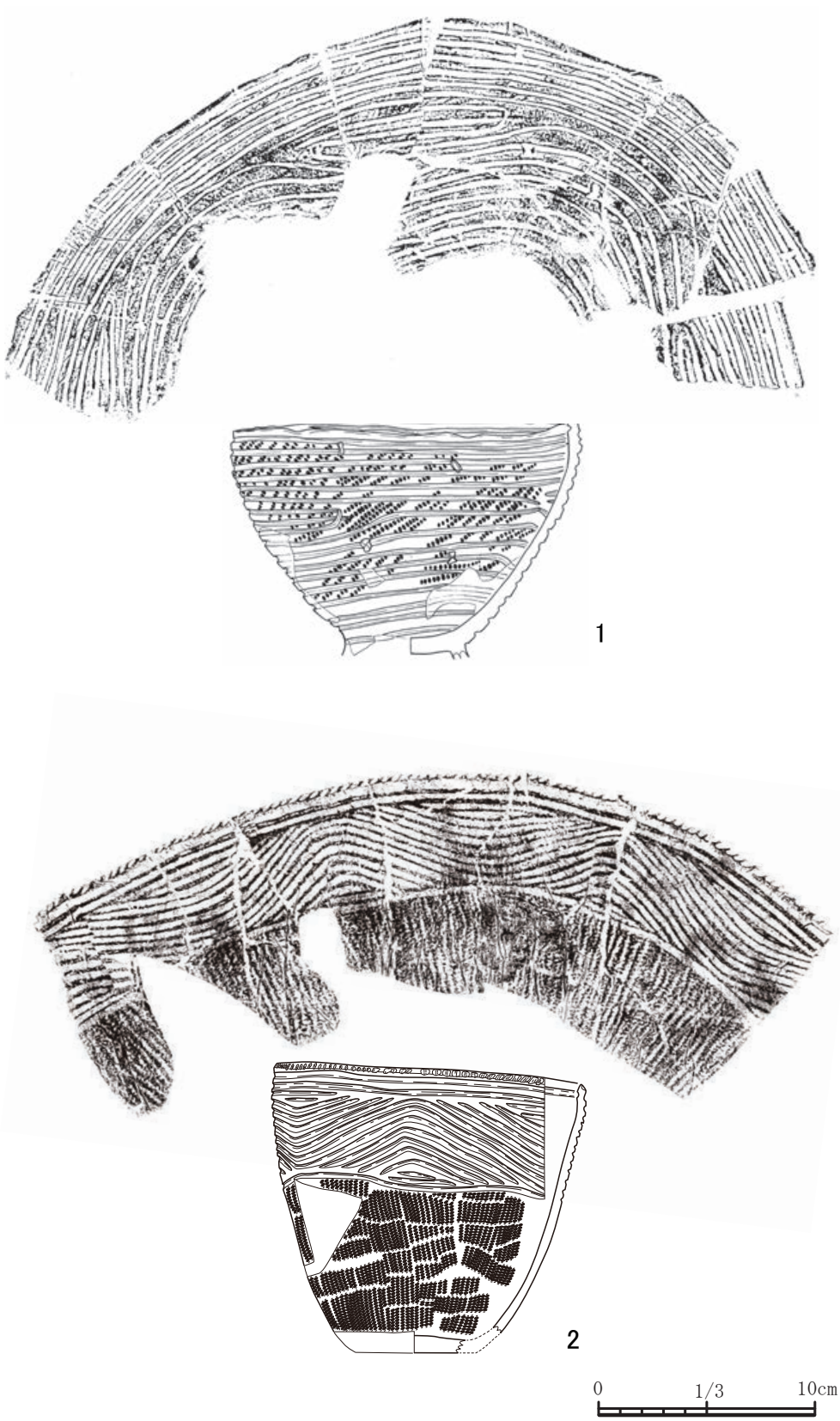


図18　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（12）

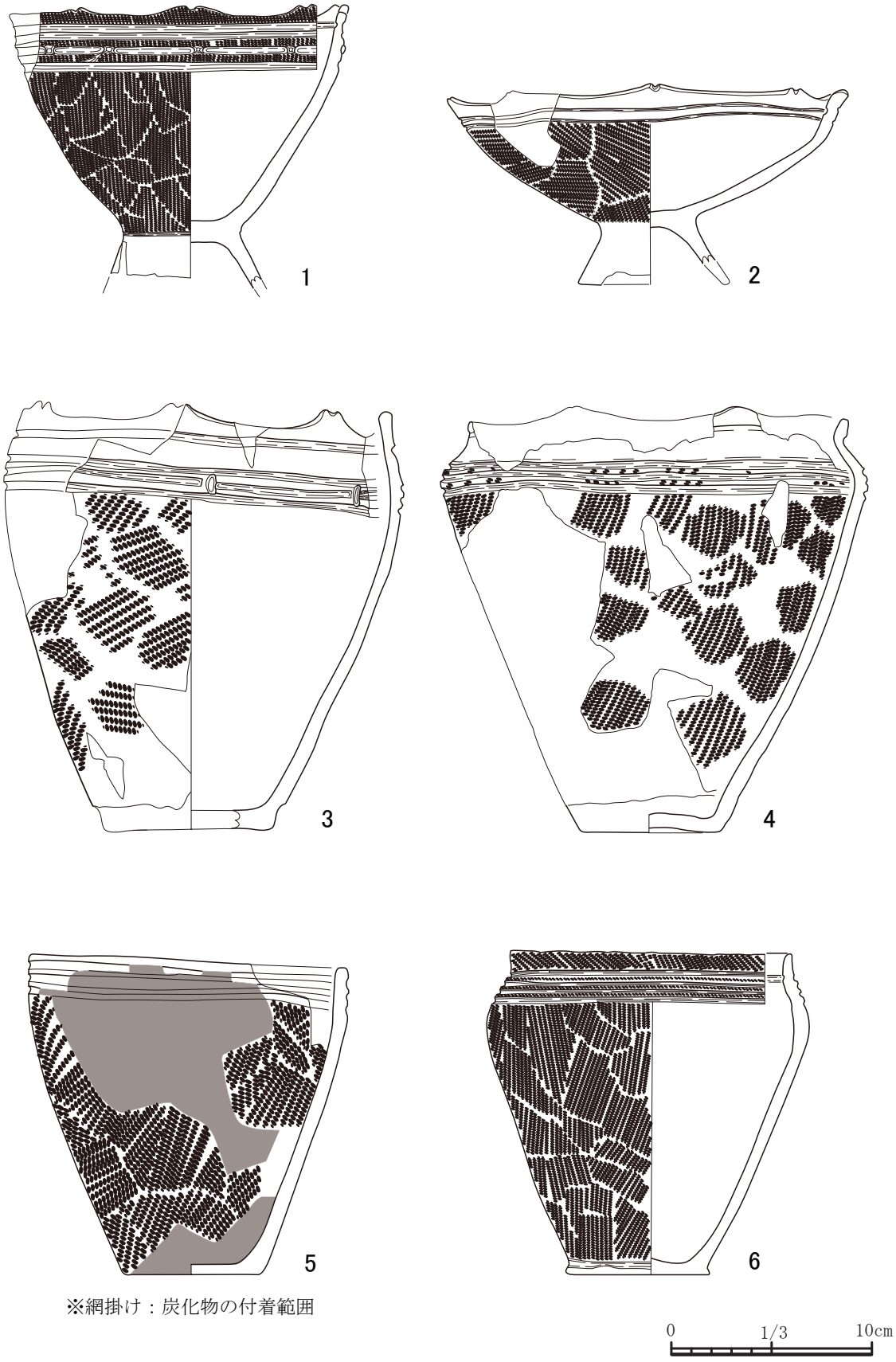


図19　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（13）

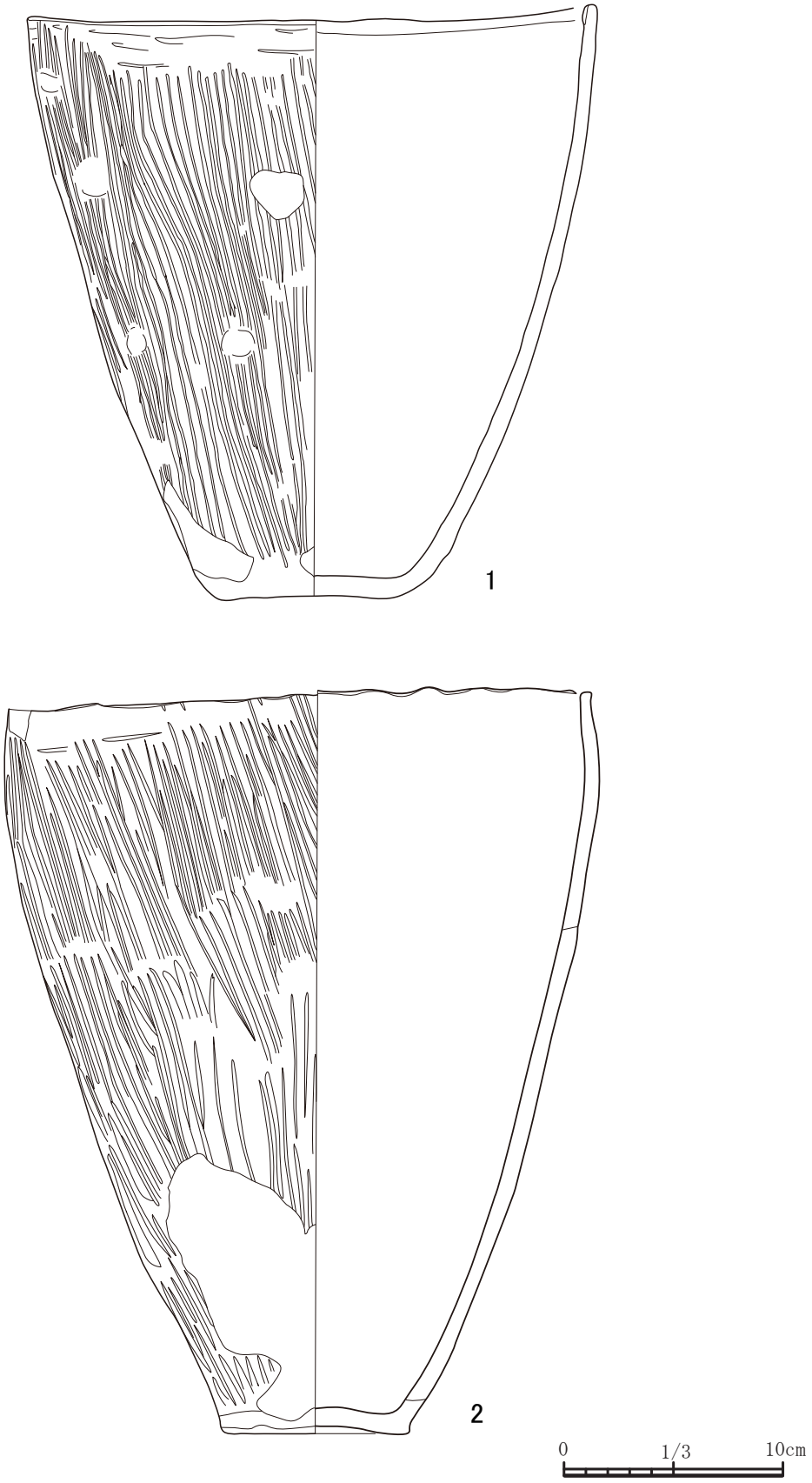


図20　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（14）

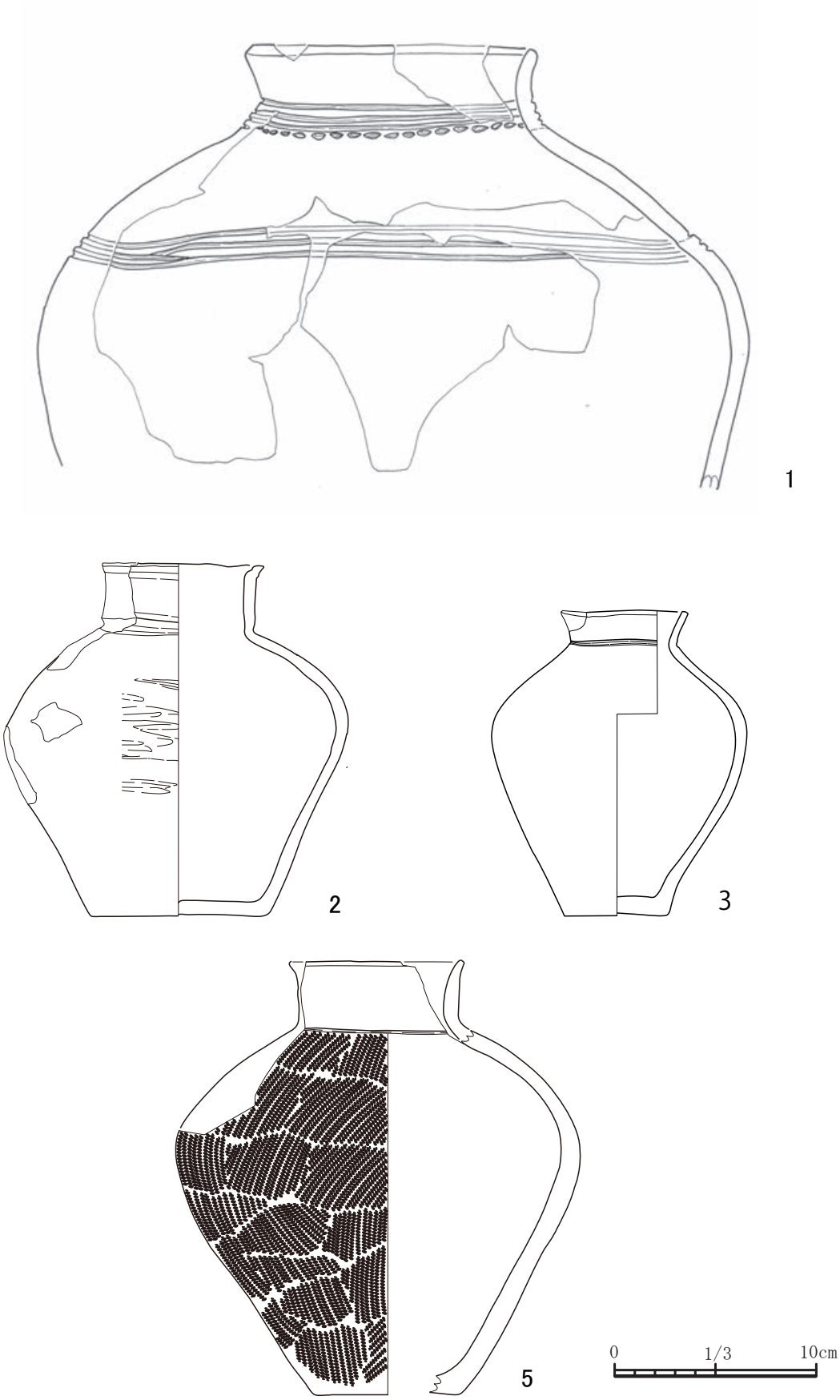


図21　　新谷雄蔵氏収集品の実測図（15）

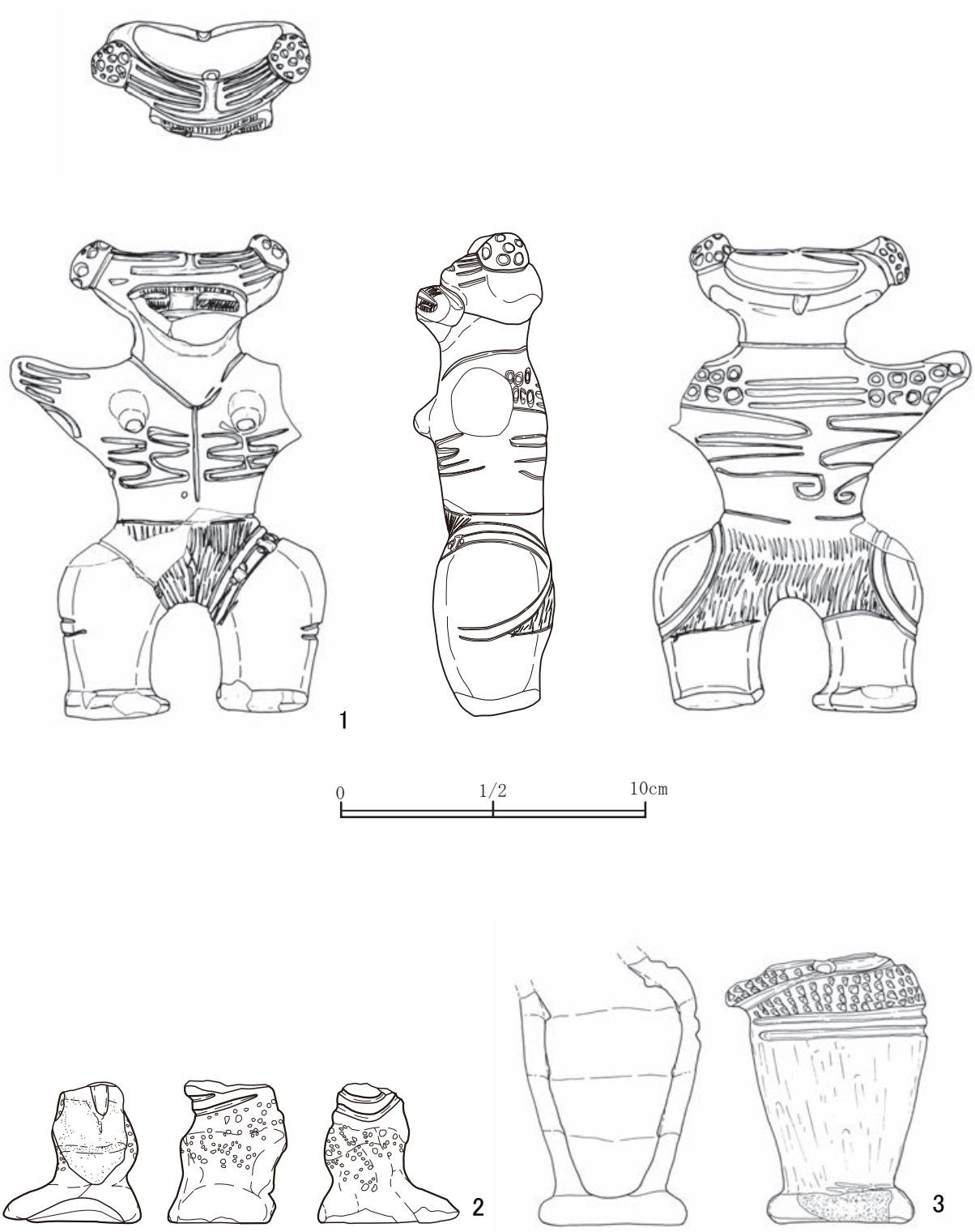


図22　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(16)

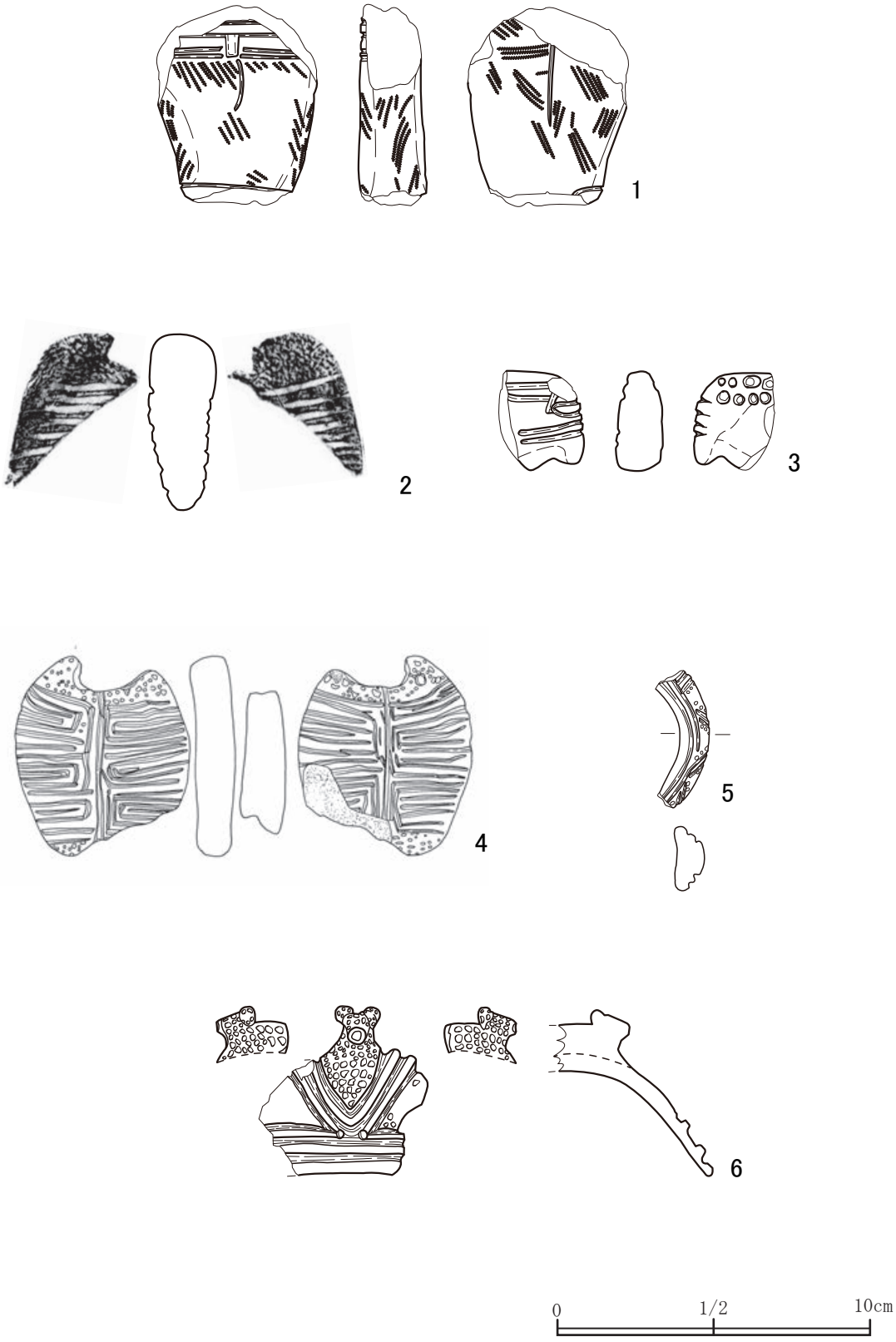


図23　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(17)

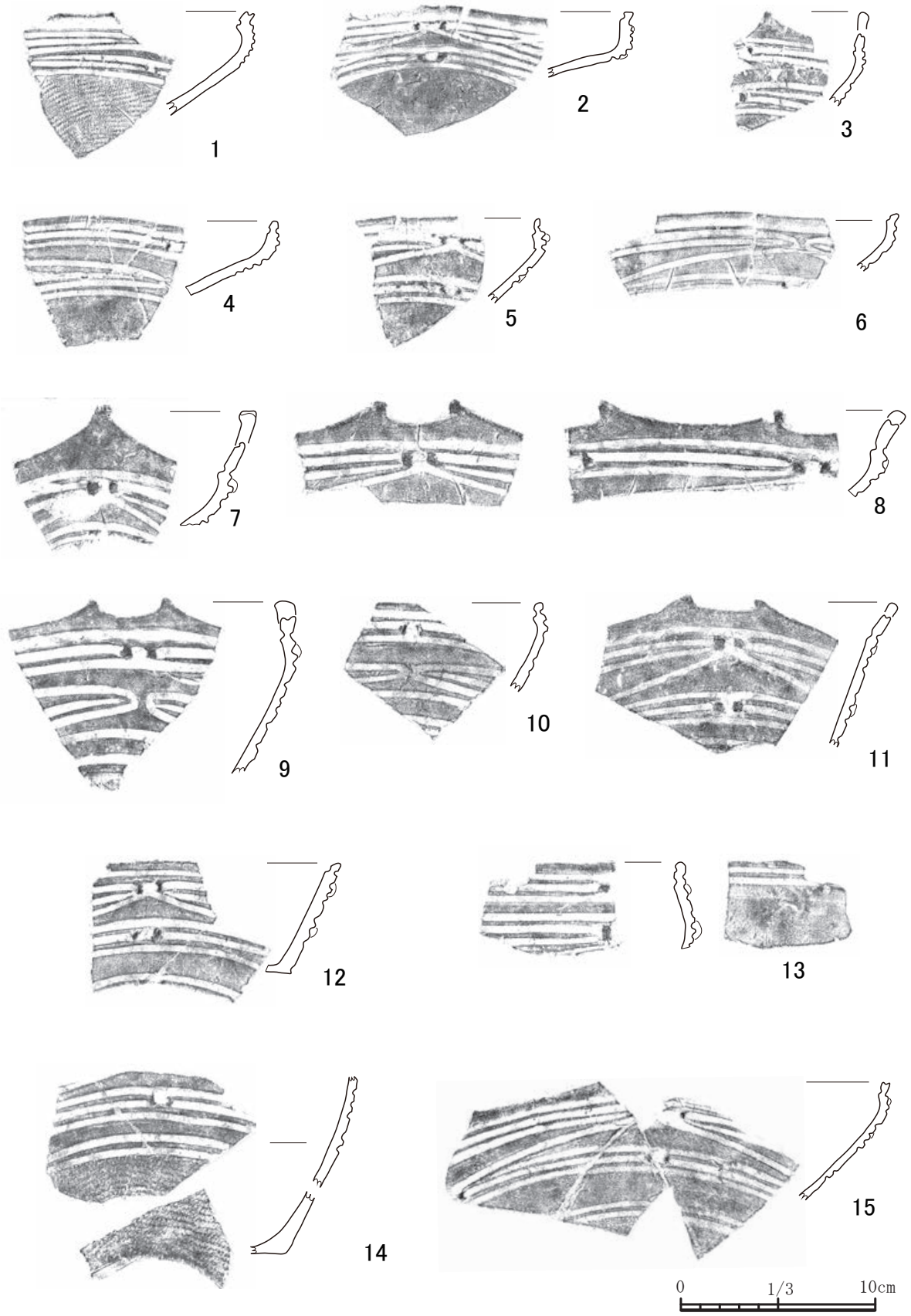


図24　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(18)

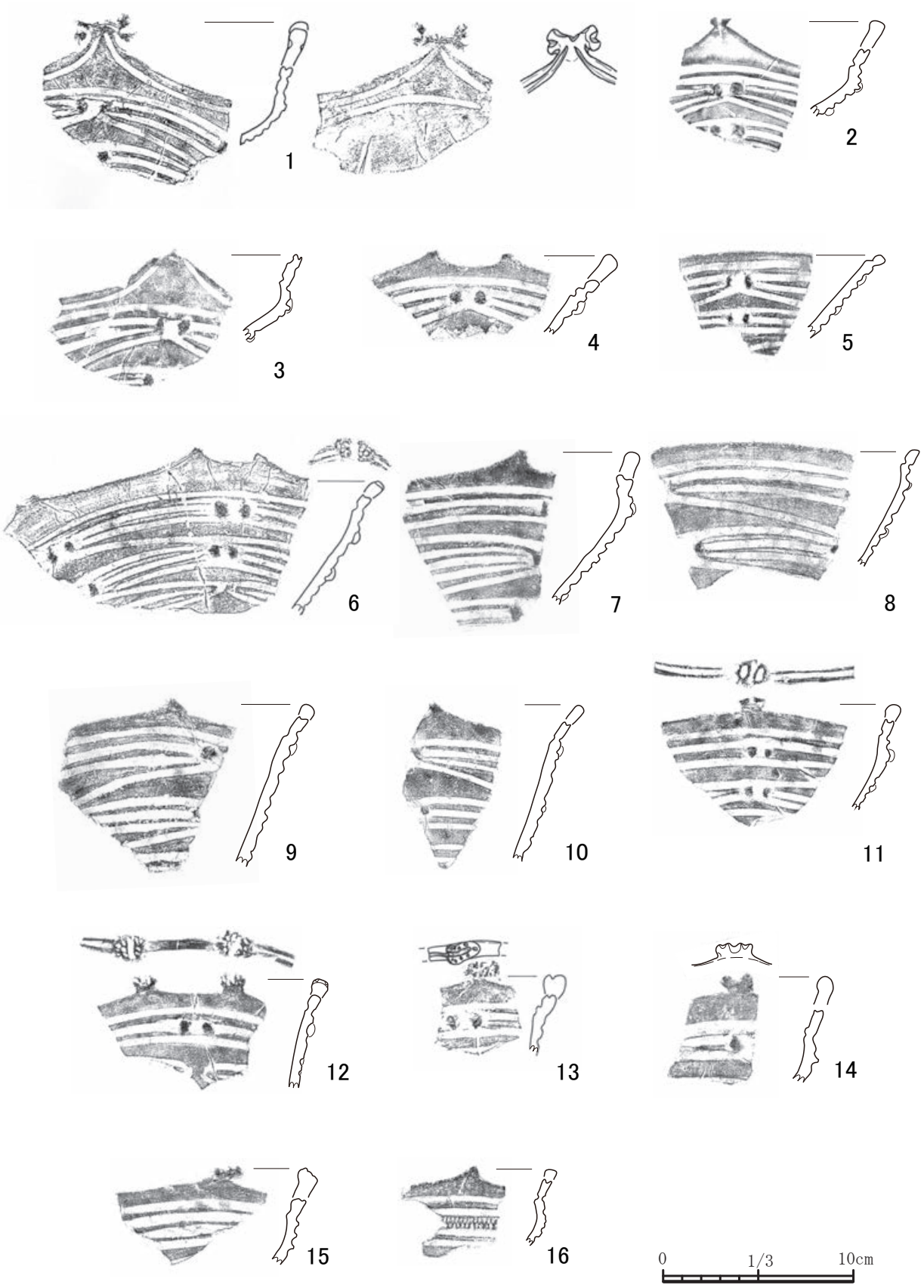


図25　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(19)

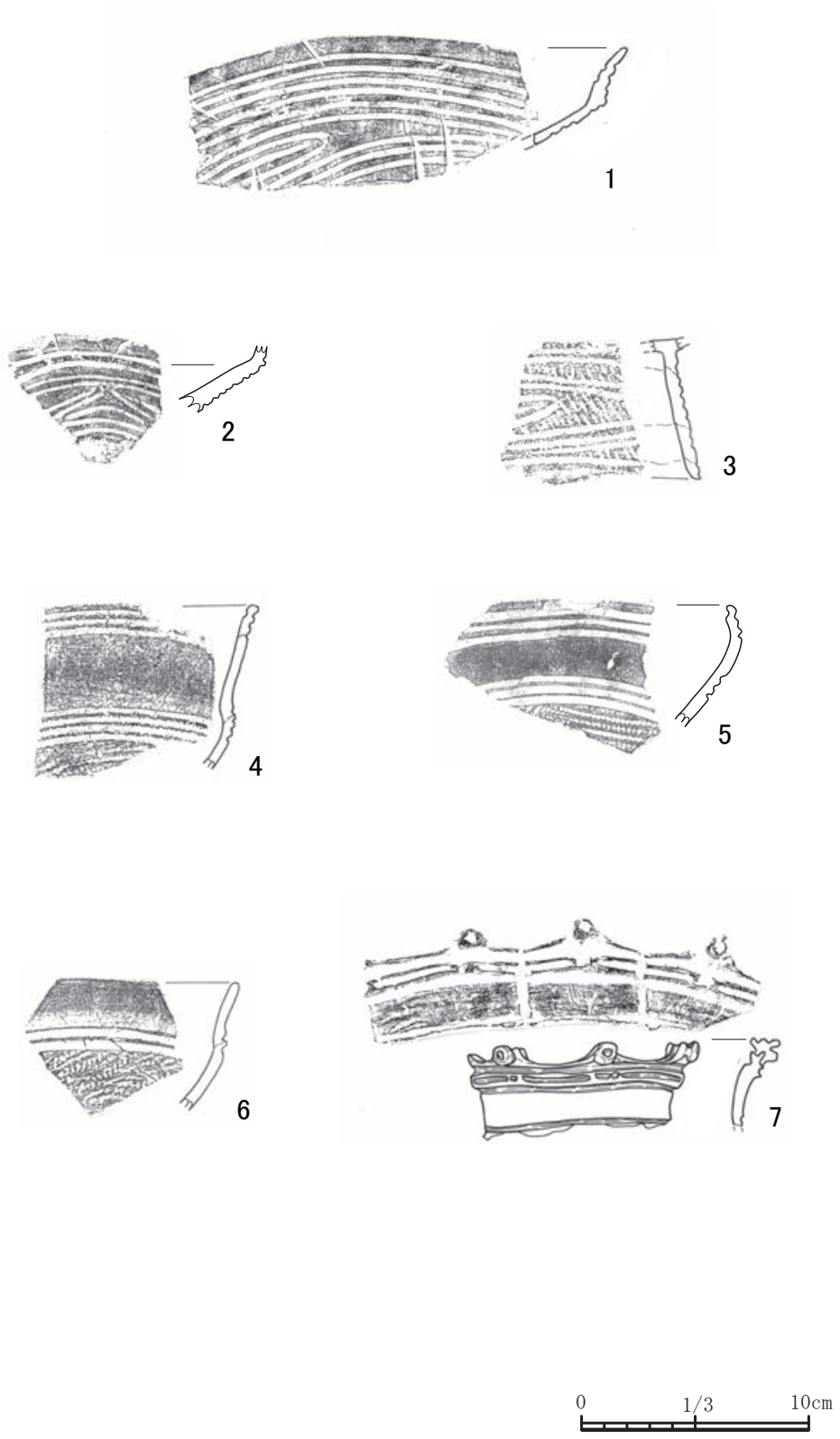


図26　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(20)

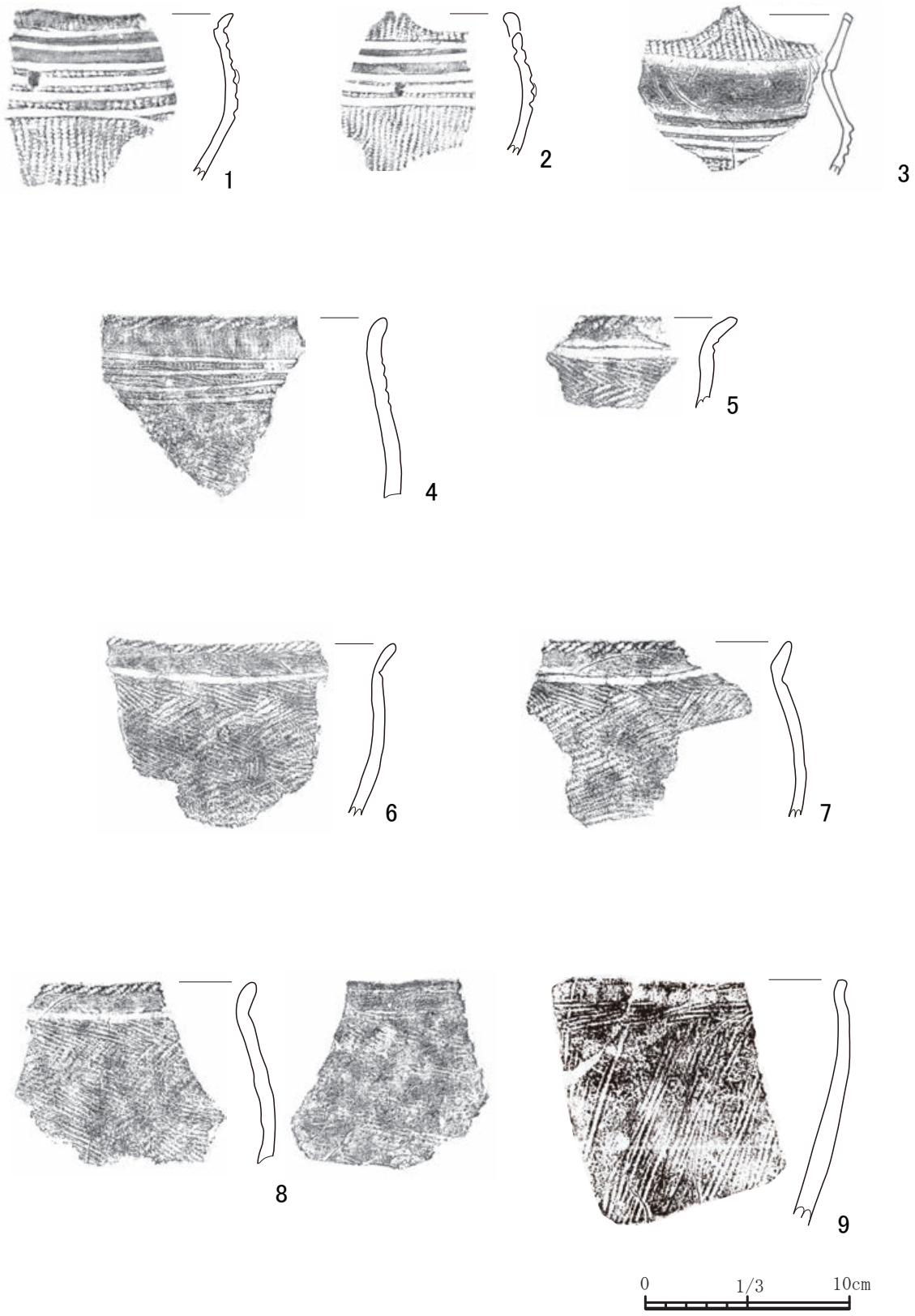


図27　　新谷雄蔵氏収集品の実測図(21)

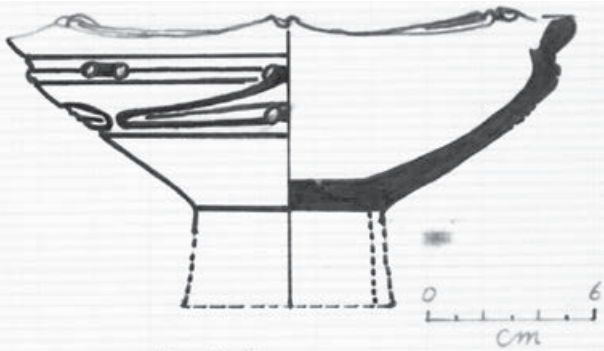
表2　新谷雄蔵氏収集品（復元可能個体）の属性表

図版番号		器種	出土遺跡	県立郷土館収蔵番号	新谷雄蔵氏の発表文献		本書図版番号（実測図集元番号）	部位	色調	備考
図	細目				1975	1984				
7	1	台付鉢	大曲	APM2023-42	25P-6		図28上（No.25）	台部・口縁部一部欠損	7,5YR 5/3 にぶい褐色	胎土精良、6単位対向突起、変形工字文
7	2	台付鉢	大曲	APM2023-147	25P-4		図28下（No.18）	体部1/5欠失	10YR 5/4 にぶい黄褐色	変形工字文、体部縄文LR、台部無文
7	3	浅鉢	大曲	APM2023-142	25P-17		図29上(No.59)	体部3/4欠損	5YR 5/4 にぶい赤褐色	変形工字文、体部縄文LR
7	4	浅鉢	大曲	APM2023-35	26P-22		図29下(No.62)	1/4のみ残存	10YR 7/4 にぶい黄褐色	変形工字文、体部縄文LR
7	5	浅鉢	大曲	APM2023-57	25P-14	○	図30上(No.28)	略完形、1/6欠損	7.5YR 6/4 にぶい橙色～5/4 にぶい褐色	工字文
7	6	鉢	-	APM2280-3	-		-	口縁部、胴部一部、底部一部欠失	10YR 7/4 にぶい黄褐色	陽刻手法の変形工字文
7	7	浅鉢	大曲	APM2023-50	25P-5		図30下(No.36)	底部欠失	7.5YR 5/4 にぶい褐色	8単位の対向突起、4単位の変形工字文、体部縄文LR
8	1	浅鉢	大曲	APM2023-53	25P-24		図31上(No.33)	略完形、1/6欠損	7.5YR 4/3 褐色	胎土精良、6単位対向突起、変形工字文、無文帯、下半縄文LR
8	2	浅鉢	大曲	APM2023-25	25P-23		図31下(No.17)	体部1/3欠失	10YR 6/6 明黄褐色	胎土精良、6単位対向口縁、変形工字文、体部縄文RL
9	1	浅鉢	大曲	-	25P-19		図32下(No.15)	略完形	10YR 5/4 にぶい黄褐	胎土精良、変形工字文
9	2	浅鉢	大曲	APM2023-144	25P-18		図32下(No.14)	完形	10YR 7/4 にぶい黄橙色	胎土精良、変形工字文
10	1	浅鉢	大曲	APM2023-139	-		図33上(No.41)	体部1/3欠損	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粗雑な胎土、崩れた変形工字文
10	2	浅鉢	大曲か	APM2023-58	25P-16		図33下(No.3)	口縁部中心に1/4欠損	5YR 4/3 にぶい赤褐色	変形工字文、体部縄文LR
10	3	浅鉢	大曲	APM2023-56	25P-13		図34上(No.11)	完形、やや欠損	7.5YR 5/4 にぶい褐色	工字文
10	4	浅鉢	大曲	APM2023-133	25P-15		図34下(No.2)	略完形	7.5YR 5/4 にぶい褐色	胎土精良、変形工字文
10	5	浅鉢	-	APM2023-141	-		-	口縁部及び体部2/3欠損	7.5YR 3/3 暗褐色～4/3 褐色	胎土精良、一部黒色化、変形工字文
11	1	台付鉢	大曲	-	25P-7		図35上(No.22)	口縁部1/4欠損	10YR 7/6 明黄橙色～ 8/6 黄橙色	山形口縁、変形工字文(3単位)、円形文
11	2	台付鉢	大曲	APM2023-140	-		図35下(No.21)	口縁1/2、台部1/3欠失	10YR 7/4 にぶい黄褐色	5単位山形口縁、変形工字文（4単位）、円形文
11	3	台付鉢	大曲	APM2280-1	25P-8	○	図36上(No.26)	底部・体部一部欠損	7.5YR 5/4 にぶい褐色～3/4 暗褐色	6単位山形口縁、変形工字文、円形文
12	1	台付鉢	砂沢	APM2023-130	25P-2		図36下(No.20)	台部一部欠損	7.5YR 4/3 褐色	平縁、変形工字文
12	2	台付鉢	大曲	APM2023-60	25P-1	○	図37上(No.4)	口縁部一部欠失	10YR 6/3 にぶい黄橙	平縁、変形工字文
12	3	台付鉢	-	APM2023-355	29P-22（台）		-	口縁部2/3、台部2/3欠失	5YR 3/3 暗赤褐色	胎土精良、顕著な研磨、波状口縁、変形工字文
12	4	浅鉢	大曲	APM2023-55	25P-12		図37下(No.60)	略完形、1/2欠損	5YR 3/6 暗赤褐色	胎土精良、口縁部突起は2箇所残存、変形工字文、刺突文帯
13	1	台付鉢	大曲	-	25P-9		図38上(No.37)	略完形	7.5YR 5/4 にぶい褐色	胎土精良、対向型突起（6単位）、変形工字文、刺突文帯
13	2	浅鉢	-	APM2023-145	-		-	3/4欠損、口縁部破片	10YR 6/4 にぶい黄橙色～4/3 にぶい黄褐色	胎土精良、赤色顔料顕著、変形工字文
13	3	浅鉢	大曲	APM2023-138	26P-20		図38下(No.27)	体部1/5欠失	10YR 7/4 にぶい黄橙～3/1 黒褐橙	胎土精良、変形工字文
14	1	浅鉢	砂沢	APM2023-131	26P-26		図39上(No.23)	略完形・1/6欠損	10YR 7/4 にぶい黄褐色	胎土精良、対向型刺突文突起3単位（9個）、変形工字文
14	2	浅鉢	大曲	APM2280-2	26P-25		図39下(No.26)	口縁部1/3、底部一部欠損	5YR 5/4 にぶい赤褐色～3/3 暗赤褐色	胎土精良、対向型口縁部突起（6単位）、変形工字文
14	3	浅鉢	砂沢	APM2023-59	26P-27		図40(No.40)	体部1/2欠失	10YR 8/4 浅黄橙色～7/4 にぶい黄橙色	胎土精良、対向型口縁 (6単位）、変形工字文
15	1	台付鉢	大曲	APM2023-137	25P-11		図41上(No.38)	略完形	5YR 2/2 黒褐色～ 4/2 灰褐	胎土精良、研磨・光沢顕著、変形工字文、脚部に刺突文充填
15	2	台付鉢	大曲	-	25P-10		図41下(No.39)	口縁部2/3、台部1/2欠失	10YR 5/2 灰黄褐	胎土精良、山形口縁（6単位）、変形工字文（3単位）、脚部に刺突文充填
15	3	台付鉢	-	APM2023-146	-		-	台部破片	7.5YR 3/3 暗褐色～4/3 褐色	胎土精良、外面に光沢、隆線手法の変形工字文
16	1	壷	大曲	APM2023-47	26P-33		図42上(No.13)	体部1/4欠失	7.5YR 5/4 にぶい褐色	変形工字文、体部縄文RL、砂粒少量含む
16	2	壷	大曲	-	26P-32		図42下(No.9)	底部3/4欠失	7.5YR 6/6 橙	二叉山形突起（5単位）、変形工字文（3単位）、体部縄文RL
16	3	壷	大曲	-	26P-31		図43上(No10)	完形	2.5YR 7/3 浅黄褐～7/3 にぶい黄橙	波状口縁（8単位）、平行沈線文、キザミ（8単位）、体部縄文LR
16	4	壷	大曲	-	26P-30		図43下(No.16)	口縁部1/4欠失	7.5YR 6/6 橙	波状口縁（8単位）、平行沈線文、体部縄文RL

図版番号		器種	出土遺跡	県立郷土館収蔵番号	新谷雄蔵氏の発表文献		本書図版番号（実測図集元番号）	部位	色調	備考
図	細目				1975	1984				
17	1	壷	大曲	APM2023-48	26P-34		図44上(No.58)	口縁部2/3、体部1/2欠失	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色～10YR6/6 明褐色	変形工字文、体部縄文RL
17	2	壷	大曲	APM2023-136	26P-36		図44下(No.32)	体部1/2欠失	10YR 7/6 明黄褐色～6/4 にぶい黄橙色	4単位対向突起、流水状工字文、体部縄文LR
17	3	壷	大曲	-	26P-35		図45上(No.6)	口縁部一部、胴部1/8、底部欠損	10YR 7/6 明黄褐～6/4 にぶい黄橙	胎土精良、波状口縁（7単位）、変形工字文（4単位）、体部縄文LR
18	1	台付深鉢	大曲	APM2023-27	26P-37	○	図45下(No.35)	台部・体部一部欠失	7.5YR 4/3 褐色	6単位突起、波状（工字）文
18	2	深鉢	大曲	APM2023-41	26P-38	○	図46上(No.34)	体部1/7欠損	7.5YR 4/3 褐色～3/3 暗褐色	口唇刻目文・連続する山形文モチーフ、体部縄文RL
19	1	台付深鉢	砂沢	APM2023-52	-		図46下(No.1)	口縁部1/4欠損	7.5YR 5/6 明褐色～10YR 6/6 明黄褐色	波状口縁8単位、平行沈線4条、沈線間に貼付文、体部縄文RL
19	2	台付鉢	大曲	APM2023-143	25P-3		図47上(No.42)	略完形、口縁部・台部1/6欠損	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	8単位波頂部突起、体部RL縄文、粗製、低い台
19	3	深鉢	大曲	APM2023-51	-		図47下(No.64)	口縁部1/4・体部2/3欠損	10YR 4/3 にぶい黄褐色～3/3 暗褐色	波状口縁8単位・無文帯・平行沈線3条、体部縄文LR
19	4	深鉢	砂沢	APM2023-132	-		図48上(No.31)	口縁部2/3、体部1/3欠損	10YR 7/4 にぶい黄褐色～5/4 にぶい黄褐色	波状口縁・平行沈線文3条、体部縄文1R
19	5	深鉢	砂沢	APM2023-126	-		図48下(No.29)	略完形	10YR 4/1 褐灰色	口縁部直下沈線文3条、体部縄文LR、内外面多量に炭化物付着
19	6	深鉢	砂沢	APM2023-129	-		図49上(No.30)	略完形	10YR 7/6 黄橙褐色、10YR 6/6 明黄褐色	口縁部直下LR、平行沈線文3条、体部縄文LR
20	1	深鉢	不明	APM2023-108	26P-41		-	体部1/3欠損	10YR 7/3 にぶい黄橙色	条痕文
20	2	深鉢	大曲	APM2023-24	26P-40		図49下(No.55)	略完形、口縁部一部欠失	10YR 6/4 にぶい黄橙色	条痕文、口縁部直下ナデ消し
21	1	壷	大曲	APM2023-151	-		-	体部上半の1/2のみ残存	7.5YR 5/3 にぶい褐色～4/3 褐色	頸部・胴部に平行沈線文３条、頸部直下に列点文
21	2	壷	大曲	APM2023-135	-		図50上(No.52)	口頸部・体部一部欠失	7.5YR 6/4 にぶい橙色	頸部沈線文1条、無文、横方向の研磨顕著
21	3	壷	大曲	APM2023-39	26P-29		図50下(No.51)	口縁部2/3、体部一部欠失	10YR 7/4 にぶい黄褐色～3/4 暗褐色	無文、頸部に１条沈線
21	4	壷	大曲	APM2023-150	-		図51上(No.53)	口縁部一部・体部1/3欠失、底部穿孔	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口頸部無文、体部縄文LR
22	1	土偶	大曲	APM2023-153	-	○	-	頭部の口付近・左手欠失	7.5YR 8/6 浅黄橙色～7/4 にぶい橙色	変形工字文・平行沈線文・円形文等、頭頂部に穿孔
23	6	蓋	-	APM2023-155	-		-	体部3/4欠損	10YR 7/6 明黄褐色	獣頭突起・変形工字文

表3　新谷雄蔵氏収集品（破片資料）の属性表

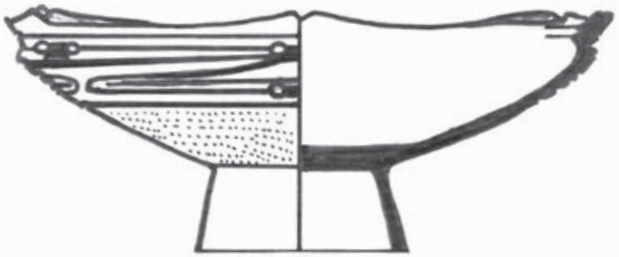
図版番号		器種	県立郷土館収蔵番号	鉛筆描き注記	『北奥古代文化』	部位	備考
図	細目						
24	1	台付鉢	APM2023	セコ12		口縁部破片	小波状口縁、変形工字文
24	2	台付鉢	APM2023	セコ42		口縁部破片	精良、表面に黒色物質微量、変形工字文、平縁
24	3	台付鉢	APM2023-339	セ15	28P-9	口縁部破片	変形工字文
24	4	台付鉢	APM2023	セコ13		口縁部破片	平縁
24	5	台付鉢	APM2023	セコ14		口縁部破片	変形工字文、平縁
24	6	台付鉢	APM2023	セコ15、17		口縁部破片	焼成良好、平縁、変形工字文
24	7	台付鉢/浅鉢	APM2023	セ2,3		口縁部破片	変形工字文、山形口縁
24	8	浅鉢	APM2023	セコ61,61の2、セ1		口縁部破片	精良、茶色化粧土、変形工字文
24	9	浅鉢	APM2023	なし		口縁部破片	対向突起、変形工字文
24	10	浅鉢	APM2023	セコ21		口縁部破片	変形工字文
24	11	浅鉢	APM2023	セコ27		口縁部破片	変形工字文、波状口縁
24	12	浅鉢	APM2023	セコ34、セテ25		口縁部破片	精良、全面に暗褐色の化粧土か、変形工字文
24	13	鉢	APM2023	セコ4		口縁部破片	変形工字文
24	14	浅鉢	APM2023-335	～セドでR51	27P-7-3	胴部破片	同一個体2片（接合せず）
24	15	台付鉢	APM2023-336	セコ72	27P-7-4	口縁部破片	精良、磨き、内面は茶色化粧土がけ、変形工字文
25	1	台付鉢	APM2023	セ5		口縁部破片	変形工字文（複線化）、二叉突起、波状口縁
25	2	台付鉢	APM2023	セコ58		口縁部破片	精良、茶色化粧土、変形工字文（複線化）
25	3	台付鉢	APM2023	なし		口縁部破片	変形工字文、山形口縁
25	4	浅鉢	APM2023	セコ56		口縁部破片	変形工字文、波状口縁
25	5	浅鉢	APM2023-341	セコ10	29P-29、参考例AB-2型	口縁部破片	変形工字文
25	6	浅鉢	APM2023-347	セコ36	28P-12	口縁部破片	刺突突起（おそらく4単位）とキザミ突起、赤色顔料表面付着、海綿骨針多量
25	7	浅鉢	APM2023-348	セ6	28P-13	口縁部破片	変形工字文
25	8	浅鉢	APM2023	セコ8		口縁部破片	内面沈線粗い、粘土粒小、雲母微量
25	9	浅鉢	APM2023-357	セ12	29P-25、参考例AB-1型	口縁部破片	変形工字文
25	10	浅鉢	APM2023-334	セ14	27P-7-2	口縁部破片	変形工字文
25	11	浅鉢	APM2023	なし		口縁部破片	変形工字文、刻み突起
25	12	浅鉢	APM2023	セ12		口縁部破片	変形工字文、平縁、刺突文突起
25	13	浅鉢	APM2023-350	なし	29P-14-1	口縁部破片	獣頭突起
25	14	浅鉢	APM2023-344	セコ53	28P-11	口縁部破片	変形工字文
25	15	浅鉢	APM2023-349	なし	28P-14,14a,14b	口縁部破片	獣頭突起
25	16	台付鉢	APM2023-360	セコ39	27P-1	口縁部破片	刺突文帯
26	1	台付鉢	APM2023-333	セコ1	27P-6	口縁部破片	精良、雲母少量、化粧土の痕跡　波状沈線文
26	2	台付鉢	APM2023	セド33		口縁部破片	変形工字文（複線・細線化）、雲母大量
26	3	台付鉢	APM2023-356	②　ト台	29P-23	台部破片	波状文＋刺突文、磨きがないため粗（粘土接合も消さず）
26	4	台付鉢	APM2023-331	セコ75、拓本には55	27P-4,4a	口縁部破片	橙褐色に発色しない箇所あり、無文帯と沈線文、金雲母・小砂粒多量
26	5	台付鉢	APM2023-330	セコ38	27P-3,3a	口縁部破片	金雲母・砂粒少量、無文帯と沈線文、縄文LR
26	6	台付鉢	APM2023-332	セコX	27P-5,5a	口縁部破片	無文帯と沈線文、縄文LR
26	7	壺	APM2023-354	セコ7	29P-21	口縁部破片	表面磨き、特殊な突起6単位、粘土粒小
27	1	鉢	APM2023	半ソ28　コ		口縁部破片	平行沈線文、縄文RL
27	2	鉢	APM2023	半セコ45		口縁部破片	平行沈線文、縄文RL、波状口縁
27	3	鉢	APM2023-329	半セコ46	27P-2	口縁部破片	縄文RL
27	4	深鉢	APM2023-317	ソコ78		口縁部破片	平縁、口縁直下縄文LR、縦刷毛目、縄文LR→刷毛目調整
27	5	深鉢	APM2023	ソコ76		口縁部破片	平縁、刷毛目調整→縄文LR、φ5mm以下の礫多量
27	6	深鉢	APM2023	ソコ30		口縁部破片	平縁、刷毛目調整→縄文LR
27	7	深鉢	APM2023	ソコ36		口縁部破片	刷毛目調整→口唇部にのみ縄文LR、φ5mm以下の礫多量
27	8	深鉢	APM2023-318			口縁部破片	縁直下に縄文LR、縄文LR→刷毛目調整、胎土に小礫多く含む、口
27	9	深鉢	APM2023	セク27-1　ソ		口縁部破片	平縁、条痕文（口縁部横方向、胴部縦方向）



NO. 25.

1. 底部欠損、高さに誤差あり。口縁に二叉に分かれた山型突起6ケ（一ケ欠損）口唇部に沈線を施文している。
2. 台部欠損のため、周囲のものより推測した。
3. 色は、茶褐色、内外側に黒ずんだところあり＝火的に、火にあたったのか。
4. 大曲出土、大洞A'1式の典型文様である。

図7-1



NO. 18

1. 大曲出土、二叉に分かれた山形突起6ケ（現存3ケ）、口唇部に1本の沈線あり、口縁内部にも一本の沈線あり、口縁より胴部にかけて$\frac{1}{4}$程度欠損。
2. 台部は、外反しこの期のものとしては小さい。
3. 色は、内部茶褐色、外部は黄土色、口縁部外側に黒く油煙をかぶった痕跡あり、台部は、念入りに研磨され、光たくあり。
4. 口径に比して浅く、且つ台部は小さい。台部は外反し、しかも縄文を付している。また注意すべきは、内部中央に○印の施文がない。この類には、出土数が少ない。縄文を付し、○印のないものに留意していきたい。

図7-2

図28　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（1）

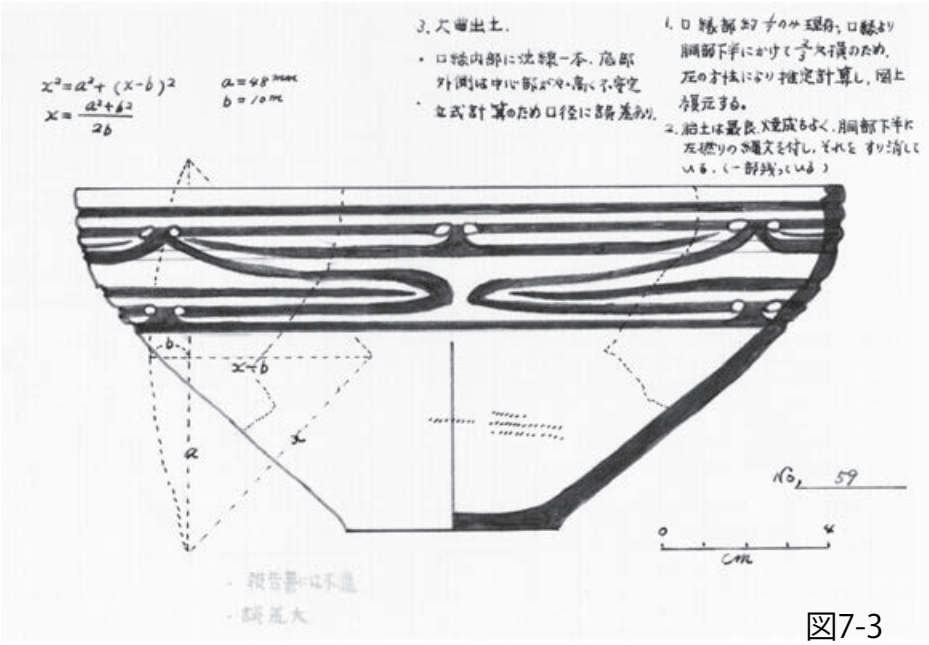


図7-3

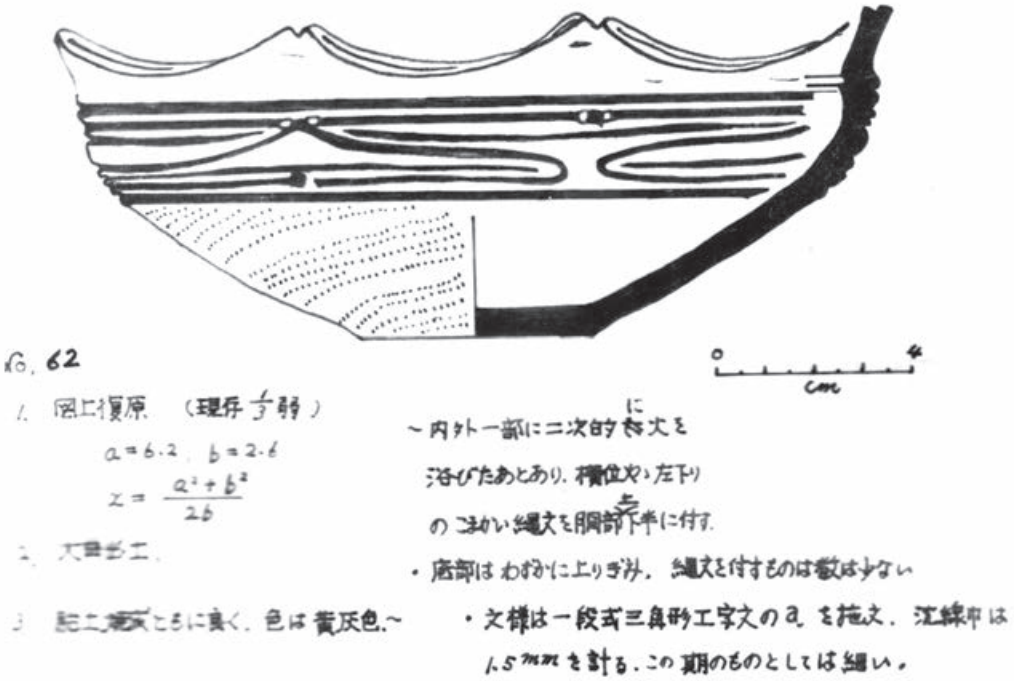


図7-4

図29　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(2)

図7-5

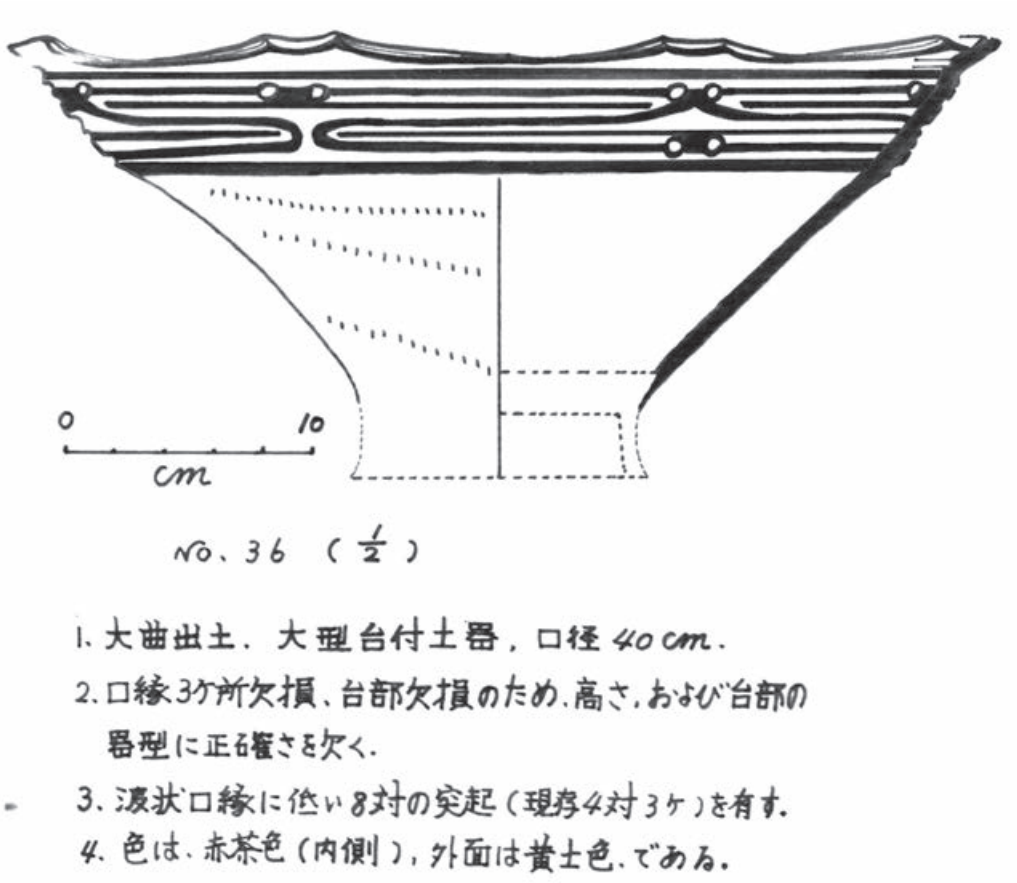
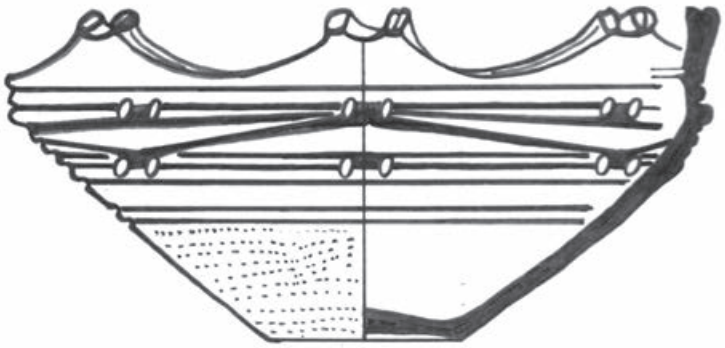


図7-7

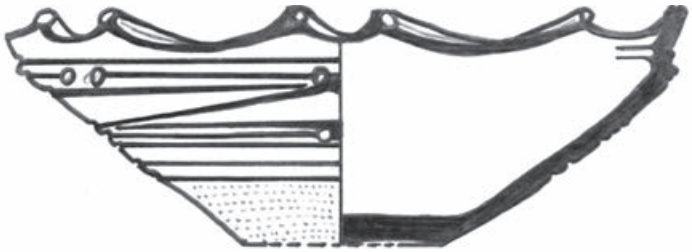
図30　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(3)



NO. 33.　　0　6 cm

1. 大曲出土。　二叉にわかれた2ケ1対6対の突起を付し（現存4対2ケ）、波状の口唇部に一本の沈線あり。また、口縁内部にも一本の沈線あり。口縁部5ケ所、底部および胴部一部欠損のため、高さ、口径に誤差あり。
2. 色は、内部黒褐色、外側は、赤褐色、底部および胴部の一部に火をあびた黒色のあとがある。
○3. 文様は、三角形工字文、一段式で横位の縄文を付している。大洞A'1式であるが、その初期的なものであろう。同類にNO. 17、{①（岩手）、⑬亀ケ岡}……Cプロット、がある。

図8-1

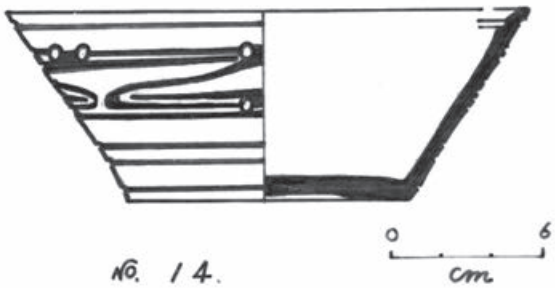


NO. 17.　　0　6 cm

1. 大曲出土。　口唇部に一本の沈線、口縁内部にも沈線一本あり。口縁二ケ所より底部にかけて欠損。
2. 乳房状の二ケ1対の突起6対（現存4対半）あり。底部はやゝ上げぞこ。下半に縄文（横位）を付す。
○3. 縄文は、この期のものとしてはやゝあらい。文様は、大洞A'1式の、Bプロット、一段式三角形工字文である。それに縄文を付しているのは少ない。
4. 色は、黄褐色、内側底部および外側底部周辺に黒色に火をかぶったあとあり。

図8-2

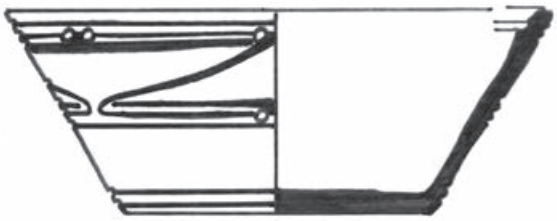
図31　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（4）



NO. 14.

1. 大曲出土. 口縁部2ケ所欠損. 口縁内部に一本の沈線. あり、色は黄白色の強い茶色.
2. 底は、やゝ上りそこである。
3. 土器の外側半分. および 底部は. 火をあびて黒く変色している。
◎4. この期. (A')の 浅鉢 には. 底部. および外面の一部を火のため. 黒色に変色しているものが相当数見られる. このことから. ちのそばにおいて火を浴びたのか.?
または. 底部を約半分程度火にのせ、食べものをあたためたものではないか.
おそらく後者であろう. しかし食べ物の カスの痕跡はみられないことから. 煮沸器ではない。
食事の習慣の なぞ をとくカギにはなるだろう。

図9-1

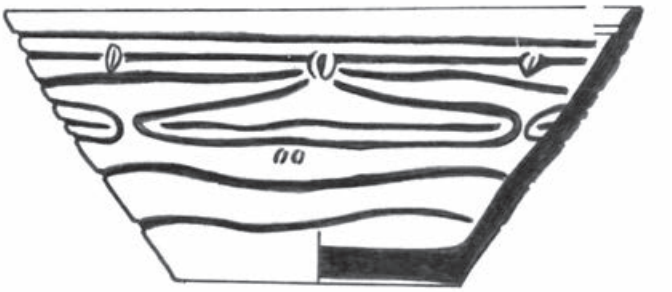


NO, 15.

1. 大曲出土. 口縁より胴部にかけて1ケ所欠損. 底部平底. 内底および、外部一部にかるく火をかぶった跡がある。
2. 文様は、ほりが深くオーソドックスである.
3. 工具は、5ミリ弱の、さきまるいものと思われる。
4. 土器の内外とも研磨され(横に)焼成は良く、色は褐色を呈す。
5. 浅鉢型としては深い方である.
6. 文様は. A'1式の典型である。

図9-2

図32　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(5)



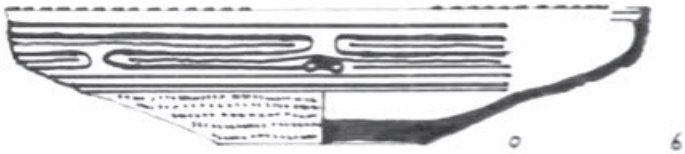
No, 41,　　0　5 cm.

（実物大）

1. 大曲出土．　粗製土器　約半分現存．
2. 胎土にこまかい砂粒を含み．表面研磨なし．成整形も悪く．デコボコしている．
3. 文様もA'1式のものに似ているが粘土粒なく．たての沈線である．即ちA'1式の初期のものであろう

図10-1

A'



No. 3.　　0　6 cm

1. 現存¼程度．口縁現在¼程度あり．色は茶褐色．焼成は良い．底部は僅かにあげ底をなしている．
2. 口径23.8ミリ．高さ5.9ミリ．この期のものでは最も浅い比率を示す．
3. 上部文様帯と下部文様は．二本の沈線によって区切られており．大洞A'式としては．数は少ない．（No.1と33）しかし．砂沢．大曲とも10：2位には出土する．決して稀れではない．但し砂沢に比して大曲資料は多い．
4. 文様は．上部に一段式三角形土器文を施文しているが．一対の粘土粒は．上になく下部に付けられている点は．めずらしい．（普通は上部に付けられ下部にないか．1対ずつ二段につけられる．）

下部は縄文が（横位に）つけられており．縄文のあるものはこの期としては少ない．

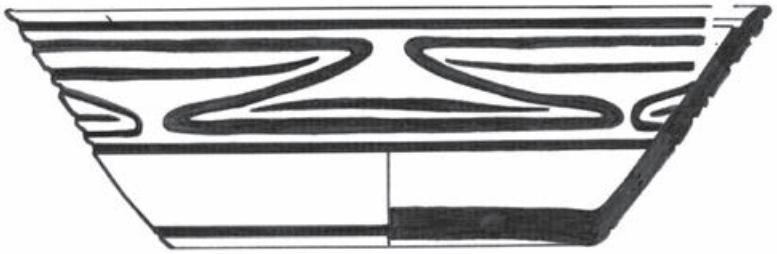
図10-2

図33　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（6）

NO. 11.　　0　6 cm

1. 大曲出土、口縁部3ケ所欠損、口縁内部に一本の沈線をめぐらしている。
2. 多少上げ底である。
3. この期のものとしては、焼成、胎土とも悪く、こまかい砂粒の混入多。ゴ程度あり、内側の器面は、ざらざらしており、横にこすって成 整形したものと思われる。
◎ 4. 外面は一部研磨のあとがあり、仕上げ用の胎土がうすいため風化のため消めつしたのか。?
それにしても、工程は、二工程と思われる。
即ち、砂粒を多量に含んだ胎土で整形し、文様を描き次に、精選した胎土をぬり、研磨したものと思われる。

図10-3



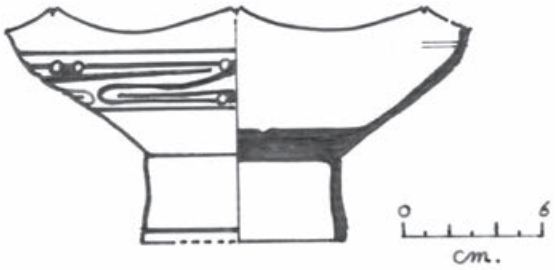
NO. 2.　（実物大）　0　5 cm.

1. 大曲出土、　口縁3ケ所欠損、色は、茶褐色、底部およびその周辺は黒く、二次的に、火を浴びたと思われる。
2. 文様は、一段式三角形工字文なるも、粘土粒がない点が注目される。即ち、砂沢系A1式の　新しい方の文様である。
3. 胎土、焼成とも、この期のものとしては、普通である。

図10-4

図34　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(7)

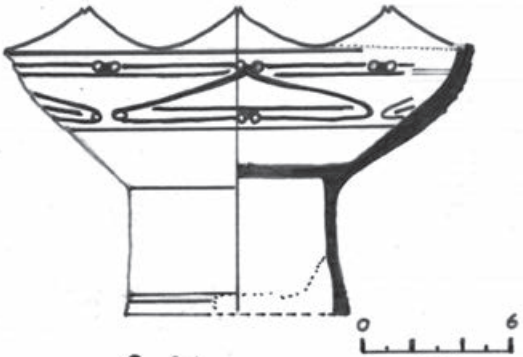
A'



No. 22.

1. 口縁上部に沈線をめぐらし山形突起間を連結している。
2. 内部は、円孤を思わせるなめらかなまるみを呈し、中央部に○印文、口縁内側に一本の沈線をめぐらしている。
3. 胎土、焼成とも最良、色は、黄色味がかった茶色である。
○4. 台部は、ゆゝ外反気味の円筒形をなし、左のデーター、（口径21.0、高さ10.1、台径8.5、台高3.8）からみると台部比率は同期のものの中では小さい。
○5. 文様は、三角形工字文（一段工字文と名を付す）であり、A'1に分類したい。
○6 工具は棒状の先のまるい、3ミリ弱のものを使用したと思われる。（大曲出土）

図11-1

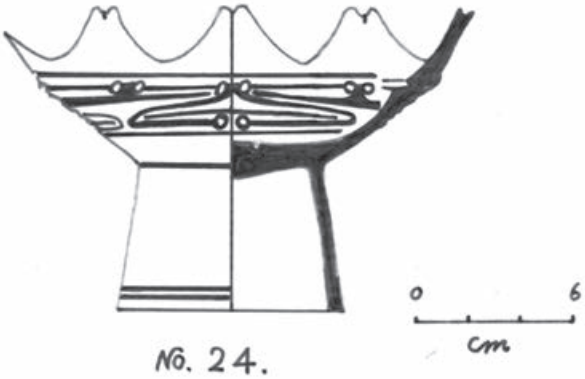


No. 21.

1. 大曲出土、口縁上部に一本の沈線あり、6ケの山形突起（現存2ケ）、内側中央に○印を付している。
2. 台部は、破損して現存¼（底部）。
3. この期の精製土器としては、胎土、焼成とも悪い。
4. 台付土器としては、深い方である。
5. 文様は、一段式三角形工字文であり、A'1式の典型である。

図11-2

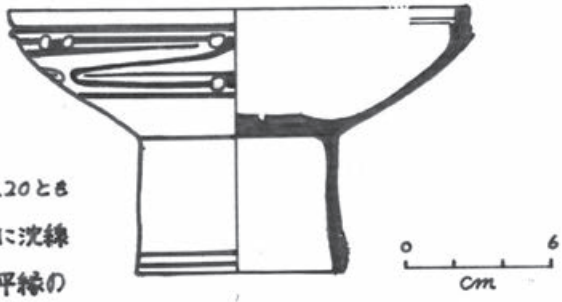
図35　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(8)



NO. 24.

1.大曲出土、山形突起6ケ（現存3.5ケ）.
2.口縁内部に一本の沈線をめぐらしている.
3.内部中央に○印を付している。
4.口縁上部に一本の沈線をめぐらし突起間をつないでいる。
5.突起上端は、たての沈線により二叉に分かれている。
6.文様は、一段式三角形工字文、大洞A'1式の典型である。
7.工具は、3ミリ弱の棒状のものと思われる。

図11-3



☆
NO.4. NO.20とも
口縁上部に沈線
がない.(平縁の
ものにはない.)

NO. 20.

1. 砂沢出土、台部一部欠損、焼成は最高に良い、
2. 台部は円筒形にてこの期の典型、文様もまたこの期の基本文様である.
3. 台部より曲線をえがいてなめらかに外反する優品である、
4. 同型のNO.4より胎土、焼成とも良く、肉も厚い、色は赤褐色、工具（施文具は）3mm弱の棒状のものと思われる。
5. 口縁内部は、整形の上、精選された粘土をぬり、研磨したものと思われる、外面の研磨は、へら状の工具ではなく、棒状（おそらく3ミリ弱）のもので研磨された痕跡がある。

図12-1

図36　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(9)

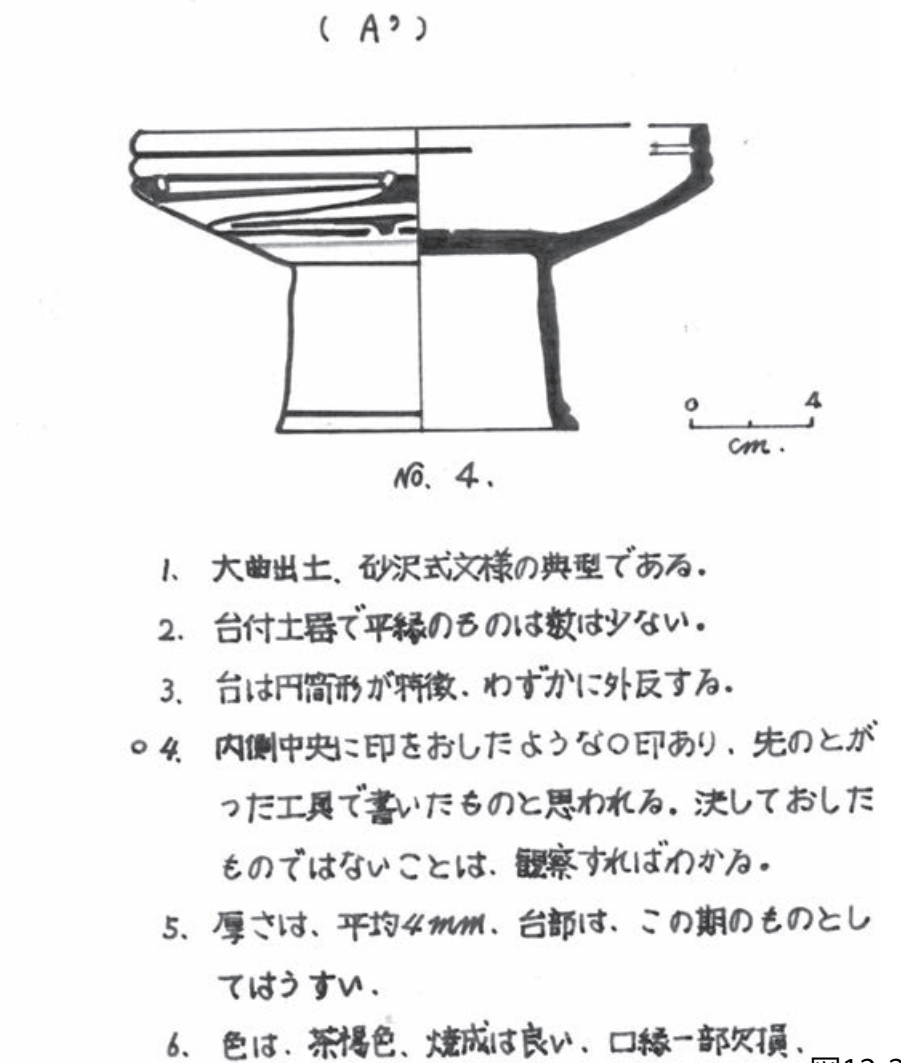


図12-2

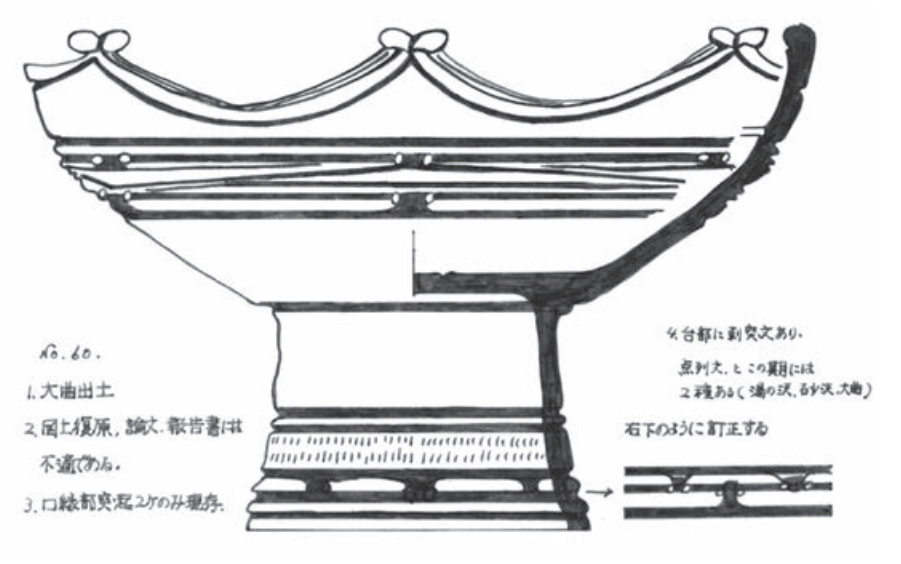
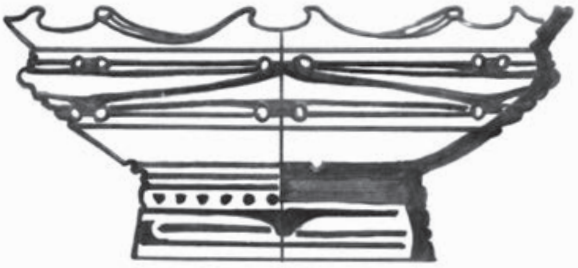


図12-3

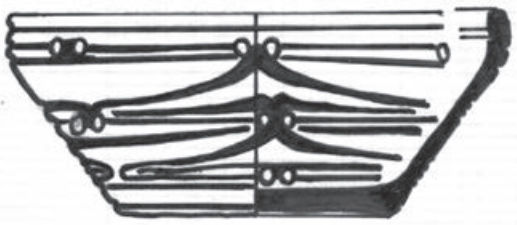
図37　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(10)



NO. 37.　　0　8 cm.

1. 大曲出土、乳房状の突起2ケ一対、6対(1対2ケ欠損)
口縁部4ケ所欠損、色は茶褐色、台部および底部、胴部外側は、黒味をおびた栗色である。
2. 文様は、大洞A'1式、ひプロット、一段式三角形工字文、台部は、平行沈線に隔円の点突文、台部下縁に、粗製土器文様のA'1式の文様を付している。
3. 口径23.3、高さ9.9と比率は、高さが低く、また台部直径12.1、同高さ3.3cm、台部径の大きさが目立つ。
○4. 大曲、砂沢出土の土器のうち、栗色に焼かれ研磨されたものは、特に秀れた特殊な用途に供されたものであろう。
同類に、NO. 38. NO. 39. がある。

図13-1



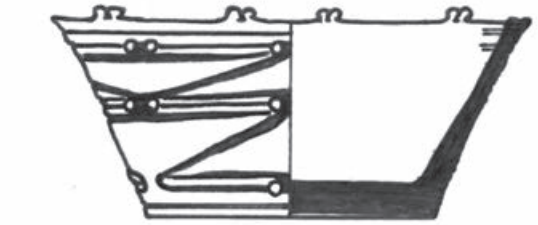
NO. 27.　　0　6 cm

1. 大曲出土、1/3程度欠損、底部および外側約半分は、黒く油煙により変色している。但し煮沸用に供したものと思われない。内部はそこが多少黒くなっている。
2. その他は黄褐色、焼成、胎土とも良好である。
3. 文様は、二段式三角形工字文を施文している。二段式文様は、三種とそのくずれのもの、および、三段式のものもある。いずれも文様、器形ともよくできている。
4. 文様は、沈線深く肉の厚いものである。

図13-3

図38　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(11)

A'



No. 23

0 6 cm

1. 砂沢出土、焼成良く、茶褐色、口縁部2ケ所欠損、底部やゝ上りぎみ。

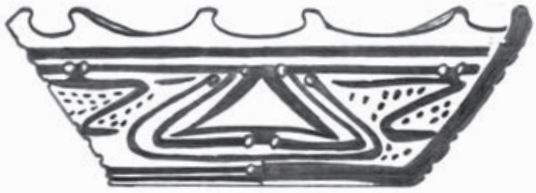
2. 口縁部に、2ケ1対の突起が3対、その間に3ケ、計9ケの突起を有す（現存6ケ）。突起には、刺突文2ケずつ3列付している。

3. 口縁上部は一本の沈線により突起間をつないでいるが2ケ一対の突起間にはない。また口縁内側に2本の沈線をめぐらしている。

4. 文様は、三角形工字文の二段文様であり、砂沢期の一時期の典型文様である。

○ 5. 大洞A' を A'1, (No.20. No.4), A'2 (No.6. 27. 26), A'3 (No. 38. 34. 35. 39. 40.) とすれば、これは、A'2 にはいると思われる。 <註 No.は文様展開図番号である>

図14-1

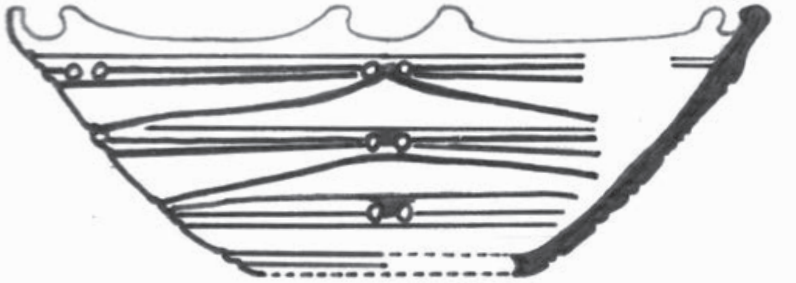


No. 40. (実寸大)

1. 砂沢出土、6対の乳房状突起（現存2対1ケ）あり、波状口縁の口唇部に沈線あり、全体の1/4現存する。
2. 色は、黄土色、焼成良く、研磨され光沢あり、研磨は、横になされ、工具は棒状か？
3. 文様は、三角形工字文の二重式であり、二重式三角形工字文とよぶ。同類に、岩木山、PL4-1、湯の沢出土の浅鉢あり、A'2式であろう。
4. 口径に損傷あり（約2ミリ）

図14-3

図39　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（12）



NO. 26.

1. 大曲出土，2ケ1対、6対の乳房状突起（1対1ケ欠損）を付し、底部欠損している。口縁上部に一本の沈線をめぐらし突起間を連結している。また口縁内部にも一本の沈線あり、底部は、わずかに上げ底と思われる。
2. 内側、外側とも茶褐色を呈している。
3. 文様は、二段式三角形工字文であるが、二段目の弧線は他のものに比して多少曲線が内に湾曲しているのが特徴である。
4. 二段式文様の施文されたものは、器形、文様、胎土、焼成ともすぐれたものが多い。
5. A'式の文様を、a、b、c のプロットに分類すれば、これは、b－b の二段式の変形であろう。

図14-2

図40　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（13）

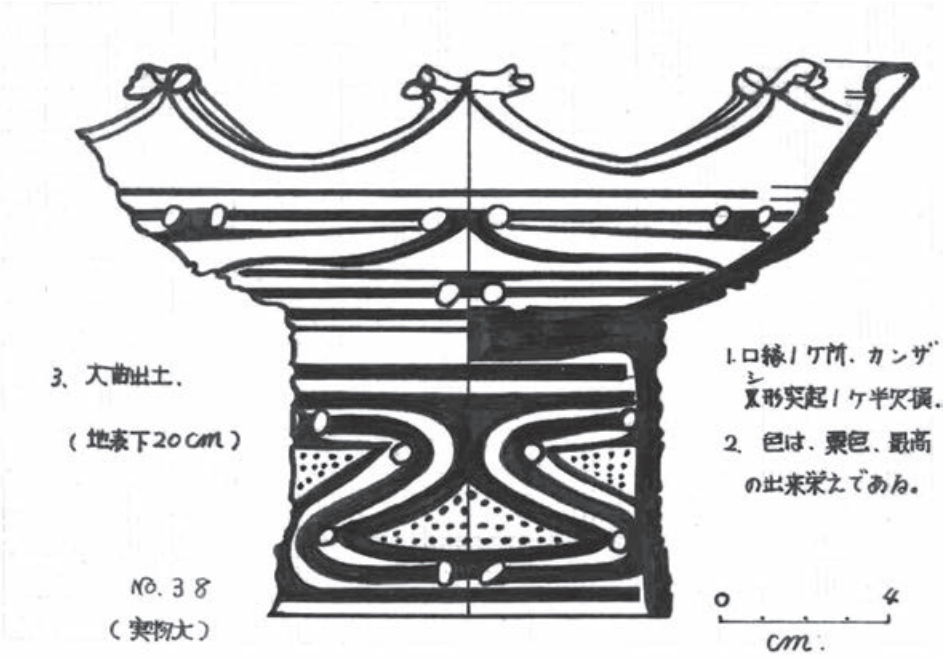


図15-1

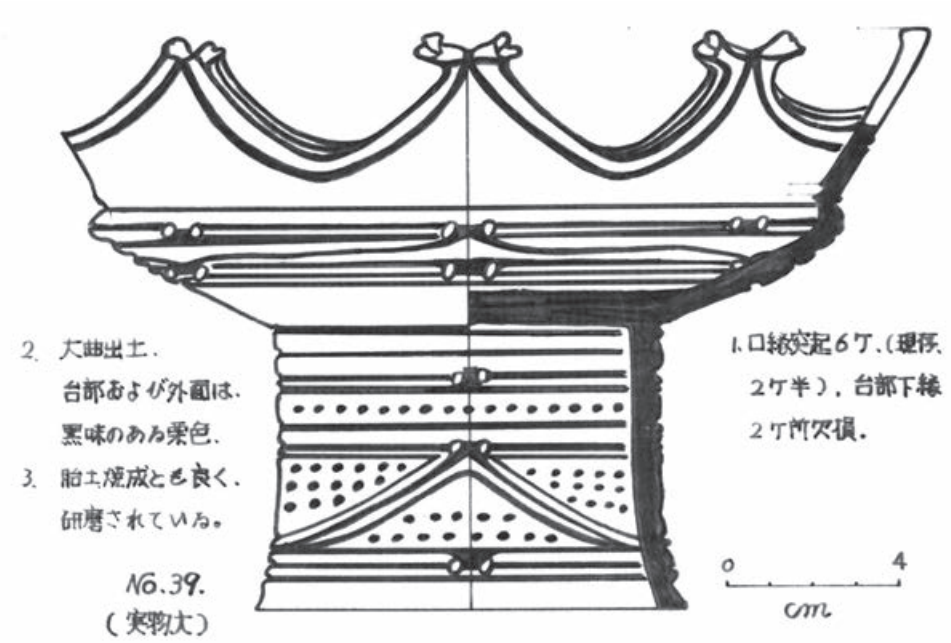
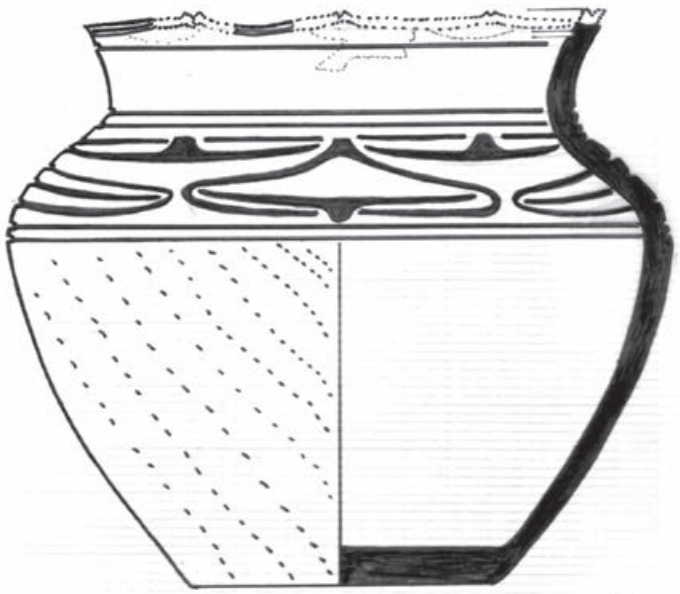


図15-2

図41　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（14）

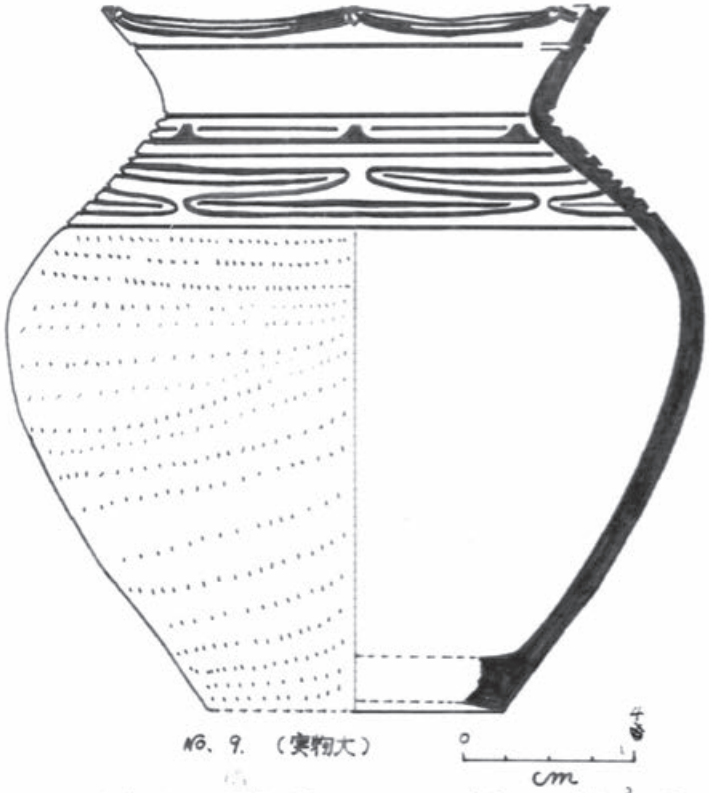


NO. 13 （実物大） 0 cm

1. 大曲出土。 口縁部欠損、胴部$\frac{1}{3}$欠損、胎土20%程度の砂粒を含む、色は茶色、焼成は良い。

2. 口径部広く、肩が張っているのが特徴であり、底部は平底である、粘土粒は平らで、A'1の粘土粒に比して平らである、即ちA'1直前の、A$_{II}$式であろう。

図16-1



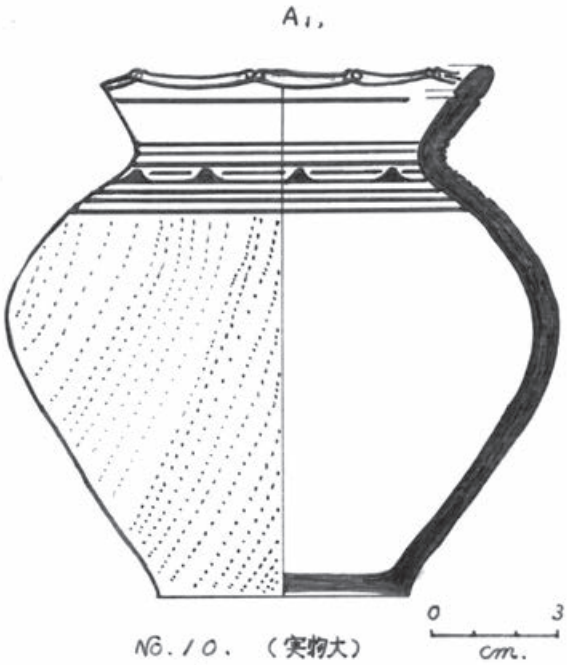
NO. 9. （実物大） 0 cm

1. 大曲出土。 粗製土器。 二叉の山形突起5ケ、底部$\frac{3}{4}$欠損。

2. 色は、外面茶褐色、内面赤茶色、胎土に若干の砂を含む。

図16-2

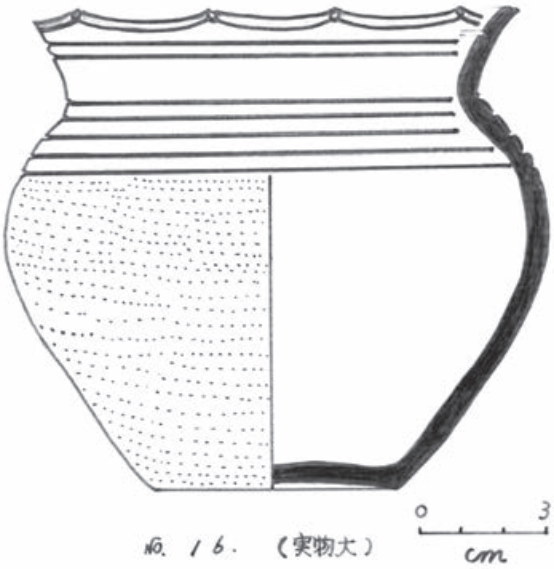
図42　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（15）



NO.10. （実物大）

1. 大曲出土. 粗製土器. 完形品. 胎土に40%程度の砂粒を含み. 表面はざらざらしている. 底部および. 胴部の一部に火をかぶった黒色のが所あり. 二叉に分かれた口縁突起は. 8ケあり. 整形は悪い.

図16-3



NO. 16. （実物大）

1. 大曲出土. 口縁に8ケの突起（現存4ケ）あり. 口縁3ケ所欠損. 口唇部. および口縁内部に一本の沈線あり.
2. 底部やゝ上げぞこ. 内外とも赤茶色である. 胎土に塗料をまぜて. 土をこね整形したと考えられる.
3. 粗製土器. こまかい横位（ゆゝ右下り）の縄文を付している.

図16-4

図43　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（16）

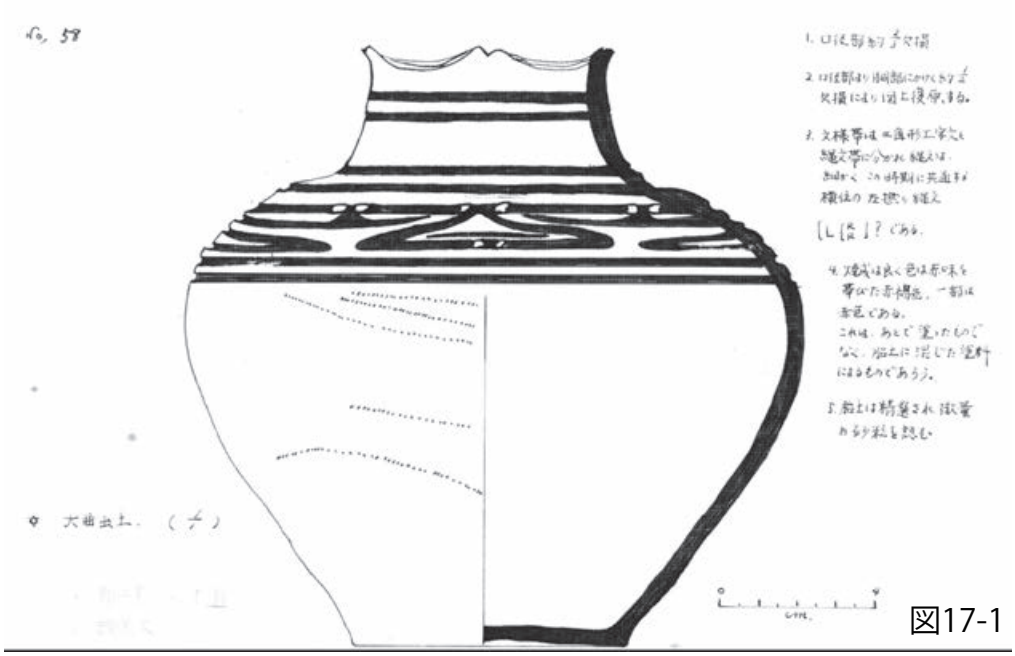


図17-1

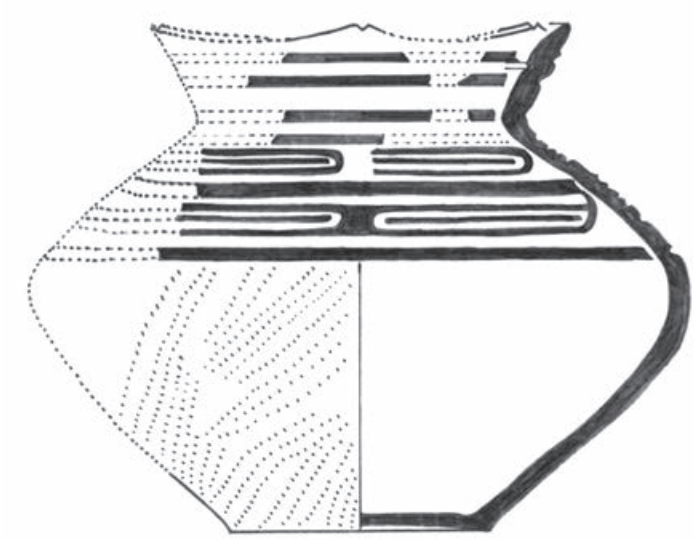


図17-2

図44　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(17)

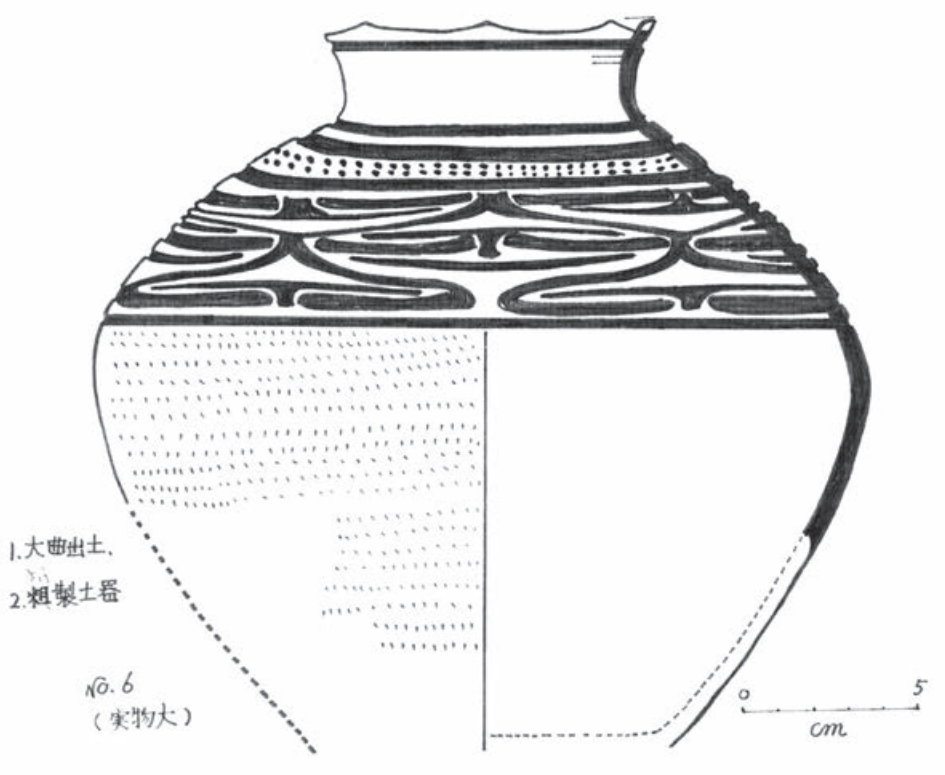
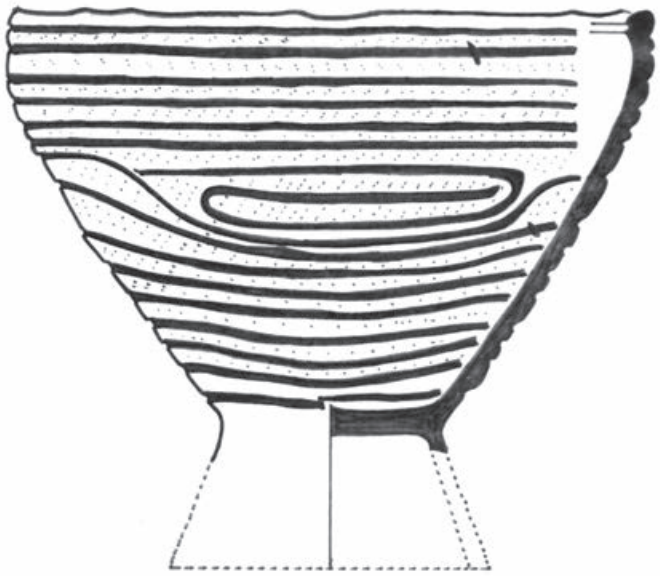


図17-3



NO. 35（実物大）　0　5 cm

1. 大曲出土、　底部欠損、胴部若干欠損、高さに誤差あり。
口縁部に、低い突起6対あり。
2. 粗製土器、　内部に、すす付着、煮沸に使用か。
3. 文様は、土器を廻転させてつけたと思われる連続沈線である。

図18-1

図45　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（18）

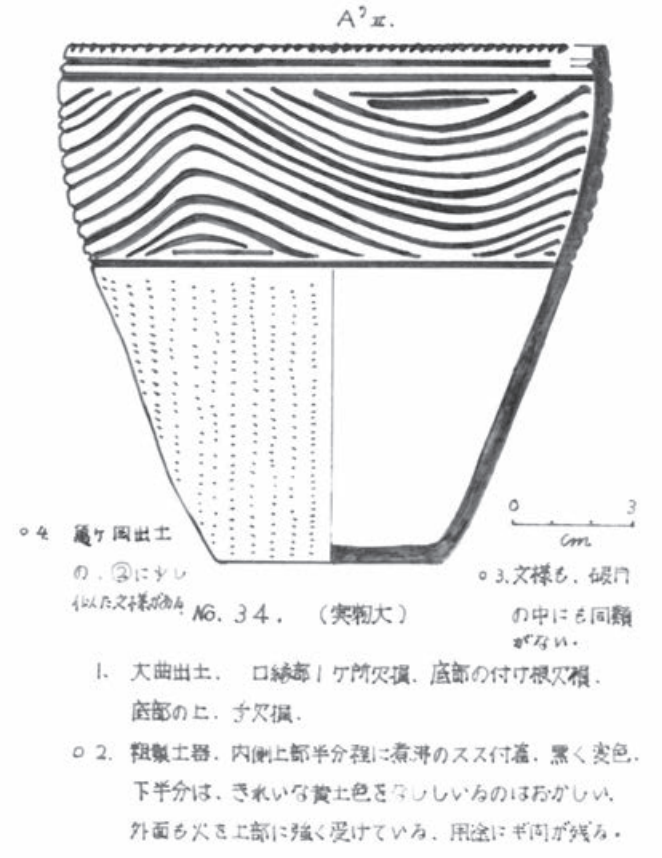


図18-2

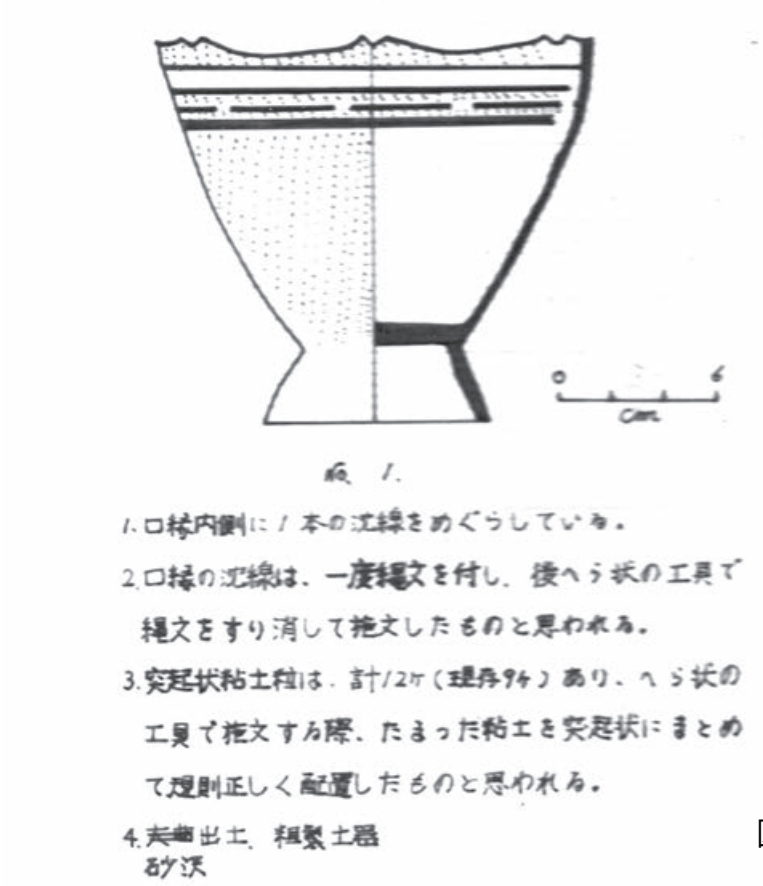
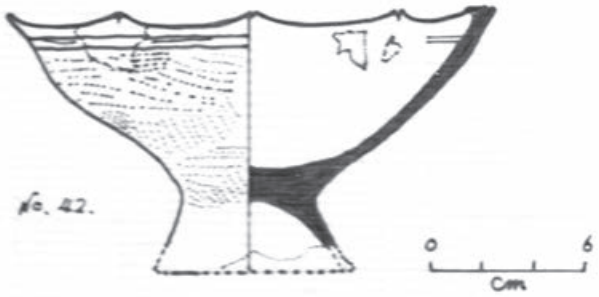


図19-1

図46　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（19）



1. 大曲出土、口縁3ケ所欠損、台部一部を残して欠損、
2. 口縁内部に1本の沈線をめぐらし、内部中央は不整形で傾斜あり、8この突起（現存5ケ）があり、その間を浅い沈線により結んでいる。
3. 文様帯は、口縁部に残い沈線を二本めぐらしているが棒状の工具で軽くこする程度の残いものである。
その下は、台部まで横位のこまかい縄文、ところによっては右下りの縄文を付している。
4. 胎土、焼成とも良く、祖製土器とも思われないが、台部、口縁内部の研磨、整形の不備、文様からして一応祖製土器としておく。
5 文様意匠からして大洞A式と思われるが、祖製であるからA'でよいであろう。？

図19-2

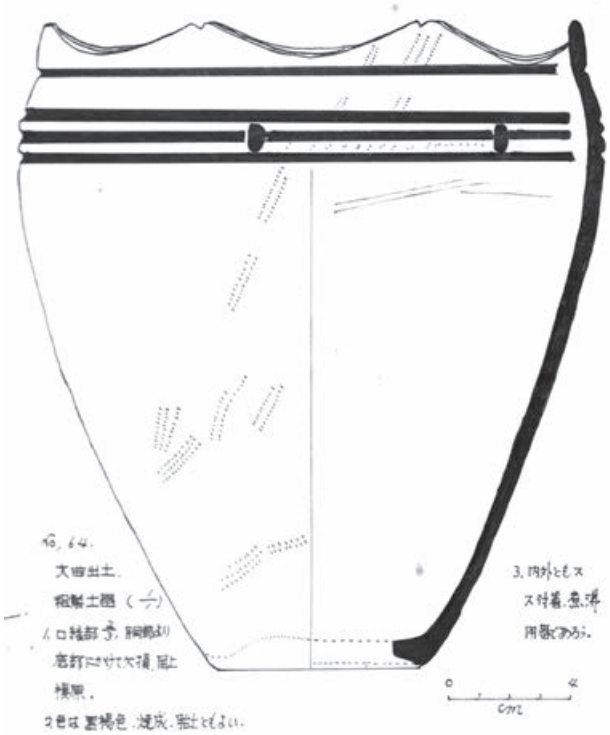


図19-3

図47　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（20）

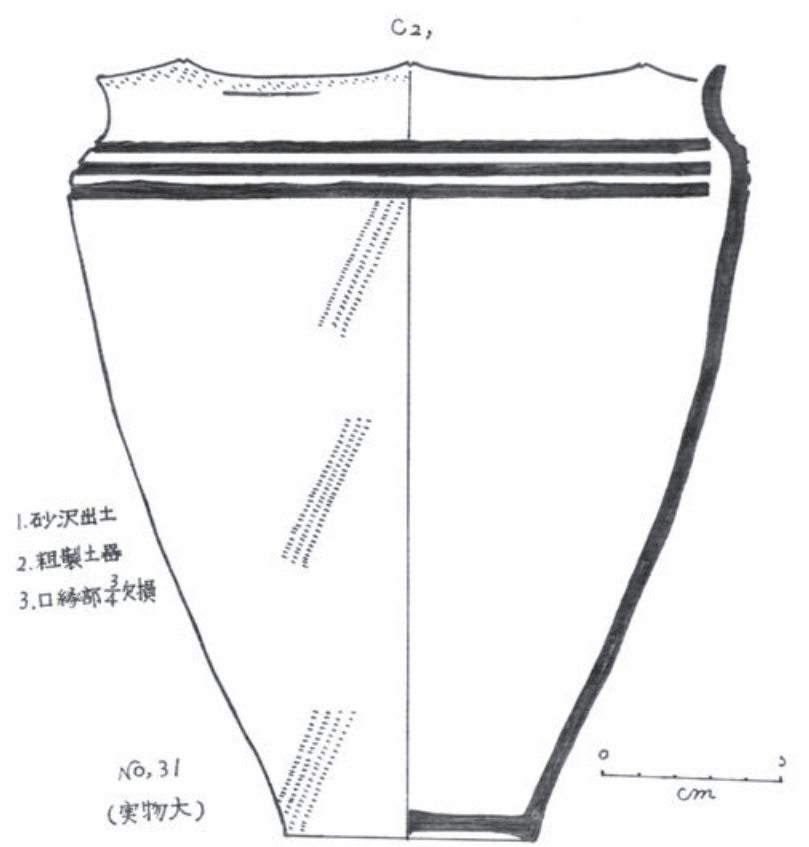


図19-4

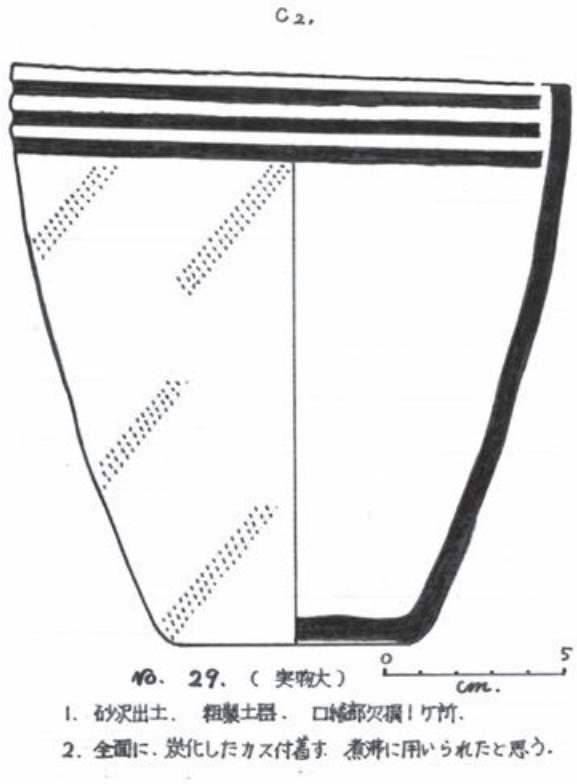


図19-5

図48　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(21)

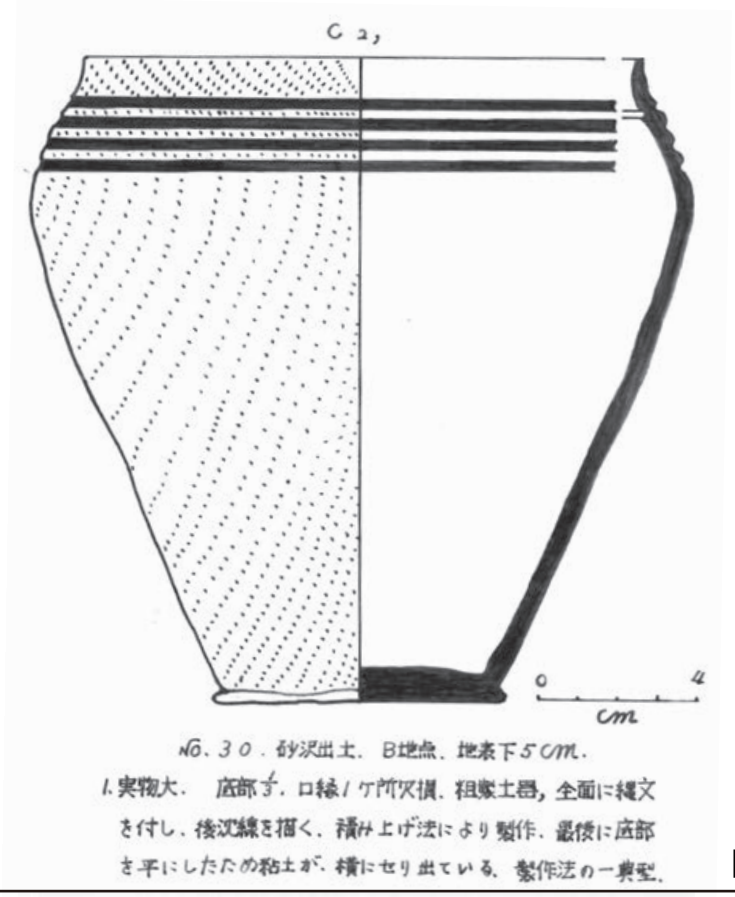


図19-6

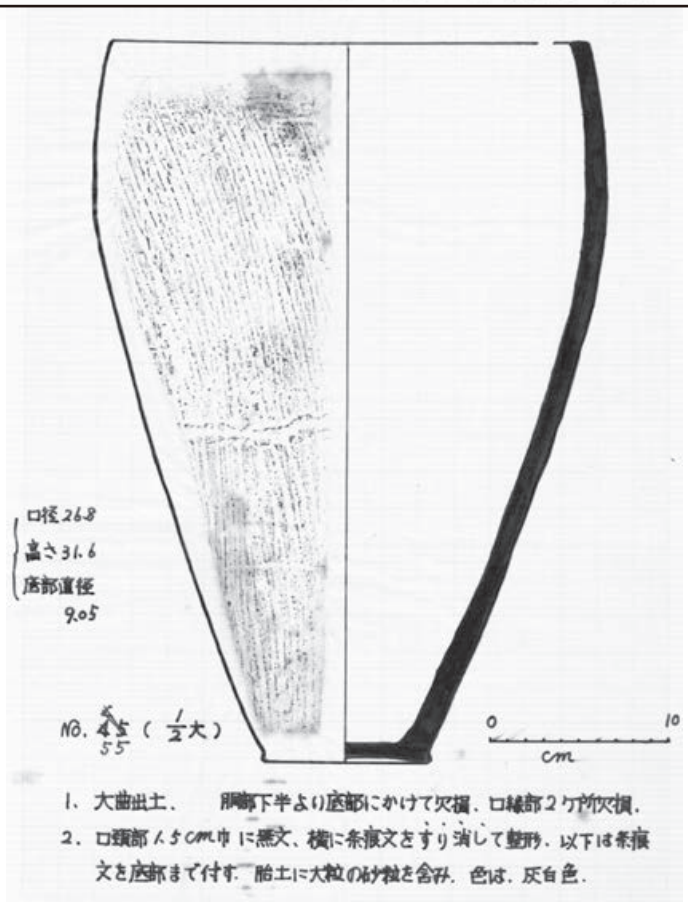


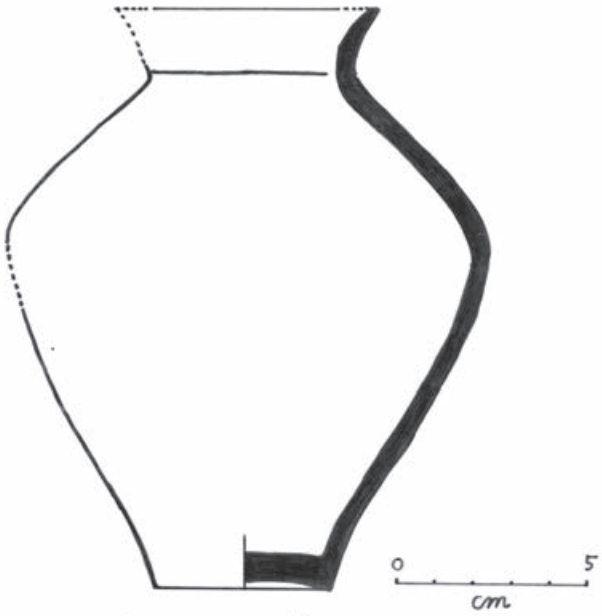
図20-2

図49　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（22）

No. 52. (実物大)

1. 大曲出土. 無文土器. 口縁部より頸部にかけて $\frac{1}{4}$ 欠損. 胴部は. 大小 10ケ所欠損. 色は. 黄土色. 口頸部の沈線は浅く. 整形の際のいたものであろう. 内外とも横にこすって整形していね.

図21-2



No. 51, (実物大)

1. 大曲出土. (無文土器) 口縁部 $\frac{2}{3}$. 肩部より胴部にかけて一部欠損.
2. 最広部は. 全体の $\frac{2}{3}$ 以上上部にあり. 肩部より傾斜して底部は小さい特徴ある器形. 色は. 黄土色. 一部火を浴びて黒色. 内部は赤茶色.
3. 胎土は. 精選され. 焼成もよく. 横に研磨されていね.

図21-3

図50　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集(23)

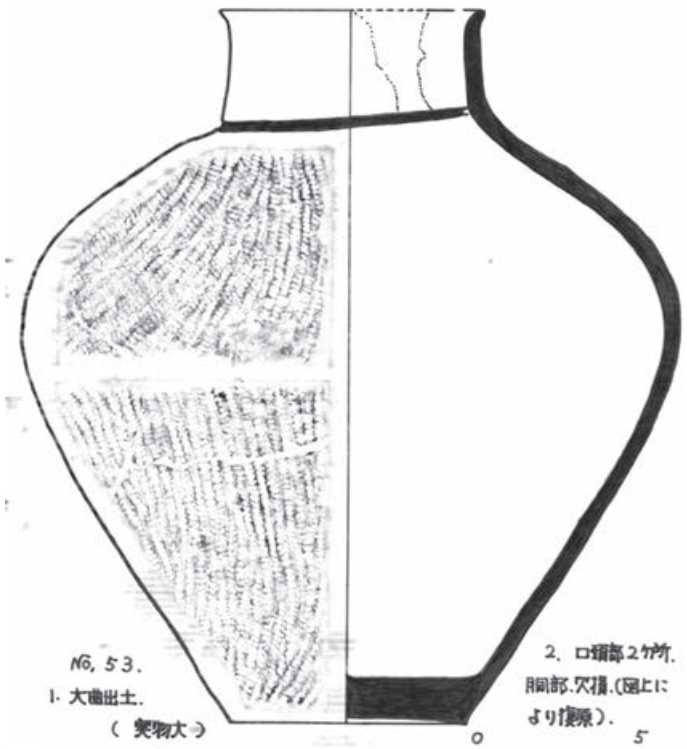


図21-4

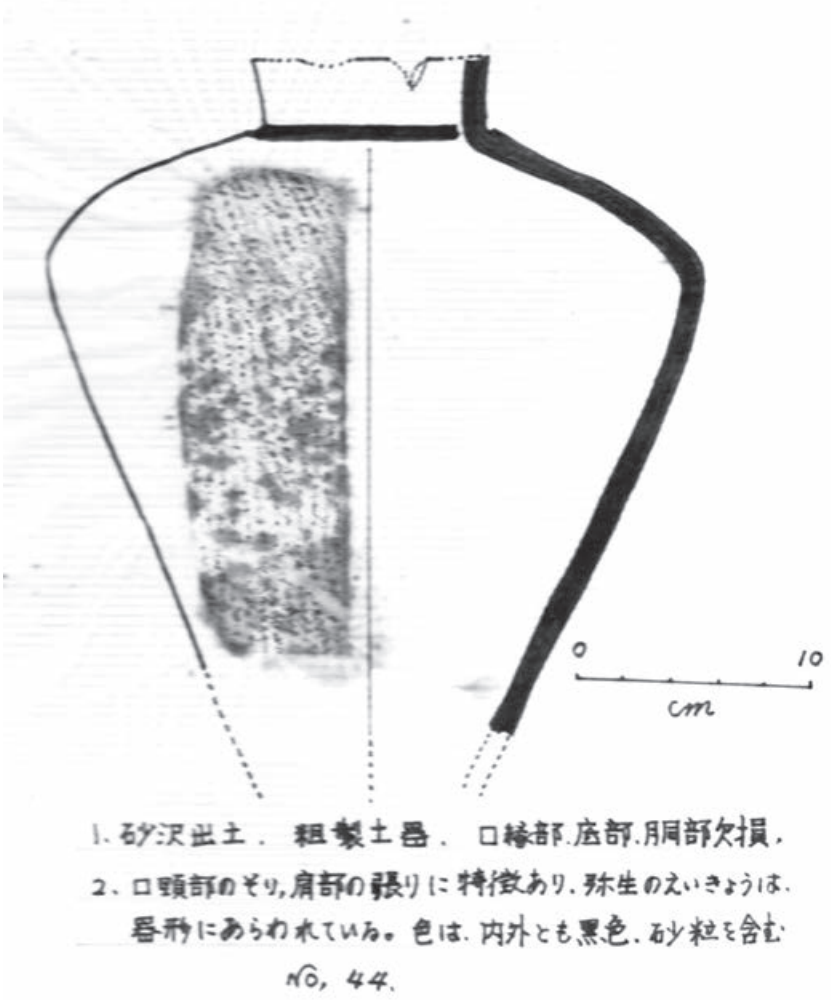


図51　　新谷雄蔵氏所蔵の実測図集（24）

第３章　研究報告

第１節 大曲遺跡出土土器からみる砂沢式土器の編年

根岸　洋

はじめに

筆者は第2章において、故・新谷雄蔵氏採集による「砂沢式系土器群」（新谷1975）について、その来歴と出土遺跡に関する精査を行った。その結果、氏の採集遺物の大部分を大曲遺跡出土土器・土製品が占めていることを明らかにした。従って氏の砂沢式に関してのこれまでの研究（1975・1980）は、同遺跡出土土器を基軸として進められた蓋然性が高いと考えられる。

ところで砂沢式と直前土器型式の研究は、主な分布圏である津軽地域（弘前大学教育学部考古学研究室1981）と馬淵川流域（工藤1987）で推し進められ、近年では下北地域でも行われている。大曲遺跡は鰺ヶ沢町に所在し、砂沢式の標識遺跡である砂沢遺跡と同じ津軽地域に所在する（図2）が、本遺跡から40点にのぼる復元可能個体が得られたことにより、砂沢式への理解はより豊かなものになり得る筈である。また新谷氏の編年観についても改めて振り返っておく必要があろう。

本研究報告は以上のような問題意識のもとで、大曲遺跡出土土器群を主たる分析対象に、周辺の遺跡から既往調査にて出土した土器や砂沢遺跡出土土器等との比較を通じて、同遺跡出土土器を4段階に分ける細分案を提示する。本論はあくまで一つの遺跡の考察に過ぎないが、東北地方における初期弥生土器についての検討材料が揃いつつある今日、小地域間での比較を可能にするという意味において一定の役割を果たし得ると考える。

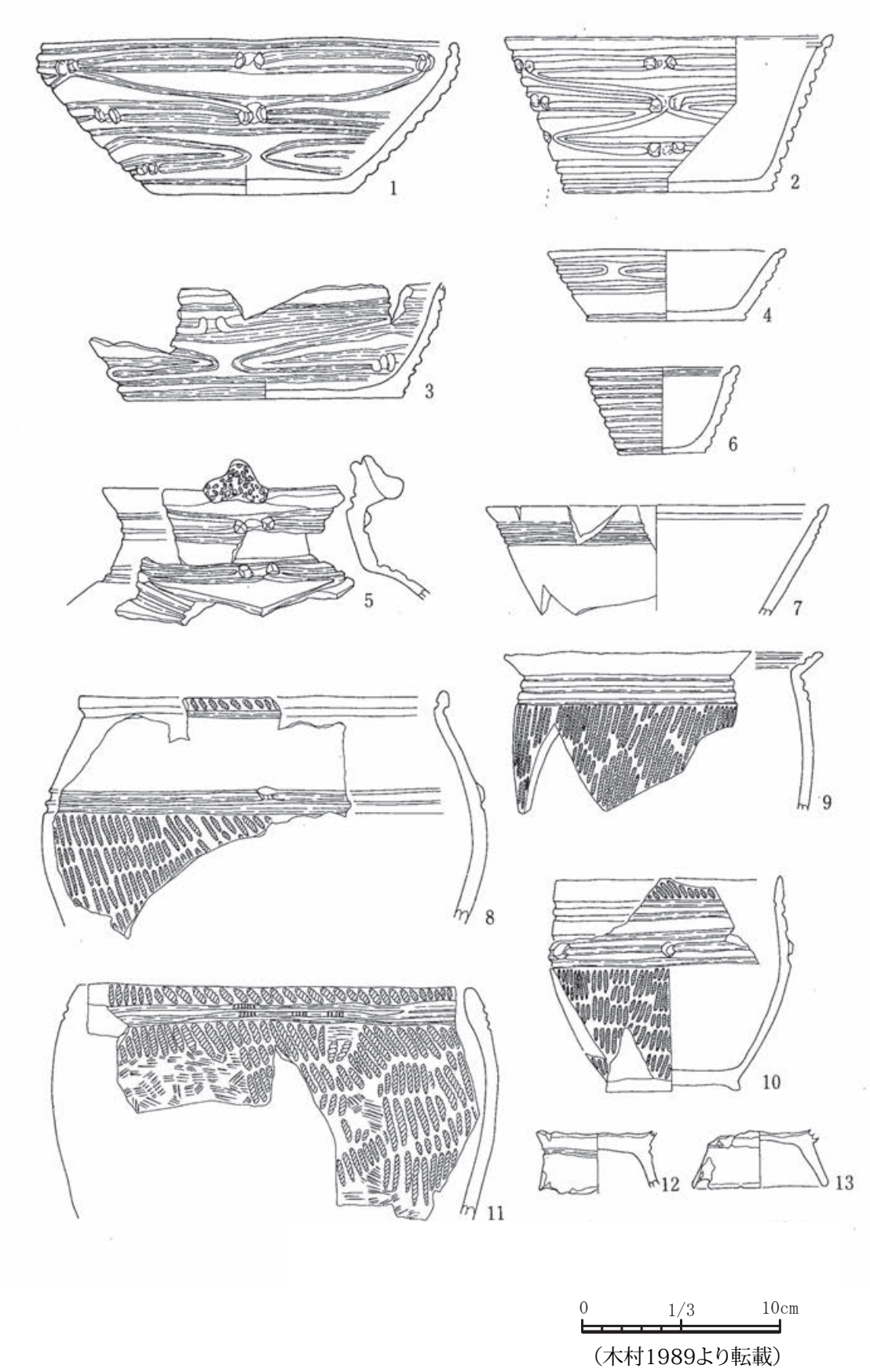
（１）大曲遺跡の位置づけ

最初に、第2章で示した土器の分類基準を基に、新谷氏採集土器と既往調査による出土資料とを比較して、大曲遺跡の存続期間について改めて整理しておきたい。

青森県立郷土館による本遺跡の調査（木村1989）時に出土した土器のうち、浅鉢（図52-2、図53-1・2・4・8～10）には直線的に開く器形、胴部全面に広がる二段構成の変形工字文が見られる。新谷氏の採集資料中では図14-2、図25-2・5・6・9等と比較可能である。壷（図52-5）は口縁部装飾が発達して無文帯が狭いために図17-1の壷とは区別され、図26-7と近い段階のものと考えられる。また鉢・深鉢（図54・55上）の口頸部に複数条の沈線や無文帯の発達が認められることから、新谷氏採集土器の中では図27-1～3が比較可能であり、砂沢式の中でも後出の要素が見受けられると考えられる。これらの土器群は少量ではあるが、新谷氏採集土器に含まれていた文様帯の狭い浅鉢・台付鉢（大洞A’式）や、一段構成の変形工字文を施す砂沢式、装飾が発達し変形工字文が複線化した台付鉢（図15-1・2）等を含んでいないため、型式学的なまとまりをなすと考えられる。

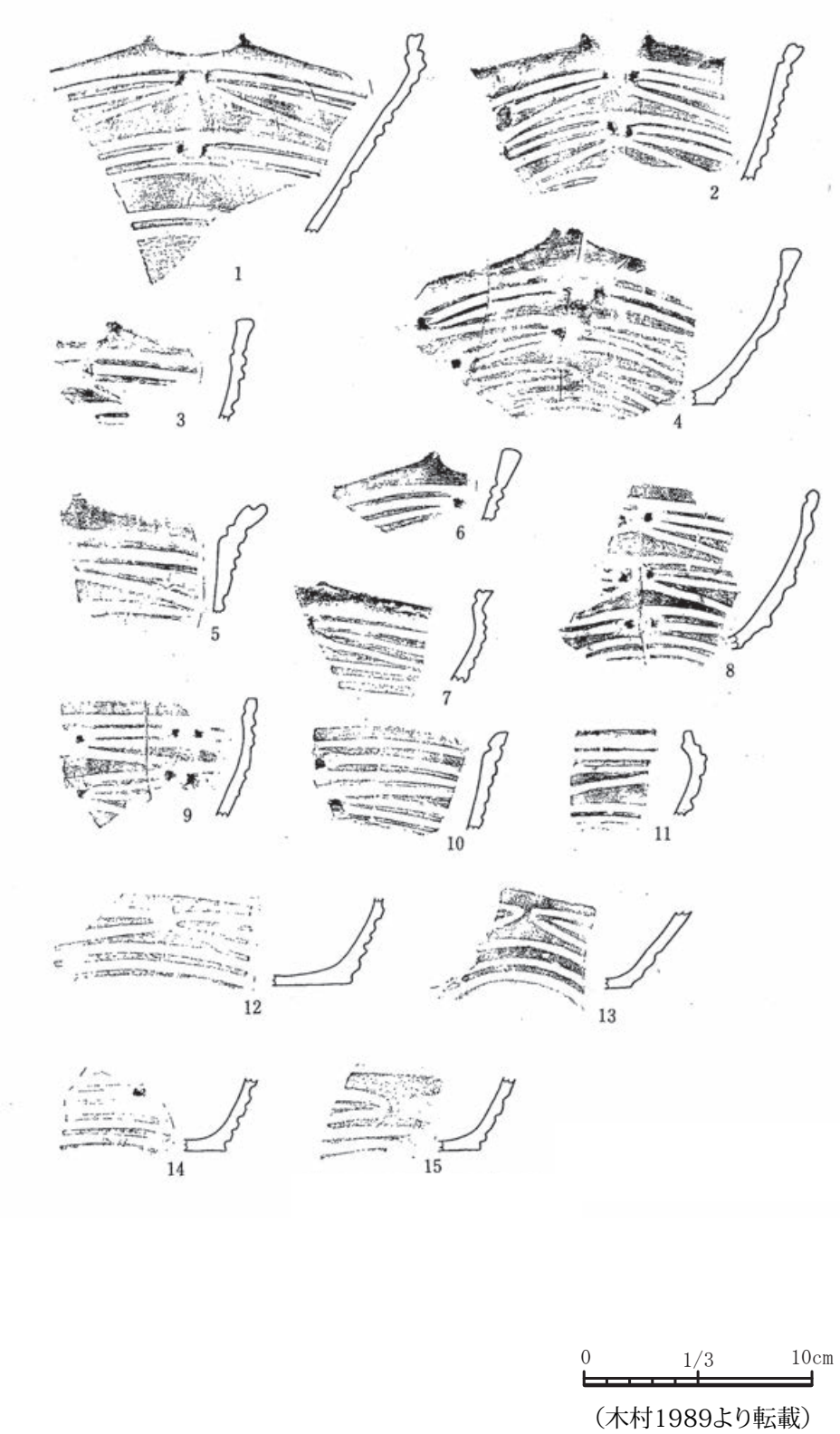
一方、大曲遺跡と隣接する建石(3)遺跡からは、砂沢式のそれよりも細く浅い沈線によって施文される、複線化した変形工字文が認められる（図55下）。新谷氏採集土器の中では図26-1～3が比較可能であり、これらは五所式（村越1965）に相当する。

従って大曲遺跡は大洞A’式・砂沢式を中心とするが、砂沢式については、青森県立郷土館の調査地点出土土器群に型式学的まとまりがあり、新谷氏採集土器はその段階も含んだより長い時期



（木村1989より転載）

図52　大曲遺跡の既往調査出土土器（１）



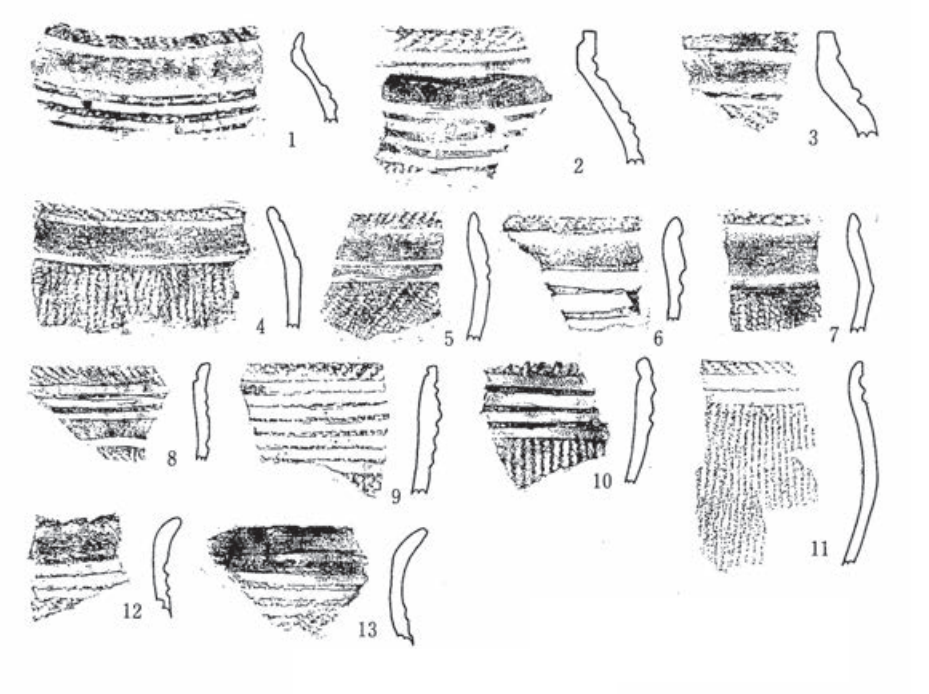
（木村1989より転載）

図53　大曲遺跡の既往調査出土土器（２）

0　1/3　10cm

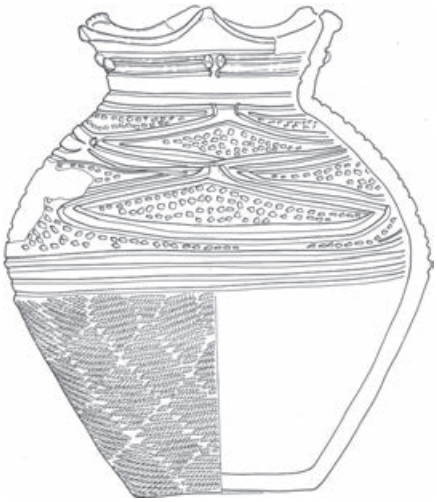
（木村1989より転載）

図54　大曲遺跡の既往調査出土土器（３）



（木村1989より転載）

（田村1968より転載）



（根岸2003より転載）

0　1/3　10cm

図55　大曲遺跡・建石(3)遺跡出土土器

幅に渡る資料と言えそうである。また五所式については、隣接する建石(3)遺跡に分布の中心があると思われるが、仮に新谷氏採集土器のうち五所式の破片資料が大曲遺跡出土とすれば、大曲遺跡が当該期にまたがる可能性もある。

（２）大曲遺跡出土土器による変形工字文の分類

まず型式細分の基準となる変形工字文の分類を行い、いくつかの器種の段階設定を行う。

当該期の変形工字文については、須藤（1976）が大洞A’式・砂沢式に見られる「変形工字文A型」、二枚橋式の「変形工字文B型」を設定し、同「A型」は2種類に細分された（同1990）。大洞A’式と砂沢式の変形工字文の違いについては牧野Ⅱ遺跡の報告（弘前大学教育学部考古学研究室1981）で詳細に紹介され、砂沢遺跡の報告書（藤田他1991）等その後の研究の基準となっている。

本遺跡における変形工字文[4)]の分類基準は以下の通りである（図57）。

Ⅰa型:扁平な三角形モチーフの頂部に方形の彫込みを入れて交点となし、両脇に粘土粒を付す。

Ⅰb型：文様構成はⅠa型と共通するが、交点において左右の沈線が切り合いをなし、また三角形モチーフ同士が接するもの。

Ⅱ型：沈線幅は太く、文様帯が広くなり、独立した三角形モチーフが描かれるもの。

Ⅲ型：三角形モチーフが下部の平行沈線文に連絡するもの。交点の彫込みは沈線との連絡のために大きく、深く施される。

Ⅳ型：上段にⅢ型、下段にⅡ型を配置して二段構成とするもの。三角形モチーフを半単位ずらして重ねるために、Ⅲ型の反転部とⅡ型が連絡することになる。

Ⅴa型：上段にⅢ型、下段にⅡ型を配置して二段構成とするもの。

Ⅴb型：上下段にⅢ型を配置するもの。沈線が交点から遊離する部分が認められる。

Ⅰa・b型が須藤（1990）の「変形工字文A1型」、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（a・b）型が同「A2型」に対応する。

この分類のうち、特に1段構成の変形工字文(Ⅰ～Ⅲ型)は極めて漸移的な変化を示しているが、後続する五所式の文様構成を考慮すると型式学的順序を表している可能性が高い。本遺跡でもっとも豊富に出土している台付鉢によって、この変遷の順序を確認してみよう（図58）。Ⅰa型を施す台付鉢は、口縁部突起と台が低く、台部に鉢部の内面に円形文を持たないが、Ⅰb型を施す個体では口縁部装飾が発達し、鉢部内面に円形文、台部の下半に沈線文を施している。Ⅱ型を施す個体では変化の傾向が顕著になり、文様帯幅が広くなり、台部の器高が高くなる。Ⅲ型を施す個体には幾つかの種類があるが、鉢部の文様帯の拡大、口縁部装飾・台部の器高と文様の発達度合いによって、型式学的な変化の順序を復元することが可能になる。

図58に示した変化の順序は、①口縁部装飾の発達、②変形工字文を施す鉢部の文様帯の変化、③鉢部下半の無文帯の縮小、④台部の無文帯の縮小、⑤台部端部の文様帯の拡大という、5つの文様帯の変化に着目することでより明確になる。例えば②に着目してみると、Ⅰ（a・b）型からⅡ型への変化は他の文様帯とも連動した変化が想定されるのに対して、Ⅲ型を持つ個体では④・⑤において急激な変化が見られるのにも関わらず、②にほとんど変化がないことになる。

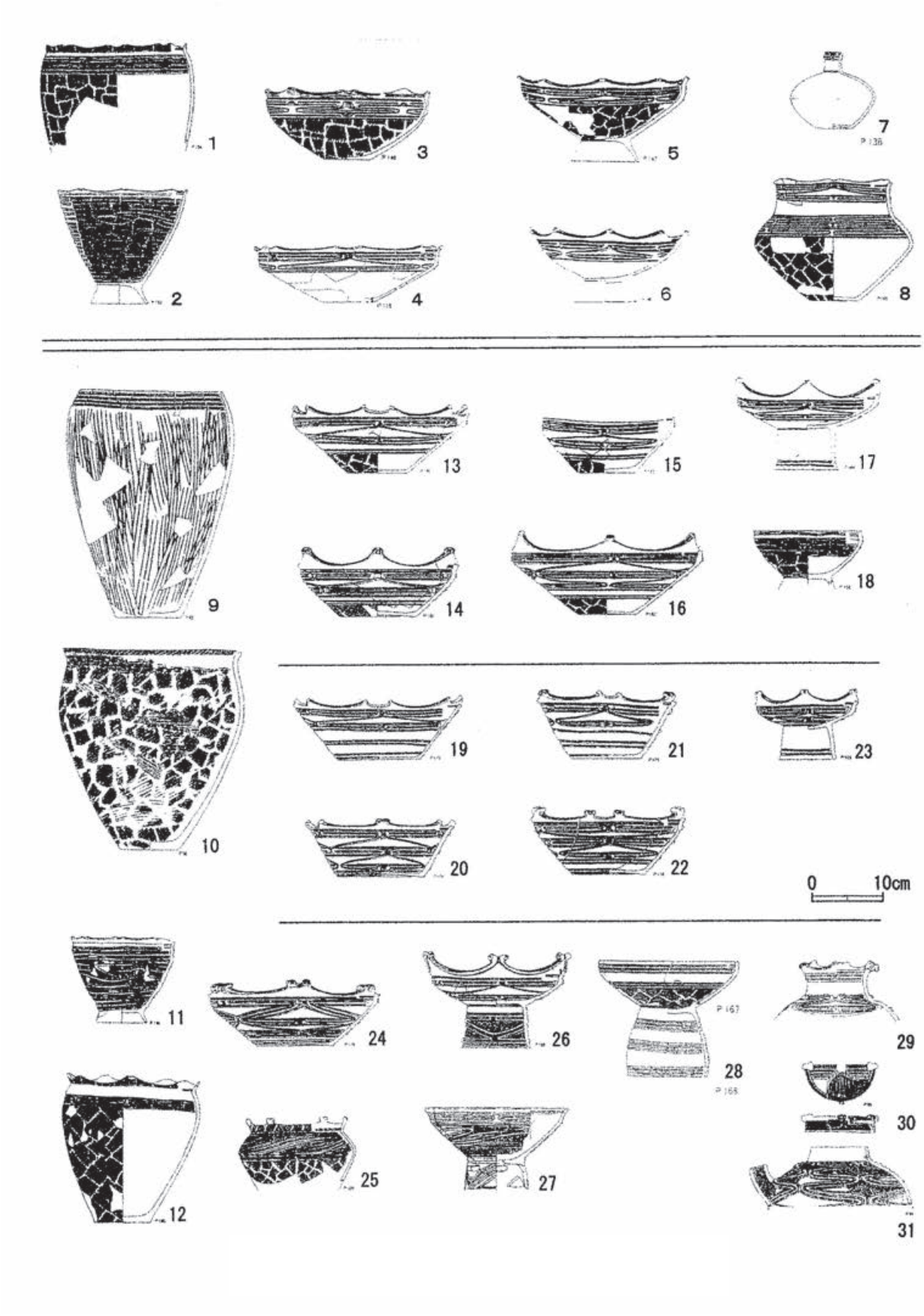
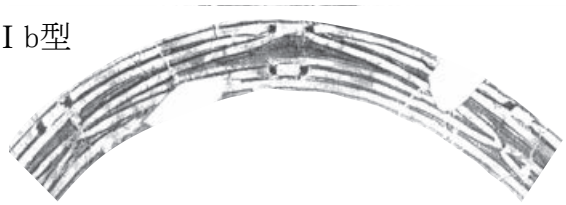


図56　大洞A'式から砂沢式にかけての型式段階変遷図（品川2005）

Ⅰa型

（図16-1拓本）

Ⅰb型



（図11-1拓本）

Ⅱ型

（図9-1拓本）

Ⅲ型

（図13-1拓本）

Ⅳ型

（図17-3拓本）

Ⅴa型

Ⅴb型

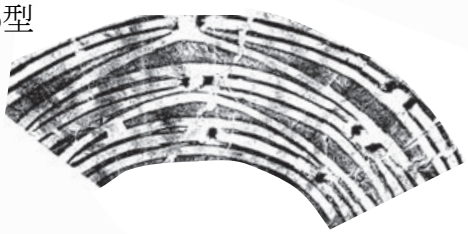
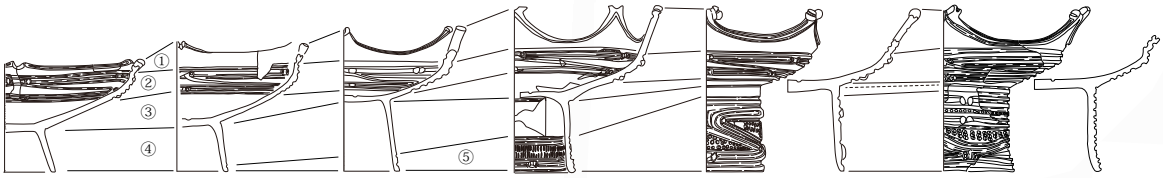


図57　大曲遺跡出土土器による変形工字文の分類　（図14-2拓本）



大曲１群	大曲２群		大曲３群	大曲４群
Ⅰa型	Ⅰb型	Ⅱ型	Ⅲ型	

図58　大曲遺跡出土の台付鉢の変遷と出土土器の分類

（３）大曲遺跡出土土器の細分

前述した変形工字文の分類と文様帯の変化に立脚すると、新谷氏採集による大曲遺跡出土土器は1～4群の細分が可能である（図59・60）。

大曲1群は変形工字文Ⅰa型が施文される土器群である。台付鉢（図7-2）、浅鉢（図7-1・7）、壷（図16-1・2）のほか、平坦口縁の浅鉢（図7-5）も同じ段階に位置づけられる。台付鉢・浅鉢ともに胴部下半に縄文施文されることが多い。全ての器種を通じて口縁部装飾は未発達であるほか、土器の作りとしては表面の研磨度合いが弱く、黄褐色の発色はほとんど見られない。

大曲2群は変形工字文Ⅰb型・Ⅱ型が施文される土器群である[5)]。文様帯幅が広くなるに従って沈線幅も広がる段階である。変形工字文Ⅰb型を持つ台付鉢（図11-1）は前段階に入れる考え方もあろうが、本論では口縁部装飾と台部文様を根拠に本群に分類しておきたい。台付鉢は山形口縁（図11-1～3）と平坦口縁（図12-2）があり、浅鉢も同様に2種類に分けられる（山形口縁：図8-1・2、平坦口縁：図9-1・2）。台付鉢の胴部下半には縄文施文がなされなくなる一方、浅鉢の一部や壷（図17-1）には残存する。台付鉢・浅鉢の表面には丁寧な研磨が施され、黄褐色～茶褐色を呈する精良な胎土が用いられている。

大曲3群は変形工字文Ⅲ型・Ⅳ型・Ⅴ（a・b）型が施文される土器群である。山形口縁を持つ台付鉢（図12-3・4）、口縁部突起を持つ浅鉢（図14-2）、平坦口縁の浅鉢（図13-3）、壷（図17-2・3）等で構成される。変形工字文が重層化すると共に、三角形モチーフを描く沈線が交点に接触せずに遊離する部位も見られるようになる。台付鉢と壷には、刺突文を充填する文様帯が生まれるのも本段階の特徴である。土器の表面は丁寧に研磨され、暗褐色の色調を呈するようになる。青森県立郷土館調査地点の出土土器群（図52～55上）は、当該土器群に該当すると考えられる。

大曲4群は変形工字文Ⅲ型が施文される土器群である。口縁部・台部ともに文様装飾が極めて発達する台付鉢（図15-1・2）によって構成される。本群の暗褐色を呈する胎土は極めて精良であり、光沢を持つ程研磨されている。本群に該当する浅鉢は復元可能個体の中には見られないが、新谷氏採集資料の破片資料中にはある（図25-6）。また砂沢遺跡出土土器では図14-3が該当する。

以上設定した4群は精製土器を基準としたものであり、他の器種については現時点では時期細分ができない。しかし、大曲3群に属する青森県立郷土館調査地点出土土器群を型式学的な単位と見れば、深鉢土器の大部分（図19-3～6）や壷（図21-2・4）は大曲2群に位置づけることが可能である。他方、波状文が施文される台付深鉢（図18-1）、沈線文によって山形モチーフを連続的に描く深鉢（図18-2）や類遠賀川系の壷（図21-1）は、残念ながら本遺跡出土遺物のみから時期の細別は難しい。特に図18-2は管見の限り本州側の類例に乏しいもので、油駒遺跡（北海道えりも町）出土の変形工字状文を持つ深鉢形土器（赤石・中岡2000）と類似すると言える。

従来知られている土器型式と比較するならば、大曲1群は大洞A’式に、同2～4群は砂沢式にそれぞれ相当することになるため、本論では砂沢式土器を3段階に細分したことになる。筆者による細分と、砂沢遺跡出土土器を用いた型式段階変遷（品川2005、図56）とを比較すると、型式学的な変遷の順序の大枠は一致すると言える。しかし、例えば品川氏の設定する「第二期」と大曲3群を比較した際、型式学的単位の捉え方に大きな違いがあると考える。また精製土器以外の器種の選定にも、遺構単位での段階設定なしでは賛同できない面がある。次に、大坂（2009a）が示し

た下北半島の八幡堂遺跡による型式変遷と比較すると、器種単位での津軽地域との地域差が大きいために直接比較が難しい一方、氏の設定する「梨ノ木平段階」・「戸沢川代段階」と大曲3群・4群は、共通の変化の画期を捉えており併行する可能性が高い。その一方で、品川（前掲：31）の指摘する「下北半島の土器群（戸沢川代式）」の影響が津軽地方に及んでいるかどうかについては、後続する五所式土器の系統の問題も含め、今後大いに検証する余地があろう。

（４）故・新谷雄蔵氏が砂沢式の研究に果たした役割

砂沢式が幾つかの段階に細分されることは、既に多くの研究者間で共有されているところである（矢島2000、品川2002・2005a、根岸2003、佐藤2009）。しかし実際には型式細分の基準が様々である上、砂沢式土器分布圏における小地域差についての議論が、これまでほとんどなされてこなかった点に最大の問題がある（中村1988:130、大坂2009a）。本論で示したような時期細別は、検討材料が増加してきた今日、まず遺跡単位、小地域単位で行われるべきであると筆者は考える。

一方、実際の遺物観察を基にして砂沢式の研究に取り組んでいた新谷が、時期細分まで試みていた事実は、他の研究者からほとんど取り上げられることがなかったため、最後に示しておきたい。新谷氏が、砂沢式の細分について最も直接的に論じているのは、大曲遺跡出土の土偶（本書の図22-1）についての報告論文の文末註である（新谷1980:186）。氏の記述は次の通りである。

Ⅰ期：B型三角工字文の施文が主体となる時期

Ⅱ期：A型・B型三角工字文の施文が組合って二～三段に施文される時期

Ⅲ期a: A型・B型三角工字文が重層化・隆線化し、単位文様に列点文・刺突文が充填される時期

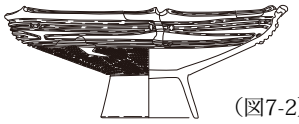
Ⅲ期b: A型・B型三角工字文が変形する時期

氏の設定する「A型」・「B型」の「三角工字文」は、本論で筆者が設定したⅡ型・Ⅲ型の変形工字文の別と一致するも、その出自の考察は現代から見て誤りが含まれる。限られた記述から判断すると、新谷氏は変形工字文の系統性でもって砂沢式の細分を試みていたことが伺われ、自身が採集した大曲遺跡・砂沢遺跡の土器を想定していたことは明らかである。しかし、上に示した砂沢式の細分と文様変遷図（新谷1975：21、付編）は必ずしも合致するものではないため、公刊論文のみから氏の考案した細分時期を推論することは極めて困難である。

とは言え、上記のような問題点を差し引けば、新谷氏は実際の出土遺物観察を基に、砂沢式の細分に関連して重要な点を指摘している。例えば列点文・刺突文の充填手法は砂沢式の中でも新しい段階に出現する要素で、変形工字文の複線化・隆線化に関連していること、施文部位がかなり限定されていると言及している（新谷1975:40）。また、例とした土器はそれに該当しないものではあるが、波状文や福浦島下層式（山王Ⅲ層式）の影響は砂沢式期でも最終末に出現するものとしている（前掲：39-40）。さらに、先に触れた土偶（図22-1）について、変形工字文の構成や刺突文の充填を根拠に、やはり砂沢式期の中でも最新段階に置く見方を示している。

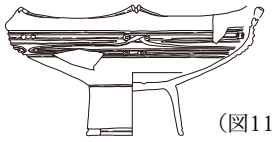
以上述べたような新谷氏の指摘は、砂沢遺跡の発掘調査が行われる前になされたものであり、採集された土器群そのものの重要性とともに、もっと着目されてよい先駆的業績と言えよう。

本研究は、平成26～27年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究B、研究課題番号：26770267）を受けて行われた研究成果の一部を含む。

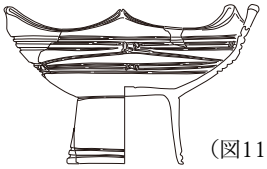


（図7-2）

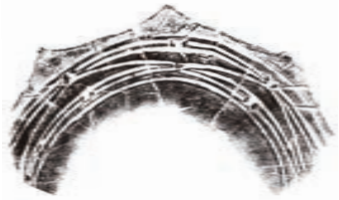
大曲１群

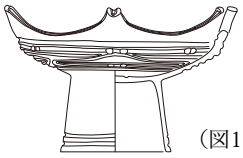


（図11-1）

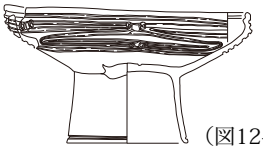


（図11-2）



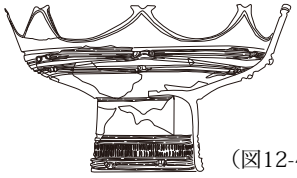


（図11-3）

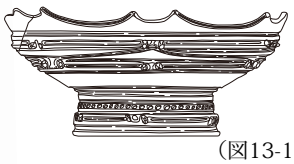


（図12-2）

大曲２群

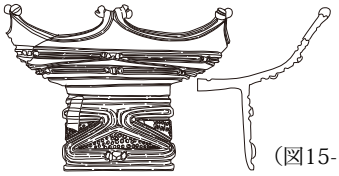


（図12-4）

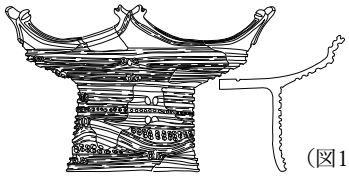


（図13-1）

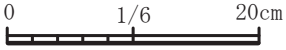
大曲３群



（図15-1）



（図15-2）



大曲４群

図59　大曲遺跡出土土器群による段階設定（１）

図60　大曲遺跡出土土器群による段階設定（２）

第２節　　北上川中流域における砂沢式併行土器

三浦一樹

津軽平野や秋田県北部・中部に広がる砂沢式土器は、矢島敬之（2000）や品川欣也（2002）、根岸洋（2003）らにより2・3段階に細分されるなど、多くの研究者の関心の的になっている。また、それに併行する前期弥生土器の地域的編年の追究も行われている。

本論では、地域編年の一助となるべく、北上川中流域における砂沢式併行土器を明らかにしていく[6)]。従来北上川流域には、山王囲遺跡の調査（伊東・須藤1985など）により山王Ⅳ上層式土器が広がるとされるが、公表資料は一部でありその型式内容は不明のままである[7)]。

近年北上川中流域では資料が増加し、特に金附遺跡のST01捨て場は良好な堆積状況を有する（金子・高木2006）。本遺跡を扱った研究者は、金子昭彦（2007）や斎野裕彦（2011）、大坂拓（2012）らが挙げられる。特に斎野は、良好な堆積状況を有するNⅢグリッドを扱い縄文時代晩期末から弥生時代中期の編年を組んでいる。筆者も斎野（前掲）を参考にし、本捨て場を分析し良好な堆積状況を有する2地点を得ることができたため、北上川中流域の一様相が把握できると考える。

1. 金附遺跡ST01捨て場の地点の選定

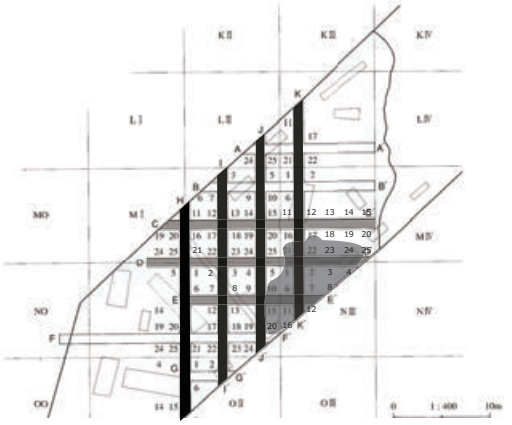
金附遺跡は岩手県北上市に所在し、北上川東岸の自然堤防上に立地している。ST01捨て場における分析対象の選定にあたっては、層が安定して堆積しているグリッドを選んだ。

セクション図や各ブロックの堆積状況（報告書pp.146-167）をみると、NⅢ区周辺には、4-5層が堆積していることがわかる。次いで、4-5層の上に堆積する4c層の分布を確認すると、おおよそ同じ広がりをみせる。さらに4c層の上に堆積する4層の分布を確認すると、やはり4-5層、4c層とほぼ同様の堆積範囲であることがわかる。これら3つの層が安定しているのは、斎野（前掲）が指摘するようにNⅢグリッドである。NⅢグリッドの4層より上には3層、1-2b・c層、2-3b2層、1-2層の順に堆積するが、前者3層は遺物が無いか、ごく僅かなため今回は扱っていない。

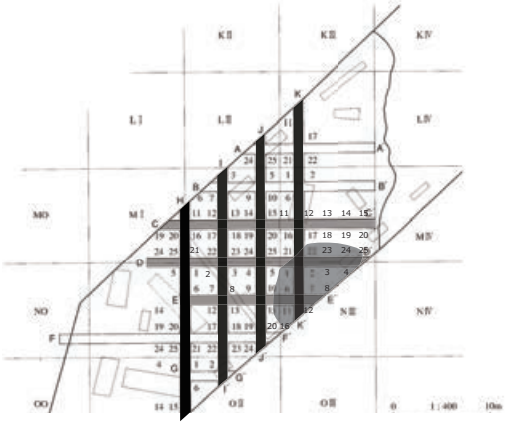
よって、NⅢグリッドの「4-5層」、「4c層」、「4層」、「2-3b2層」、「1-2層」を扱うこととする。なお、4c層はその厚さから上・中・下層に細分されているが、出土土器をみると大きな違いはみられないため、4c層一括で扱う。以下では本グリッドを「金附遺跡第1地点」と呼称する。

続いて「金附遺跡第2地点」を選定する。先の4-5層の堆積が始まるMⅢ21グリッドに着目すると、それより東には4c層が堆積し、西には4b層が堆積する。4b層の上層に位置することが多い3層は非常に広範に堆積している。ここで注意が必要なのは、MⅡ20・25グリッドの堆積状況である[8)]。ここでは明らかに4b層が3層の上に堆積している。しかし、大局的にみると4b層の上に3層が堆積することは間違いない。MⅡ20・25グリッド出土土器を確認しても、20では4b層からの出土はなく、25では3層からの出土はないようである。よって、本グリッドの層位の逆転で本層出土資料が資料的価値を失うことはないだろう。3層の上に堆積し、グリッドによっては4b層に堆積する2-3b2層の範囲は、3層ほど広がらないがNⅢ区にも広がる。上層である2-3b層は東西に長く分布する。

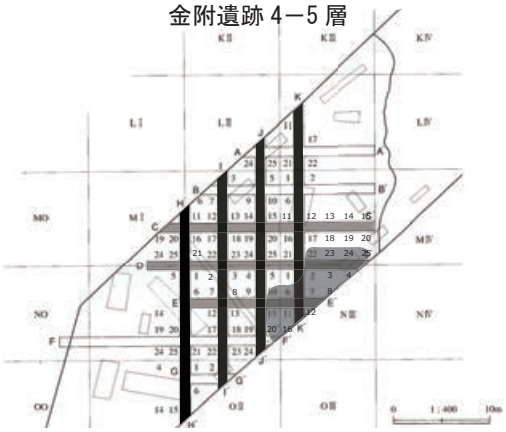
以上の4b層、3層、2-3b2層、2-3b層の範囲をみると、比較的安定して堆積が確認されるのは2-3b層の範囲の制約から、MⅠ19・20・25とMⅡ16～25グリッド周辺と考えられる。これら4つの層は大局的には4b、3層、2-3b2層、2-3b層の順に堆積する。よってこの操作が誤った結論を導く可能



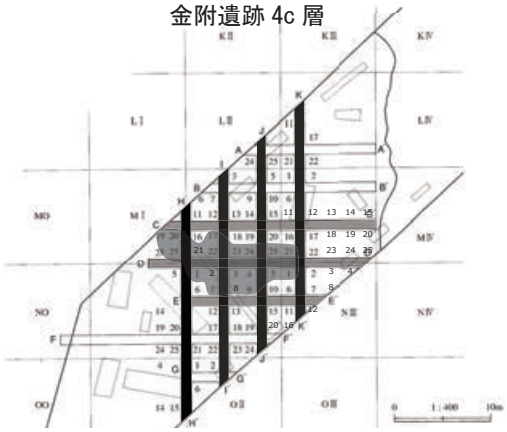
金附遺跡 4−5 層



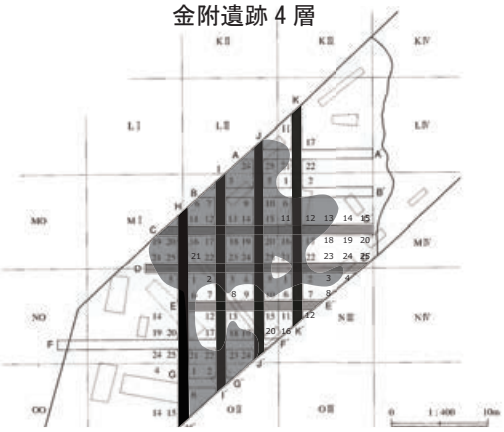
金附遺跡 4c 層



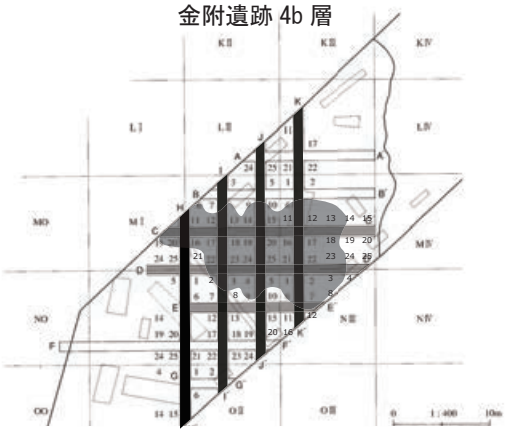
金附遺跡 4 層



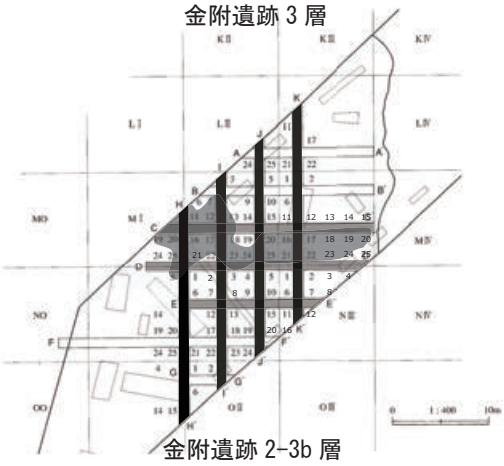
金附遺跡 4b 層



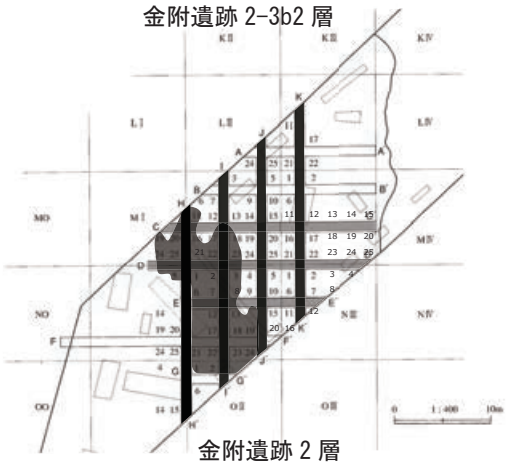
金附遺跡 3 層



金附遺跡 2-3b2 層



金附遺跡 2-3b 層



金附遺跡 2 層

図61　金附遺跡ST01捨て場層位1（報告書の一部を改変）

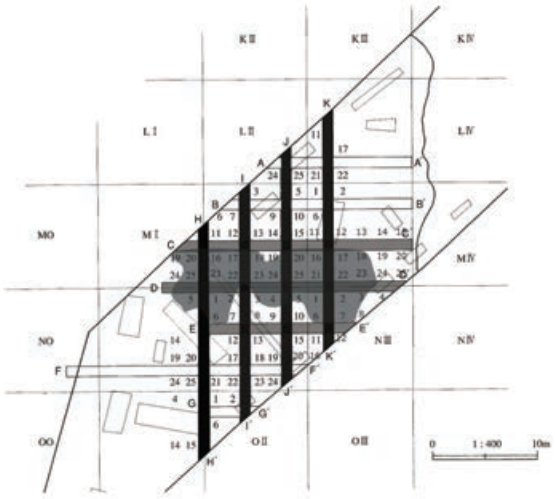


図 62　金附遺跡 ST01 捨て場層位 2（報告書の一部を改変）

性は低いと考えられよう。

さらに先の層が安定堆積するグリッドの上層を確認すると、その範囲には 2 層が堆積し、さらに 1-2 層がその上に堆積する。よって 2 層、1-2 層も分析対象にする。

以上煩雑になったが、MⅠ19・20・25、MⅡ16～25 グリッドの「4b 層」、「3 層」、「2-3b2 層」、「2-3b 層」、「2 層」、「1-2 層」出土土器を扱うこととし、以下では「金附遺跡第 2 地点」と呼称する。

２．各層出土土器群

以下では、各層出土土器群の説明を簡単に加える。

【第 1 地点】

1.　4-5 層（図 63）

浅鉢・台付浅鉢は口径が広く器高が低いものが多い。屈曲を持つ資料では厳密にいえば口径に対する器高が 1/3 以下程度の資料が多い（7・8）。鉢・深鉢は底部から緩く立ち上がるか頸部が屈曲するものが多い（16）。

文様は工字文類や匹字文、変形工字文などがみられる。浅鉢では文様帯が屈曲部上に収束する。

2.　4c 層（図 64）

浅鉢は 4-5 層と比較して器高が高く、屈曲部を持つものでは口径に対する器高が 1/3～1/2 以下程度に収まる（21・22）。また、口縁部に向かって直線的に開く器形（29～31）も増加する。鉢・深鉢は 4-5 層とそれほど変わらない。壺はなで肩で、底部がしっかりした印象を受ける（38）。

文様は変形匹字文や匹字文、変形工字文がみられる。特筆すべきは、佐藤祐輔（2008b）の「複線連結型変形工字文」が現れること（28・34）[9]、また浅鉢では文様下部に無文帯を作出することである（25～30）。また、22 のような半円形の変形工字文がみられることや、文様下部には地文縄文が残ることも特徴の一つである。

3.　4 層（図 65）

浅鉢は 4c 層と同様のものが多い。台付浅鉢の台部は 4-5 層と同様に「ハ」字状に開く。鉢・深鉢も同様だが、屈曲する体部を持つ 11 がみられる。

文様は複線連結型変形工字文などがみられる。下部には無文帯がみられる。

4.　2-3b2 層（図 66）

浅鉢は屈曲を持つものが減少し、直線的に開くものが主体となる。中には口縁部が外反する 18 もある。台付浅鉢の台部は「ハ」字状に開く。

変形工字文は減少し、流水形工字文（19・22）[10]やそれが縦位になるもの（18）、無文帯のみのもの（20・21）が増加する。台付浅鉢の台部には波状文が描かれる傾向にある。

1.　1-2 層（図 67）

台付浅鉢では口径が広くなる傾向にあるようだ。また坏高も高くなる。台部はやや直立する（39）。鉢は 40・41 のような体部屈曲鉢が特徴的である。

文様は流水形工字文が主体となり、32・33 のように副線が反転する主線に沿うものが多い。また副線が複数になる 35・36 もある。鉢でも流水形工字文が変化したような文様があるが（40）、これは異系統の可能性もある。

【第 2 地点】

1.　4b 層（図 68）

浅鉢は 4c 層と同じく、器高が高い傾向にある（2・5）。また、口縁部がやや外反する 7 もある。台付浅鉢も器高が高い 9 もあるが、量的には少ないであろう。台部は「ハ」字状に開く。深鉢は屈曲部をもつものがみられる。

文様は匹字文や複線連結型変形工字文などがみられ、無文帯を持つ資料が多い。台付浅鉢の台部は平行沈線が 2 段になるようだ。

2.　3 層（図 69）

本層は出土数が少なく傾向が掴みにくいが、浅鉢は体部が直線的に立ち上がるものが目立つ。壺はさらになで肩になるようだ。

文様は変形工字文や流水形工字文（20）がみられる。壺の口縁部は 4b 層（15）には匹字文が描かれるが本層は平行沈線のみである（26）。

3.　2-3b2 層（図 70）

浅鉢は屈曲を持つものもあるが（28）、直線的なものが多い（29・30）。台付浅鉢はやや坏高が高まるもの（35）がある。台部は「ハ」字状に広がる 38 と、やや筒状の 36・37 がある。壺はやや丸みを帯びる。

文様は変形工字文などがみられるが、副線の位置が変化した 29・35 や無文帯のみの 30・32・33 がある。文様下部には地文縄文が残る。台部は平行沈線が 2・3 段の 36・37 や、3 段の間に波状文が描かれる 38 がある。

4.　2-3b 層（図 71）

浅鉢は器高が高く屈曲部を持つ資料もあるが、直線的な体部の資料が多い。台付浅鉢は屈曲部があり、口径が広い資料が多い印象を受ける（5・6・9）。台部はやや筒状・「ハ」字状のものがある。

文様は無文帯のみのもの（1～4）、副線の位置が変化した流水形工字文（6・7～9）が多い。反転部が「π」字になる 5・9 は特徴的だが、少ない。

5.　2 層（図 72）

本層は資料数が少なく、詳細は不明である。その中でも資料数の多い台付浅鉢は、直線的に開く 20・23 や屈曲部をもつ 21・22 がみられる。台部は筒状のもの（24・25）がみられる。

文様は流水形工字文がみられるが、中には 24・28 のような磨消縄文もある。

6.　1-2 層（図 73）

浅鉢とわかる資料は少ない。台付浅鉢は 2 層とほぼ同一の器形になる。台部も同様である。壺は 42 のようにきついなで肩になる。文様は流水形工字文や磨消縄文が目立つ。

２．北上川中流域の砂沢式併行土器

これまで各層出土土器群の説明を加えてきた。以下では、北上川中流域における砂沢式土器の細分に対応する土器群について述べてみたい。

ST01 捨て場の各層の中で 4c・4・4b・3 層出土土器群は型式学的共通性を見出すことができる。それは、屈曲部を持つ器高のやや高い浅鉢（口径に対する器高が 1/3～1/2）、半円形の変形工字文と複

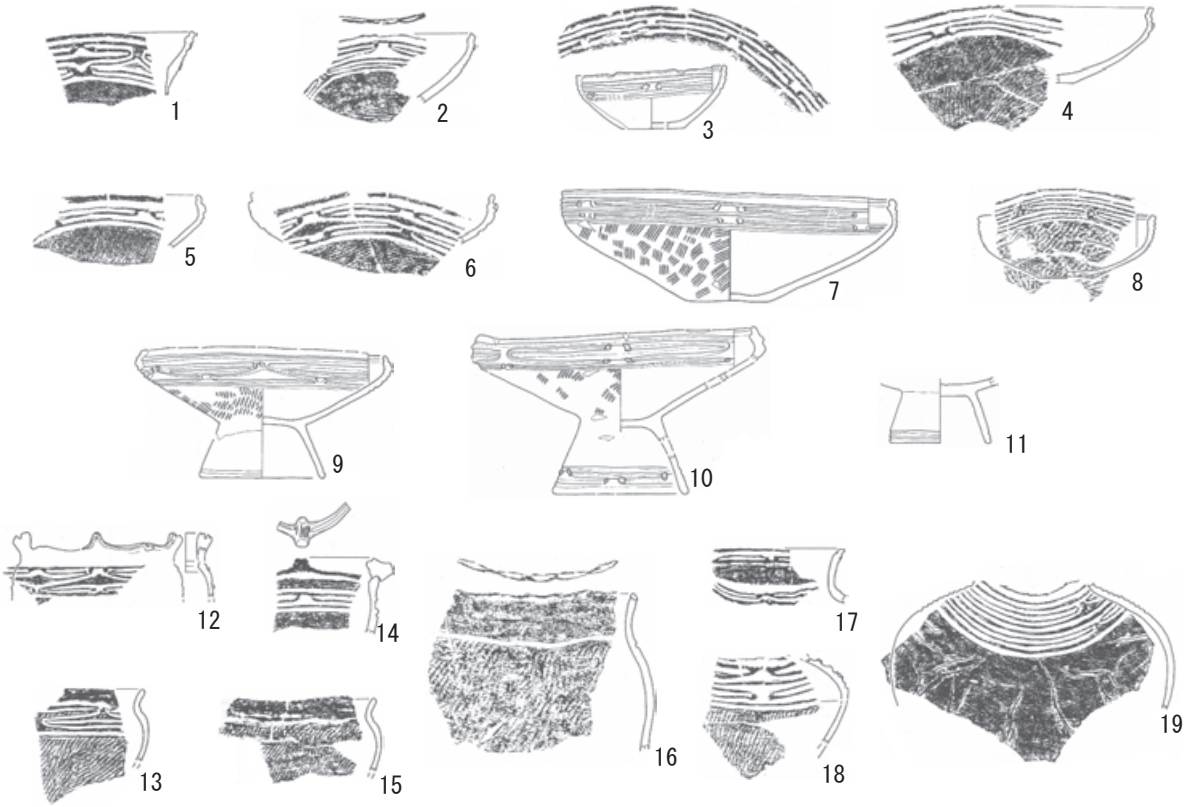


図63　ST01捨て場4-5層出土土器群

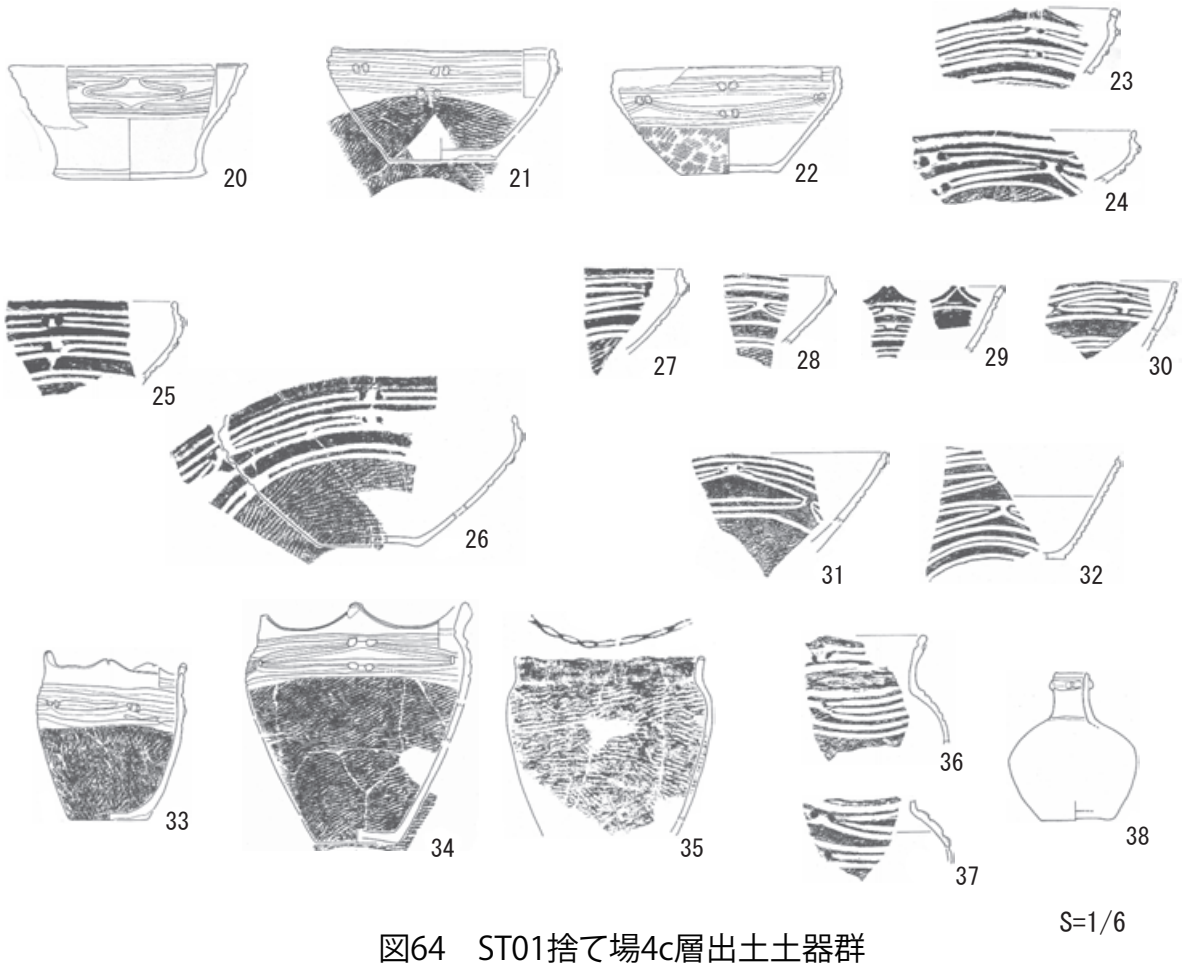


図64　ST01捨て場4c層出土土器群

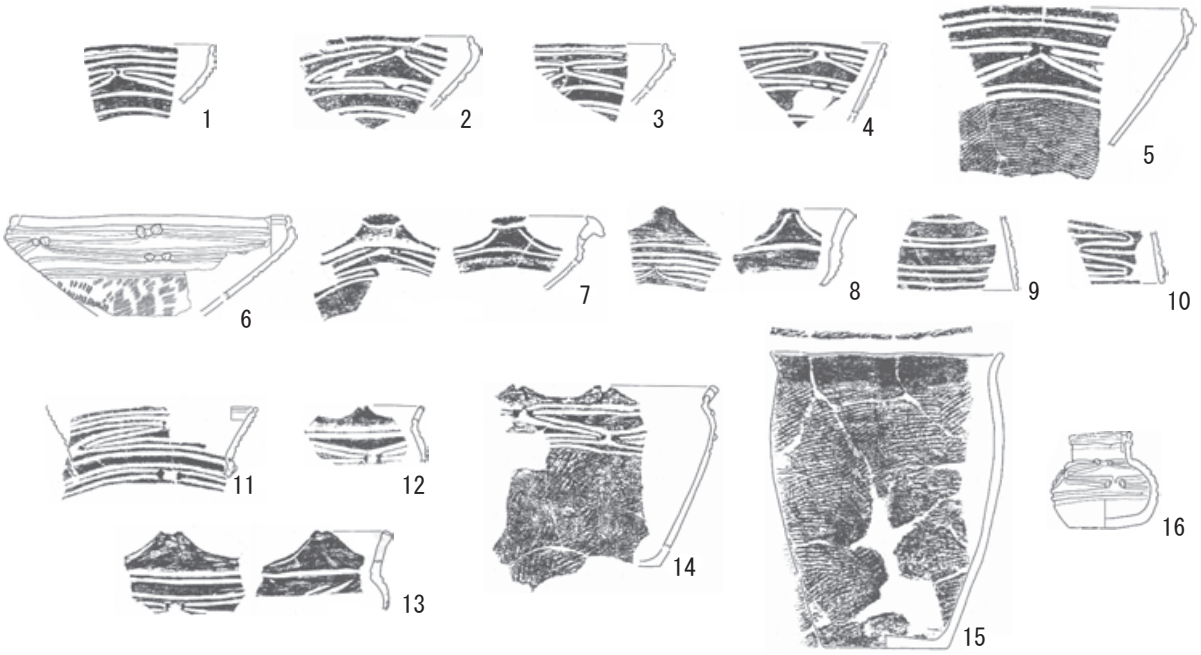


図65　ST01捨て場4層出土土器群

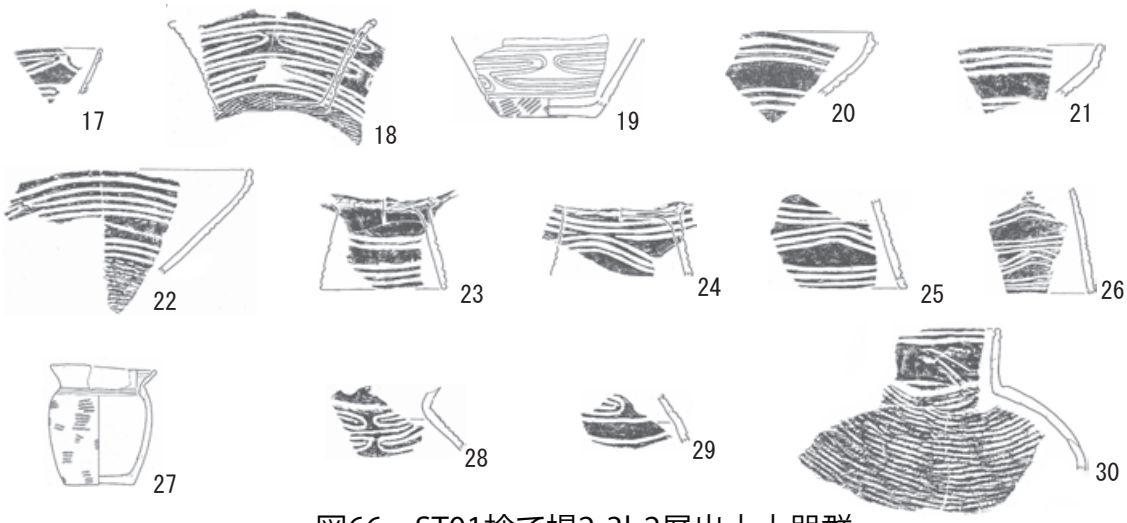


図66　ST01捨て場2-3b2層出土土器群

図67　ST01捨て場1-2層出土土器群

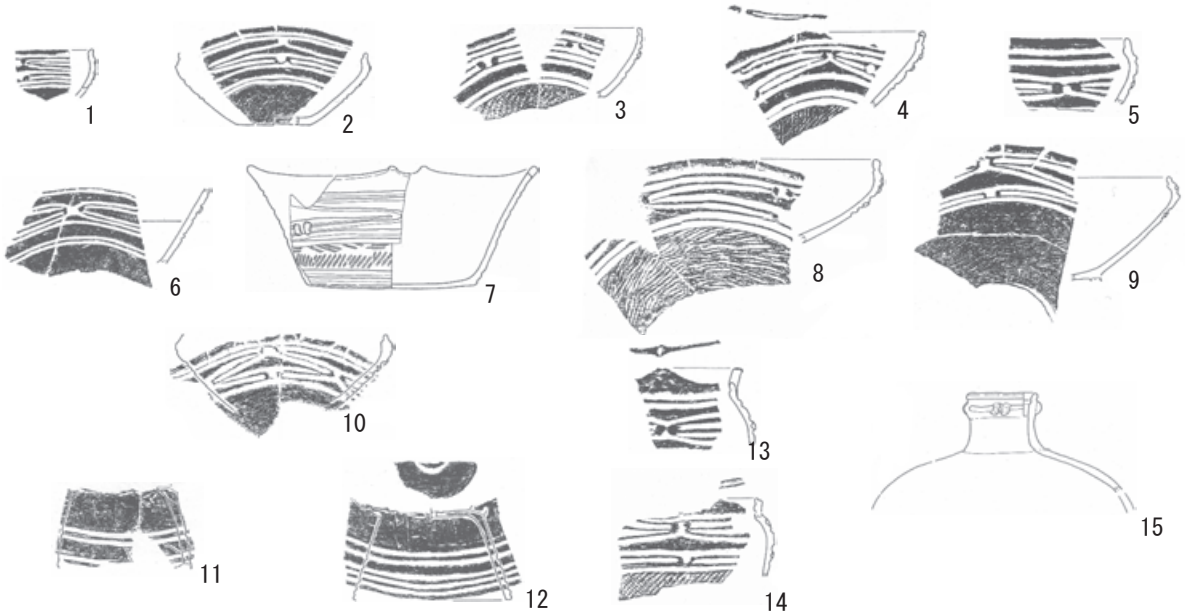


図68　ST01捨て場4b層出土土器群

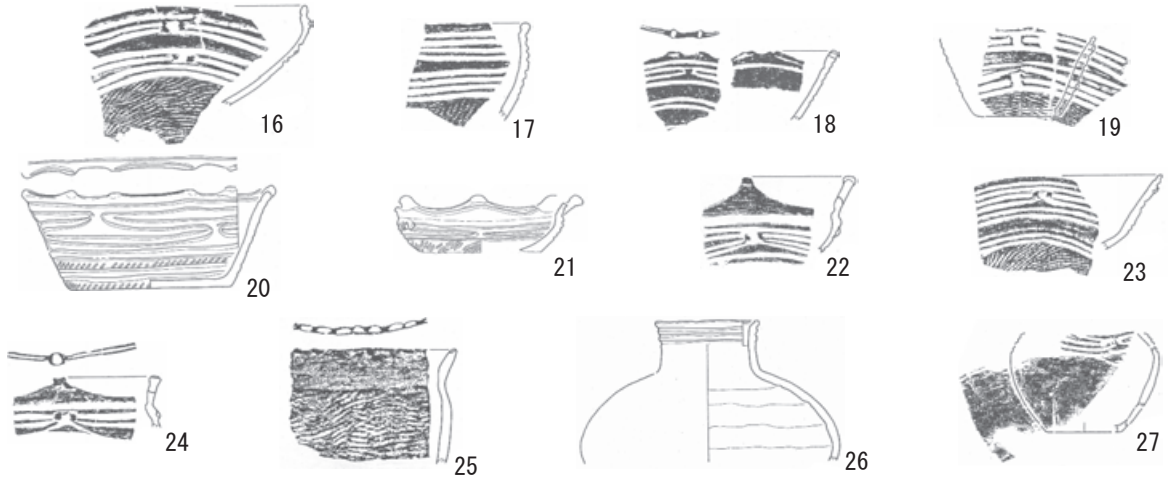


図69　ST01捨て場3層出土土器群

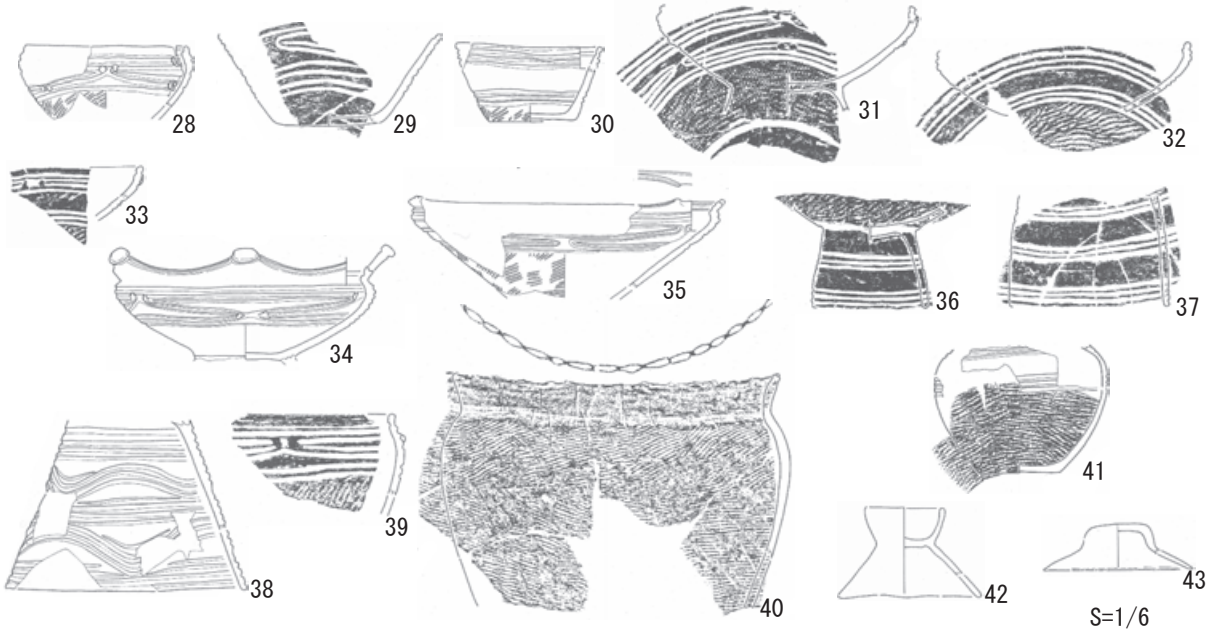


図70　ST01捨て場2-3b2層出土土器群

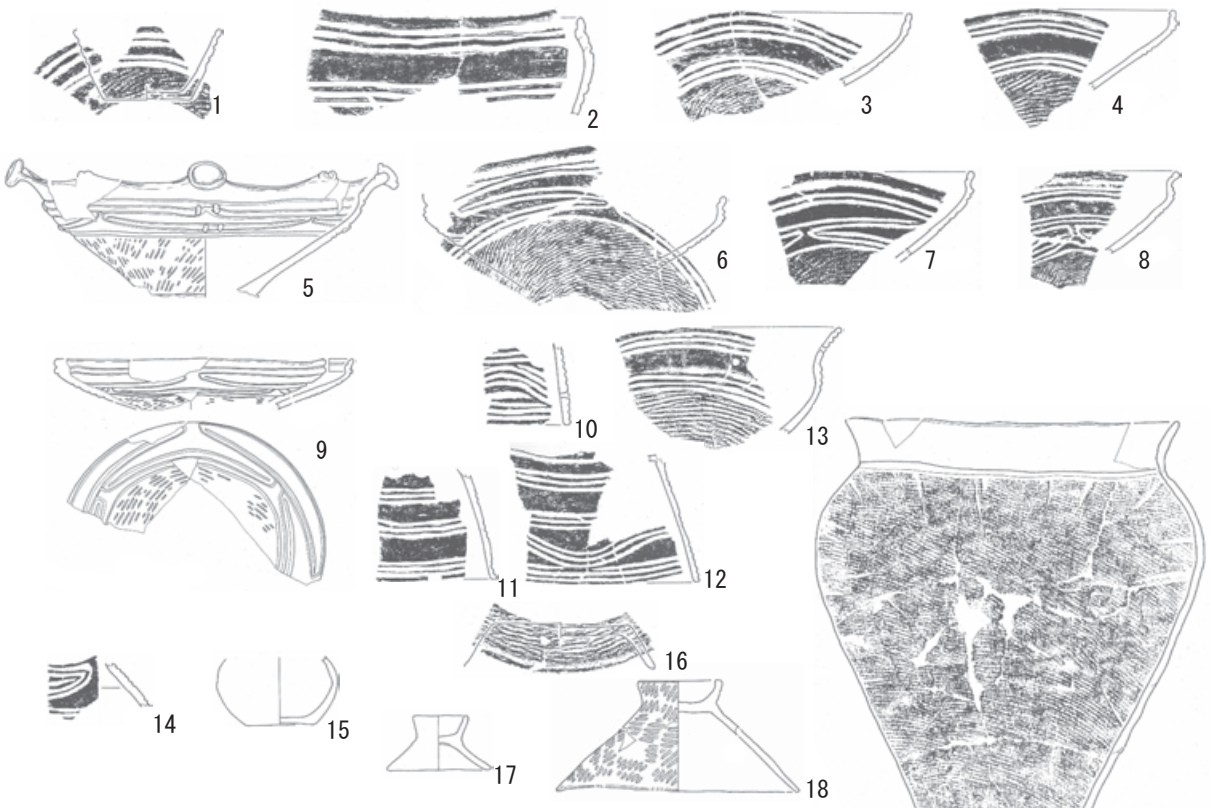


図71　ST01捨て場2-3b層出土土器群

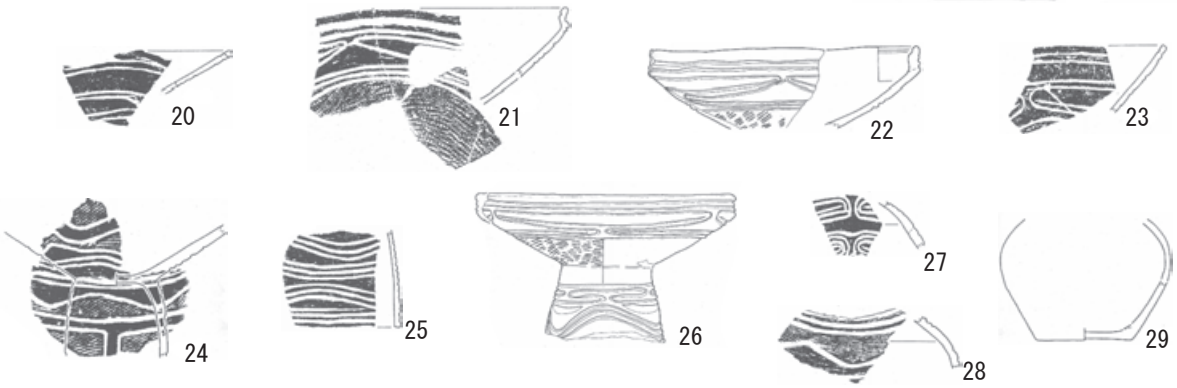


図72　ST01捨て場2層出土土器群

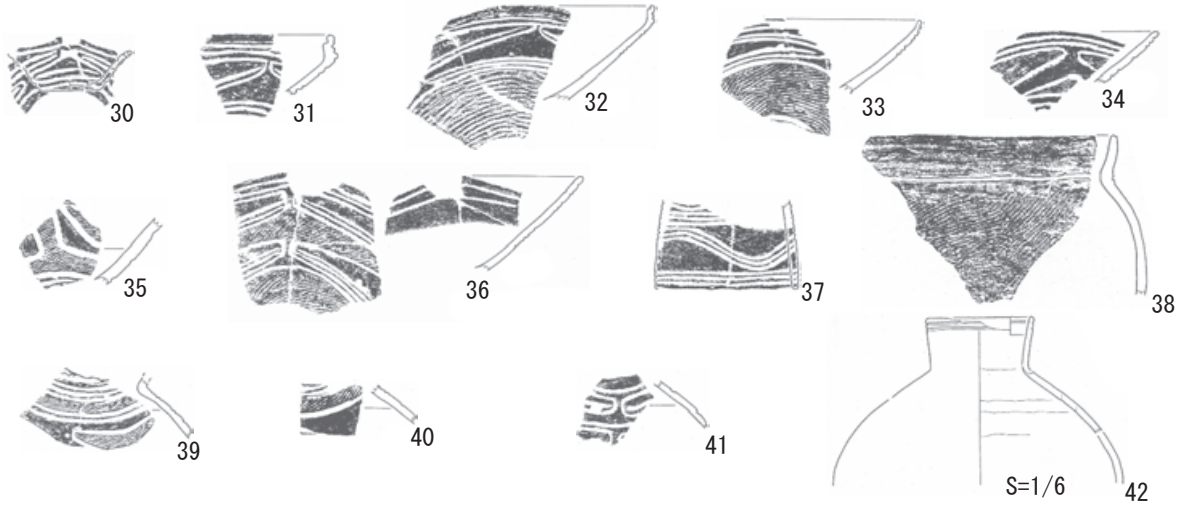


図73　ST01捨て場1-2層出土土器群

図 74　砂沢遺跡 a-8 区Ⅲ出土土器群（一部）

線連結型変形工字文、文様下部の無文帯である。これに対して 2-3b2 層出土土器群は、口縁部に向かって直線的に開く浅鉢、副線の位置の変化した流水形工字文と無文帯（単体）、台部の波状文などから、下層出土土器群と異なった様相を呈する。さらに 2-3b 層出土土器群では変形工字文がさらに減少し、流水形工字文と無文帯が主体となる。この上層である 2・1-2 層出土土器群は鳥畑寿夫（1955）の谷起島式土器に比定されよう（石川 2005a・b・c、品川 2005b）。

ここで根岸（前掲）が砂沢式古段階とした一、二段構成文様（A-1・B-1）を参考にし、砂沢遺跡（藤田他 1988・1991）の遺物集中区である a-8 区Ⅲ出土土器群を参照したい（図 74）。すると、およそ根岸の砂沢式古段階の範疇に収まる土器群として扱うことができよう。ここで注目したいのは文様下部に無文帯を作出する資料である。本遺跡では遺構外出土でも無文帯をもつ資料は多く、ST01 の 4c・4・4b・3 層出土土器と共通する。さらに浅鉢の器高も同様の傾向を示す。このように両土器群の浅鉢における型式学的共通性は強く、併行関係を想定することができよう。つまり、4c・4・4b・3 層出土土器群は砂沢式土器古段階に併行する蓋然性が高いといえる。2-3b2・2-3b 層は、その上層である 2・1-2 層が谷起島式土器に比定されることから、2 細分案では砂沢式新段階、3 細分案では砂沢式土器中～新段階に併行する可能性が高い。

この中～新段階併行の一群は後続する谷起島式土器への連絡をスムーズにし、且つ、従来青木畑式土器と呼称されてきた宮城県青木畑遺跡出土土器群との接触を明瞭に示す（加藤 1982）。その根拠となるのは、台部にみられる波状文や副線が主線に沿う流水形工字文である。波状文は平行沈線が描かれることの多い 4c・4・4b・3 層からの派生の可能性を考えるより、北上川下流域からの影響を想定すると理解しやすい。また、副線が主線に沿う流水形工字文と青木畑式土器に特徴的な「入組流水型変形工字文」（佐藤祐 2009）は、後者も主線に副線が沿うように描かれており、そこに両者の型式学的共通性を見出せる [11]。また、青木畑遺跡出土土器群には無文帯（単体）の台付浅鉢が出土しており、両地域の関係性を示すと考えられる。つまり、従来の青木畑式土器は砂沢式中段階もしくは新段階に併行する蓋然性が高いといえる。

以上、北上川中流域における砂沢式併行土器を追ってきたが、砂沢式土器中・新段階と 2-3b2・2-3b 層出土土器群との確実な共伴事例はなく、その可能性を示したに過ぎない。これまで砂沢式土器圏では層位的な出土事例はなく、各研究者の細分は型式学的操作に依拠するところが大きい。層位的事例がないならば、砂沢式土器圏外からその細分の妥当性を検証する必要があり、金附遺跡はその手がかりを与えてくれると考えている [12]。

謝辞

本稿は、弘前大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。執筆の機会を与えてくださいました根岸洋先生には、新谷雄蔵コレクションの資料化や見学に便宜を図っていただいたほか、多くの有益なご指導・ご教示を賜った。また、弘前大学の上條信彦先生、関根達人先生、岩手大学の佐藤由紀男先生には常日頃よりご指導いただいている。記して感謝の意を表する次第であります。

第３節　総括

本研究は、故・新谷雄蔵氏が収集された土器・土製品について再整理を行い、その考古学的位置づけを行うとともに、東北地方北部における弥生前期（Ⅰ期）の代表的な土器型式として知られる砂沢式の研究において、氏が果たした役割を改めて問い直すことを目的として実施した。

青森県立郷土館と新谷氏宅に所蔵されている、氏の収集遺物と関連資料（実測図・スケッチ・写真）との照合作業を実施したところ、当該収集品の大部分は大曲遺跡（青森県鰺ヶ沢町）からの採集資料が占めているものの、砂沢遺跡、尾上山遺跡（共に同弘前市）、原子遺跡（同五所川原市）等からの採集資料も混在していることが判明した。しかし『北奥古代文化』誌上に発表された論文（新谷1975）に掲載された大洞A’式・砂沢式の土器群については、復元可能個体に限定すると、大曲遺跡・砂沢遺跡の2遺跡からの出土に絞られることが分かった。

大曲遺跡の主たる時期は砂沢式期であるが、大洞A’式の土器や砂沢式期の土偶・土製品のほか、縄文時代後期・晩期前葉の時期の土器についても新谷氏が採集していたようである。新谷氏が大曲遺跡で資料採集を行った時期については、聞き取り調査等によって1947～1958年の間であることが分かった。氏の資料採集は、成田末五郎氏等による建石(3)遺跡（旧・大曲Ⅲ号遺跡）の踏査より前のタイミングで開始され、岩木山麓での学術調査が行われる1960年より前に完了したことになる。そして、『岩木山』の調査報告書が刊行された1968年以降に、新谷氏によって「旧・大曲Ⅴ号遺跡」という名称が定められたと推論した。

大曲遺跡・砂沢遺跡からの出土土器・土偶と土器破片資料については実測を行い、器種ごとに文様構成等の観察結果をまとめた。その結果、土器では浅鉢形・鉢形・台付鉢形・壷形・台付深鉢形・深鉢形・蓋形を、土製品では土偶・土版等の実測図を作成した。また、新谷氏によって作成されたと考えられる実測図集も合わせて掲載することで、本研究で行った照合作業の根拠を示すとともに、新谷氏の砂沢式に関する研究成果の一端についても示すことができた。結果として、1970年代に新谷氏によって実測図が示されながらも、出土遺跡名が示されなかったために言わば「未報告資料」扱いとなっていた土器及び土製品に対して、研究資源としての役割を与えることができたと考える。ただし、大曲遺跡出土と判明している刺突文土偶の1点（新谷1984）については所在不明である。

第3章では研究報告として、まず根岸が大曲遺跡出土土器を材料に細別を行い、従来の砂沢式を3段階に細別する変遷案を提示した。併せて新谷氏の持っていた編年観についても考察を行い、氏の研究を砂沢式の細別に関しての先駆的業績と位置づけた。次いで三浦が、北上川流域の金附遺跡（岩手県北上市）出土土器を分析対象に、砂沢式併行期の土器群とその併行関係について論じた。砂沢式の細別と周辺地域との併行関係についてはまだ未確定な部分があることから、中間地帯にある馬淵川・新田川流域に着目しつつ、今後も検討を重ねて行く必要がある。

大曲遺跡を中心に分析を行った本論は基礎研究に過ぎないものの、本書によって砂沢式土器の時期細別や小地域差についての議論が深まるとともに、新谷氏が砂沢式の研究に果たした学史的役割の再評価に繋げることができれば望外の喜びである。

末筆ながら、採集資料の保存記録を丹念に行われた新谷雄蔵氏に心より御礼申し上げたい。

（根岸）

註

1) この手書き草稿の大部分は前掲論文（新谷1975）と一致しているため、やはり執筆前に書かれたものとみなしてよいであろう。ただし作成年月日が「1950.1.5」となっている点は、前掲論文の発行が1975年4月30日であり、本文中に1970年代の引用文献があることからも明らかに不自然である。昭和50年（1975）年の間違いであろう。なお新谷氏は、論文タイトル案として「青森県、津軽地方における砂沢式土器文化の基礎的研究」、「砂沢式土器文化の大別と細別」というタイトルも検討していたようである。

2) 鰺ヶ沢町教育委員会が調査した地点も大曲遺跡として報告されている（新谷・川村1985）が、Ⅰ～Ⅴ地点とは立地する丘陵や主たる時期を異にしている。

3) 平成26年度に発掘調査が行われた新沢(1)遺跡からは、本書でいう大曲3・4群から五所式にかけての土器・土偶が出土している（茅野嘉雄氏のご教示による）。

4) 大曲遺跡ではこの他、粘土粒の貼付を伴わない工字文、あるいはそれに類するモチーフ（図7-5、図10-3・4、図16-2）、流水文に類するもの（図17-2）等が見られるが、ここでの分析では省略する。

5) ただし本段階に属する山形口縁を持つ浅鉢（図8-1・2）には、文様帯幅が狭いものの変形工字文Ⅲ型が施されている。砂沢遺跡出土の同様の土器群にも同じ文様構成が見られることから、文様と器種との組み合わせが決まっていた可能性があるが、本論の意図を越えるテーマであるので詳述しない。

6) 紙面の都合上、本論では定性分析を行うが、金附遺跡ST01捨て場ではある程度資料数が確保できるため定量分析も行うことができた。別稿でその詳細を論ずる予定である。

7) 山王Ⅳ上層式は不明瞭な土器型式ではあるが、宮城県大崎市にある北小松遺跡（小野2014）のD62・63区Ⅵa層出土土器群が該当する可能性がある。本土器群には金附遺跡に特徴的な文様下部に無文帯をもつ資料は少なく、文様帯が狭くみえる。筆者はこれを地域差と捉え、山王Ⅳ上層式の分布域を狭く捉えているが、これも別稿で詳述したい。

8) 報告書のMⅡ20・25グリッドを通るJ－J’ベルトと、各ブロックのセクション図を比較すると、やや堆積状況が異なる。

9) 佐藤は複線連結型変形工字文を大洞A’式期にも認めているが、筆者は金附遺跡の出土状況から砂沢式期から現れるものと考えている。

10) 流水形工字文は工藤竹久（1987）の「1.工字文」のネガ・ポジが逆転したものを指す。

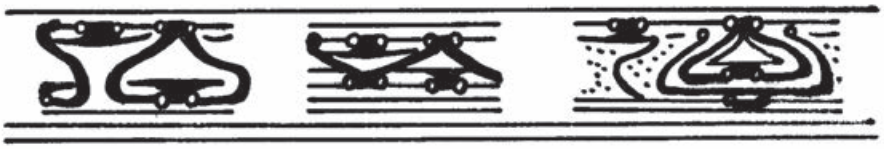
11) 筆者は北小松遺跡のD62・63区Ⅵa層出土土器群から青木畑式土器の変遷を想定しており、入組流水型変形工字文への変遷がスムーズになると考えている。別稿で詳述したい。

12) ST01捨て場の定量分析の結果を若干述べると、2-3b2層と2-3b層では変形工字文の資料数に違いがみられた。無文帯（単体）はほぼ同数みられる。筆者の細分が甘い可能性も否めない。その違いをもって3細分をすることも可能であるが、筆者は2・3細分案についてまだ結論を出せていない。

引用文献

赤石慎三・中岡利泰　2000　『油駒遺跡』えりも町教育委員会
新谷雄蔵　1975　「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」『北奥古代文化』7，17-42 頁
新谷雄蔵　1980　「青森県大曲 V 号遺跡出土の土偶と若干の考察」『考古風土記』5,181-188 頁
新谷雄蔵　1984　「大曲 V 号遺跡」『鰺ヶ沢町史　第 1 巻』，79-81 頁
新谷雄蔵・川村真一　1985　『大曲遺跡（発掘調査報告書）』町文化シリーズ 9，鰺ヶ沢町教育委員会
石川日出志　2005a　「岩手の弥生文化研究の諸問題　－土器型式と地域間交流を中心として」『岩手県における弥生前期から中期の諸問題－土器型式と地域間交流－資料集』岩手考古学会，1－12 頁
石川日出志　2005b　「北上川流域の谷起島式土器とその後続型式」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』
石川日出志　2005c　「弥生中期谷起島式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』17
伊東信雄・須藤隆　1985　『山王囲遺跡調査図録』一迫町教育委員会
大坂　拓　2009a　「Ⅲ－2.下北地域における初期弥生土器編年」『東日本先史時代土器編年における標識資料・基準資料の基礎的研究』安藤広道編　113－121 頁
大坂　拓　2009b　「大洞 A2 式土器の再検討－山形県天童市砂子田遺跡・山形市北柳 1 遺跡出土土器群の編年的位置」『考古学集刊』5　39－74 頁
大坂　拓　2012　「本州島東北部における初期弥生土器の成立過程」『江豚沢遺跡Ⅰ』，144-181 頁
小野章太郎　2014　『北小松遺跡』宮城県教育委員会
加藤道男　1982　『青木畑遺跡』宮城県教育委員会
金子昭彦・高木晃　2006　『金附遺跡発掘調査報告書』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2007　「大洞 A’式から青木畑式へ」『縄文時代』18，縄文時代文化研究会，145－178 頁
木村鉄次郎　1989　「西津軽郡鰺ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告」『青森県立郷土館調査研究年報』13，57-82
工藤竹久　1987　「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72－4　39－68 頁
齋藤　岳　2009　「故新谷雄蔵氏の収集品について」『青森県立郷土館研究紀要』33，45-60 頁
斎野裕彦　2011　「東北地域」『講座日本の考古学 5　弥生時代』，青木書，430-484 頁
佐藤祐輔　2008a　「東北地方南部における砂沢式並行期の土器」『第 6 回海峡土器編年研究会資料集』
佐藤祐輔　2008b　「変形工字文覚書―変形する「工字文」と変形する「変形工字文」―」『地域と文化の考古学Ⅱ』六一書房
佐藤祐輔　2009　「生石 2B 式と青木畑式」『地底の森ミュージアム・縄文の森広場研究報告』，5－20 頁
品川欣也　2002　「砂沢式土器の型式学―北日本先史時代史の再構築にむけて―」『2002 年度駿台史学会研究発表要旨』
品川欣也　2005a　「砂沢式土器の細分と五所式の位置づけ」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』，31-42 頁
品川欣也　2005b　「谷起島式土器の再評価」『岩手県における弥生前期から中期の諸問題　―土器型式と地域間交流―資料集』岩手考古学会　39-48 頁
須藤　隆　1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』23-2，25-50 頁
須藤　隆　1983　「東北地方の初期弥生土器―山王Ⅲ層式―」『考古学雑誌』68-3，1-53 頁
須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『伊藤信雄先生追悼考古学古代史論攷』，243-322 頁。
須藤　隆　2006　『川村（砂沢）遺跡資料』山内清男考古資料 16，奈良文化財研究所史料 74
須藤　隆編　1997　『岩手県花泉町中神遺跡の調査』
須藤隆・津嶋知弘　1993　「亀ヶ岡文化終末の研究―岩手県花泉町中神遺跡の調査―」『考古学ジャーナル』368
芹沢長介　1958　「縄文土器」『世界陶磁全集 1』，159-174 頁，平凡社
芹沢長介　1960　『石器時代の日本』，築地書房
高瀬克範　2000　「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』46(4)，34-53 頁
髙瀬雅弘編　2014　『山田野―陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年―』弘大ブックレットNo.12
田村誠一　1968　「大曲Ⅲ号遺跡」『岩木山　岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』，442-459 頁。
津嶋知弘　2005　「盛岡周辺の弥生前期土器群」『岩手県における弥生前期から中期の諸問題　―土器型式と地域間交流―資料集』岩手考古学会，25-38 頁
鳥畑寿夫　1955　「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25，37-42 頁
中村五郎　1988　『弥生文化の曙光』未来社
根岸　洋　2003　「砂沢式再考」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』18，1-20 頁
弘前大学教育学部考古学研究室　1981　「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について(1)-岩城山麓の縄文時代終末期の土器資料-」『弘前大学考古学研究』2，30-45 頁。
藤田弘道他　1988　『砂沢遺跡発掘調査報告書―図版編―』弘前市教育委員会
藤田弘道他　1991　『砂沢遺跡発掘調査報告書―本文編―』弘前市教育委員会
松本建速　1998　「大洞 A’式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」『野村崇先生還暦記念論集北方の考古学』，225-251 頁
村越　潔　1965　「東北北部の縄文式に後続する土器」『弘前大学教育学部紀要』14，24-36 頁。
矢島敬之　2000　「津軽・沢式直後土器雑考」『村越潔先生古稀記念論文集』，113-137 頁

付　　編



（新谷雄蔵氏所蔵の実測図集表紙より転載）

（発表題項）　青森県，津軽地方における砂沢式系土器群の分類的研究　（中間報告）　1973.11.18.

五所川原　新谷雄蔵

〔1.〕 研究の対象とした資料について．

a．青森県弘前市三和，砂沢溜池南岸出土の土器群．（1958．竹沢）　砂沢遺跡

b．青森県中津軽郡岩木町石沢，東岩木出土の土器群（1968．村越）　湯の沢遺跡．

c．青森県西津軽郡鰺ヶ沢町，大曲南箱出土の土器群（1947．新谷）　大曲V号遺跡

〔2.〕 砂沢式系土器群の編年的位置について．（縄文から弥生期へまで簡単に．）……→ 概観

☆参考．・大洞　B_1　B_2，BC_1，BC_2，C_1，C_2，A，A'　（亀ヶ岡式）（山内清男）

・大洞　A'——→ 砂沢式 ——→ 五所式 ——→ 田舎館式（1965 村越，1967 佐藤，村越）

・剣吉 ——江栄沢—— 宮野遺 三叉橋 瀬野 ——→ 田舎館式 ——→ 八幡堂 ——→ 念仏間？ ——→ 九貫沼

〔3〕 砂沢式系土器群の組成に関する概観と，分類について．

a（未見）

A群土器（縄製），	B群土器（無縄製），	C群土器（縄製），	D群土器（その他）
1. 台付浅鉢	1. 浅鉢	1. 台付深鉢	1. 土偶
2. 浅鉢	2. 壺型	2. 深鉢．壺型．	2. 土版
3. 鉢	3. 壺型	3. 浅鉢	3. 舌型
4. 壺型		4. 壺型．	4. 注口

〔4〕 A群土器の文様と，若干の考察

a，縄文の施文と，その原則について．　R{L/L} と L{R/R}．の原則性について．

b．施文等について．　① 口縁部．　② 口頸部．　③ 肩部．　④ 胴部．

C．A群土器の基本的単位文様について．——→（三角工字文の細分的考察）

・A型文様についての考察　☆A型，AA型，AB型文様

・B型文様についての考察　B'－1型，B'－2型，B'－3型，（B'－4型），☆B型

・その他の文様の概観．

〔5〕 砂沢式系，A群土器の分類について．（未完）

工類＝平縁　Ⅱ類＝液状口縁

(1) 台付土器（台付浅鉢形）（12類に細分）

a－1類		Ⅰ類
a－2〃		
b－1〃	b－1の1，b－1の2，b－1の3	Ⅱ類
b－2〃		
b－3〃	b－3の1，b－3の2	
c－1〃		
c－2〃		
d－1〃		
d－2類		

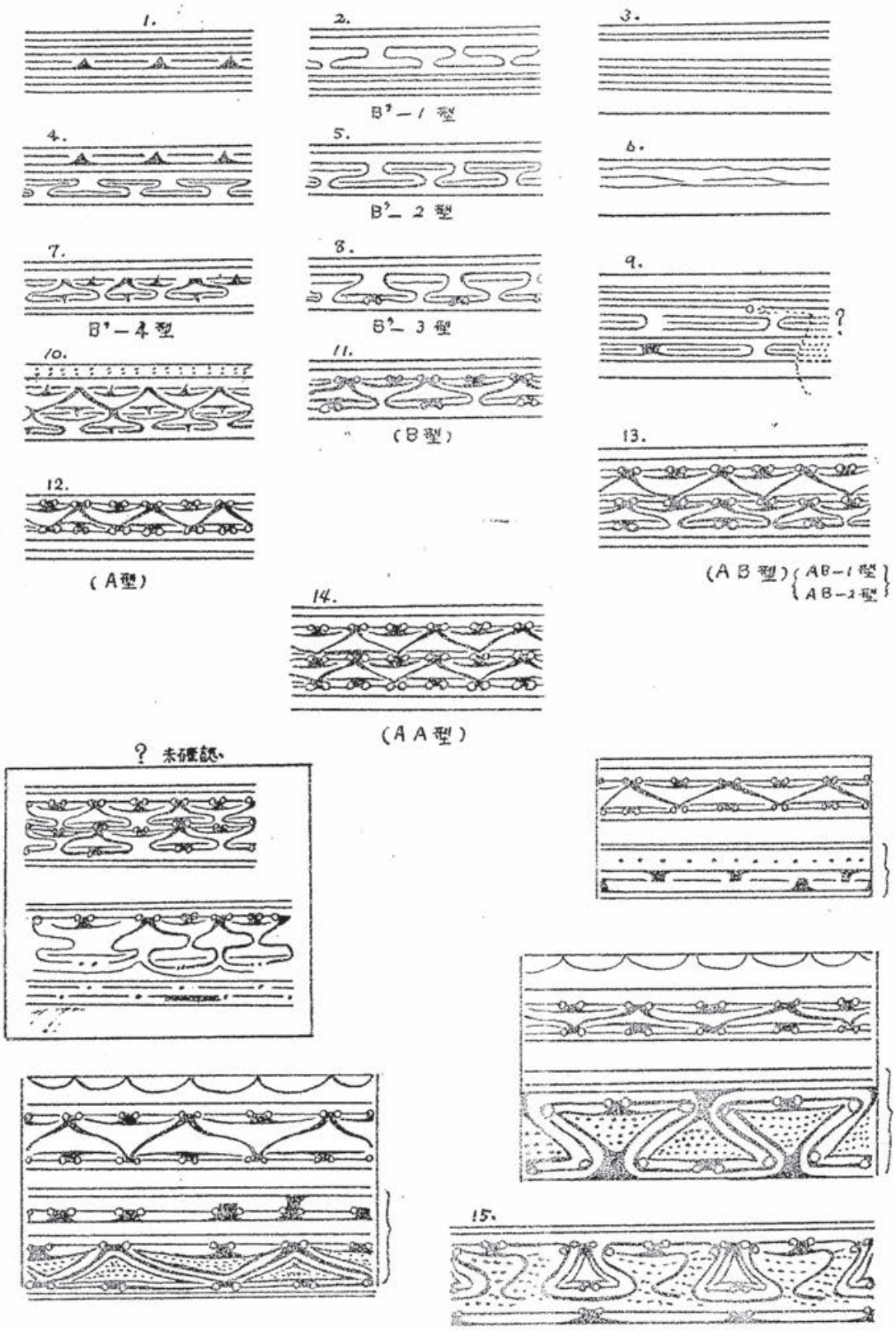
(2) 浅鉢型土器．（9類）

a－1類	Ⅰ類
a－2〃	
a－3〃	
b－1〃	~~Ⅱ類~~ Ⅰ
b－2〃	
c－1〃	
c－2〃	
d　類	
e　〃	

(3) 壺型土器（12類）

a－1類	Ⅰ類
a－2類	
a－3〃	
a－1〃	Ⅱ類
a－2〃	
b－1〃	
b－2〃	
c－1〃	
c－2〃	
d，〃	
e，f〃	

☆ 砂沢式系土器群の文様模式図．〔A群土器〕



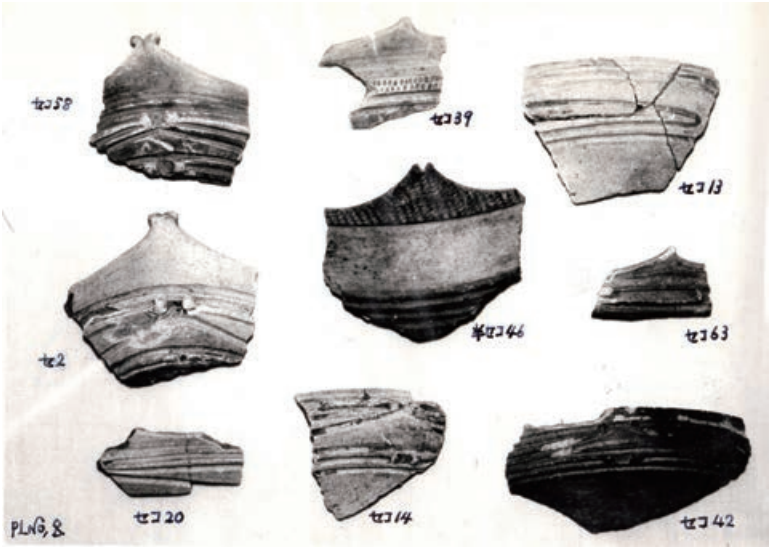
大曲遺跡の現況（根岸撮影、2015年）

新谷雄蔵氏が撮影した砂沢溜池と思われる写真（リバーサルフィルム）

新谷雄蔵氏が撮影した砂沢式出土写真（ネガフィルム）

写真図版1

新谷雄蔵氏による遺物整理状況(1)（ネガフィルム）



新谷雄蔵氏による遺物整理状況(2)（写真アルバムより）

新谷雄蔵氏による遺物整理状況(3)（写真アルバムより）

写真図版2

1（図7-1）

2（図7-2）

3（図7-3）

写真図版3

写真図版4

7（図8-1）

8（図8-2）

9（図9-1）

写真図版5

10（図9-2）

11（図10-1）

12（図10-2）

写真図版6

13（図10-3）

14（図10-4）

15（図11-1）

写真図版7

16（図11-2）

17（図11-3）

18（図12-1）

写真図版8

19（図12-2）

20（図12-4）

21（図13-1）

写真図版9

22（図13-2）

23（図14-1）

24（図14-2）

写真図版10

25（図14-3）

26（図15-1）

27（図15-2）

写真図版11

28（図15-3）

29（図16-1）

30（図16-2）

写真図版12

31（図16-3）

32（図16-4）

33（図17-1）

写真図版13

34（図17-2）

35（図17-3）

36（図18-1）

写真図版14

37（図18-2）

38（図19-1）

39（図19-2）

写真図版15

40（図19-3）

41（図19-4）

42（図19-5）

写真図版16

43（図19-6）

44（図20-1）

45（図20-2）

写真図版17

46（図21-1）

47（図21-2）

48（図21-3）

写真図版18

49（図21-4）

50（図22-1）
（表面）

50（図22-1）
（裏面）

写真図版19

51（表面）

51（裏面）

51（上から）

大曲遺跡出土の土偶（新谷氏所蔵ネガフィルムより）

写真図版20

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおまがりいせきしりょう・すなざわいせきしりょう
書名	大曲遺跡資料・砂沢遺跡資料
副書名	新谷雄蔵氏収集資料の報告
巻次	国際教養大学アジア地域研究連携機構研究報告書　第１集
シリーズ名	文化遺産研究報告
シリーズ番号	第1号
編著者名	根岸　洋・三浦一樹・長谷川大旗
編集機関	公立大学法人　国際教養大学アジア地域研究連携機構
所在地	〒010-1292 秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱193-2
発行年月日	西暦2016年(平成28年) ３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
大曲遺跡	青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字建石町	321	027	40° 50′ 9″	140° 17′ 50″	1947年～1958年	開拓工事に伴う採集
砂沢遺跡	青森県弘前市大字三和字下池神	202	012	40° 43′ 30″	140° 23′ 57″	不明	不明

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大曲遺跡	集落跡	縄文時代晩期～弥生時代前期		大洞A'式・砂沢式土器 砂沢式土偶・土製品	通称「大曲Ｖ号遺跡」
砂沢遺跡	集落跡 生産遺跡	弥生時代前期		砂沢式土器	

国際教養大学アジア地域研究連携機構研究報告書　第１集
文化遺産研究報告　第１号

大曲遺跡
砂沢遺跡

－新谷雄蔵氏収集資料の報告－

発行年月日　2016年3月31日
発　　行　公立大学法人国際教養大学
編　　集　アジア地域研究連携機構
〒010-1292 秋田県秋田市雄和椿川字奥椿岱
印　　刷　株式会社東海林印刷
〒010-0021 秋田県秋田市楢山登町7-51